天台寺跡

（上伊田廃寺）

田川市文化財調査報告書

第 6 集

1990

田川市教育委員会

天台寺跡

（上伊田廃寺）

1990

田川市教育委員会



天台寺跡周辺航空写真



天台寺跡周辺航空写真



金　堂　跡



塔　　跡

序

この報告書は、田川市上伊田の鎮西公園内に所在する天台寺跡（上伊田廃寺）の発掘調査の記録です。古くから著名な寺院跡として知られていましたが、その伽藍配置など不明なことが多く、その解明が急がれていました。このため昭和60年度から63年度までの４か年にわたって国庫補助事業として発掘調査が実施されました。この調査にあたり、ご尽力、ご協力いただきました九州歴史資料館、福岡県教育庁指導第二部文化課、福岡県筑豊教育事務所、地権者の田川護国神社ならびに関係者各位のご理解とご協力に対して深く感謝の意を表します。

尚、この調査につきましては九州歴史資料館の森田勉技術主査のもとに行われたものでありますが、同氏におかれましては報告書の刊行前の平成元年６月、交通事故のため急逝されました。謹んで哀悼の意を表する次第であります。このため報告書の刊行にあたりましては県文化課および九州歴史資料館職員の方々の特別なご尽力によりまして刊行できました。

この報告書が古代史研究の一資料として大いに活用されることを願っております。

平成２年３月31日

田川市教育委員会

教育長　角銅　圓

凡　例

1．本書は田川市が国、県の補助を受けて昭和60年度から昭和63年度にかけて実施した天台寺跡(上伊田廃寺)の発掘調査報告書である。

2．遺跡名については学術的根拠に乏しく、地名を採用して「伊田廃寺」とするのが適当ではないかとの意見もあったが、過去の経緯もあり混乱をさけるため従来どおり「天台寺跡」とした。

3．発掘調査は田川市教育委員会が事業主体となり、九州歴史資料館調査課の森田勉が担当した。

4．地形図の作成については福岡県指導第二部文化課嘱託、日高正幸氏にお願いした。

5．遺構の方位については磁北から6°10′東へ振った線を基準とした。

6．遺構、遺物の写真は九州歴史資料館学芸第一課の石丸洋の撮影による。

7．遺物の整理、復元作業は九州歴史資料館において岩瀬正信整理指導員の下に行った。

8．本書の執筆については調査担当者である森田勉が交通事故により急逝したため九州歴史資料館の石松好雄、栗原和彦、横田賢次郎、赤司善彦、吉村靖徳が中心となって担当したが、Ⅰ－1・2を福岡県筑豊教育事務所技術主査、新原正典が、ⅡおよびⅢ－1を田川市石炭資料館長、花村利彦が執筆した。なおⅥ「まとめ」の内容に関しては発掘調査中に記録された発掘調査日誌、発掘調査指導委員会議録および担当者の講演会レジュメなどを基にして森田勉がそれらの中で提起した結論なり問題点をできるだけ忠実に記述するようにつとめた。

9．本書の編集は遺構実測に参加した横田賢次郎が担当した。

目　次

序
Ⅰ　はじめに……1
1．調査にいたるまで……1
2．調査関係者……1
Ⅱ　遺跡の位置と環境……4
Ⅲ　調査の経過……6
1．既往の調査……6
2．発掘調査概要……7
3．調査日誌……8
Ⅳ　遺構……13
1．金堂……13
2．塔……15
3．講堂……17
4．回廊……18
5．その他の遺構……22
Ⅴ　遺物……24
1．瓦塼類……24
2．土器……35
3．その他の遺物……37
Ⅵ　まとめ……40
Ⅶ　弥生時代の遺構と遺物……45
1．遺構……46
2．遺物……48
3．小結……54
Ⅷ　付篇
天台寺跡関係主要文献

挿図目次

第1図　周辺主要遺跡分布図……3
第2図　天台寺跡周辺図……4
第3図　発掘風景……12
第4図　天台寺跡遺構配置図……13
第5図　金堂跡SB001遺構配置図……14
第6図　金堂跡礎石配置図……14
第7図　金堂跡礎石移動想定図……14
第8図　塔跡SB010、東面回廊SC003遺構配置図……15
第9図　講堂跡SB005、掘立柱建物SB025・030遺構配置図……16
第10図　講堂跡基壇土層図(掘り込み地業)……17
第11図　講堂跡基壇土層図(掘り込み地業)……18
第12図　南面回廊SC002、掘立柱建物SB035遺構配置図……19
第13図　北面回廊SC004遺構配置図……20
第14図　西面回廊SC006、北面回廊SC004、掘立柱建物SB015・020遺構配置図……20
第15国　礎石・柱掘形・塔心礎実測図……21
第16図　軒丸瓦拓影・実測図……25
第17図　軒平瓦拓影・実測図……26
第18図　丸・平瓦拓影・実測図……28
第19図　丸瓦拓影・実測図……29
第20図　平瓦拓影・実測図……31
第21図　平瓦B類手法模式図……32
第22図　道具瓦拓影・実測図……33
第23図　天台寺瓦窯出土平瓦拓影・実測図……34
第24図　出土土器実測図……36
第25図　風招実測図……37
第26図　環状土製品実測図……37
第27図　筒形土製品拓影・実測図……38
第28図　九輪実測図……39
第29図　九輪復元図……39
第30図　天台寺跡伽藍復元模式図……41

第31図　天台寺跡・同瓦窯出土軒瓦拓影……44
第32図　弥生時代遺構配置図……45
第33図　住居跡SB050実測図……46
第34図　土壙SK051・052・053・054・056実測図……47
第35図　土壙SK051・052・053・054出土土器実測図……49
第36図　土壙SK056・057出土土器実測図……50
第37図　土壙SK018・062・067出土土器実測図……51
第38図　層位出土土器実測図……52
第39図　出土石器、砥石実測図……53

図　版　目　次

図版１　天台寺跡周辺航空写真
図版２（上）金堂跡SB 001調査区全景（東から）
（下）金堂跡SB 001調査区全景（南から）
図版３（上）（中）（下）金堂跡SB001礎石
図版４（上）塔跡SB010調査区全景（南から）
（下）塔跡SB010調査区全景（西から）
図版５（上）（下）塔心礎
図版６（上）塔跡東側地域（北から）
（下）塔跡東側地域（南から）
図版７（上）講堂跡SB005調査区全景（西から）
（下）講堂跡SB005南半部（西から）
図版８（上）講堂跡SB005西半部（南から）
（下）講堂跡SB005北半部（西から）
図版９（上）（中）（下）講堂跡SB005礎石
図版10（上）南面回廊SC002付近（北から）
（下）南面回廊・東南隅SC002（西から）
図版11（上）東面回廊SC003（北から）
（下）東面回廊SC003・塔跡SB010（南西から）
図版12（上）北面回廊・東北隅SC004（西から）
（中）北面回廊・東北隅SC004（東から）
（下）北面回廊SC004掘立柱穴

図版13（上）北面回廊・西北隅SC004（東から）
（下）北面回廊・西北隅SC004（北から）
図版14（上）西面回廊SC006（南から）
（下）西面回廊SC006、掘立柱建物SB015・020（東から）
図版15（上）掘立柱建物SB015全景（南から）
（下）掘立柱建物SB015近影（南から）
図版16（上）掘立柱建物SB025（西から）
（下）掘立柱建物SB030（東から）
図版17（上）竪穴住居跡SB050（西から）
（下）土壙SK051(南から)
図版18（上）土壙SK052・053・054（北から）
（下）土壙SK052・053・054近影（南から）
図版19　出土軒丸瓦
図版20　出土軒平瓦
図版21　丸瓦・平瓦
図版22　丸瓦
図版23　平瓦
図版24　道具瓦、平瓦一枚作り
図版25　天台寺２号窯出土平瓦
図版26　出土土器
図版27　土製風招・その他の土製品・銅製九輪
図版28　土壙SK051・052・053・054・056出土土器
図版29　土壙SK056・057・018・062出土土器
図版30　土壙SK018・062・067、層位出土土器
図版31　出土石器、砥石

天台寺跡（上伊田廃寺）

正　誤　表		
頁　行	誤	正
1　27	主任　武内	〃　武内
2　9	田川市立石炭	田川市石炭
15	宇都宮正之	宇都宮正元
4　7	玄海灘	玄界灘
6　12	法起寺式ではないと考	法起寺式ではないかと考
7　15	明きらか	明らか
16	重復	重複
23	明きらか	明らか
10　9	東辺・西辺	東辺・北辺
22　4	重復	重複
42　4	されたもものと	されたものと
図版24	最上段の写真が天地逆 A→D，B→C，C→B，D→A	

Ⅰ　はじめに

1．調査にいたるまでの経過

福岡県田川市に所在する天台寺跡は優美な新羅系古瓦を出土する寺院跡として古くから知られていた。この天台寺という名称は『應永戦覧記』に「勾金の天台寺は、往昔伝教大師帰朝の時、香春の宮に参籠し、修法満散して田川郡に十八個の伽藍を建て、天台別院と号して……」とあり、これに拠るものであろう。

その天台寺跡も、つい半世紀前までは基壇や礎石群が残っていたが、第二次大戦中の昭和18年にグライダーの滑空練習場建設のために削平されてしまい、礎石はすべて穴の中へ埋め込まれてしまった。このため今日ではその面影を留めるものは何も残されておらず、ただ若干の古瓦類と戦前に鏡山猛等が行った測量調査の報告があるくらいで、詳細なことについては、ほとんど不明であった。

ところで、近年における相次ぐ発掘調査は県内の主要な古代寺院跡についても手が及ぶようになり、その実態が明らかにされつつある。このような状況のなかで田川市教育委員会においても天台寺跡の重要性を認識し、これまでにも、その保護に努力してきた。しかしながら将来の指定と保存のためには、何といっても基礎資料と学術的位置付けが必要であり、このため昭和60年度より国庫補助事業として発掘調査を行うことが決定された。当初の計画では発掘調査期間を３ヶ年としたが、伽藍配置等について２、３の問題が生じたため、調査は１年延長された。

2．調査関係者

昭和60年度の発掘開始から平成元年度の報告書刊行までの調査関係者は下記のとおりである。

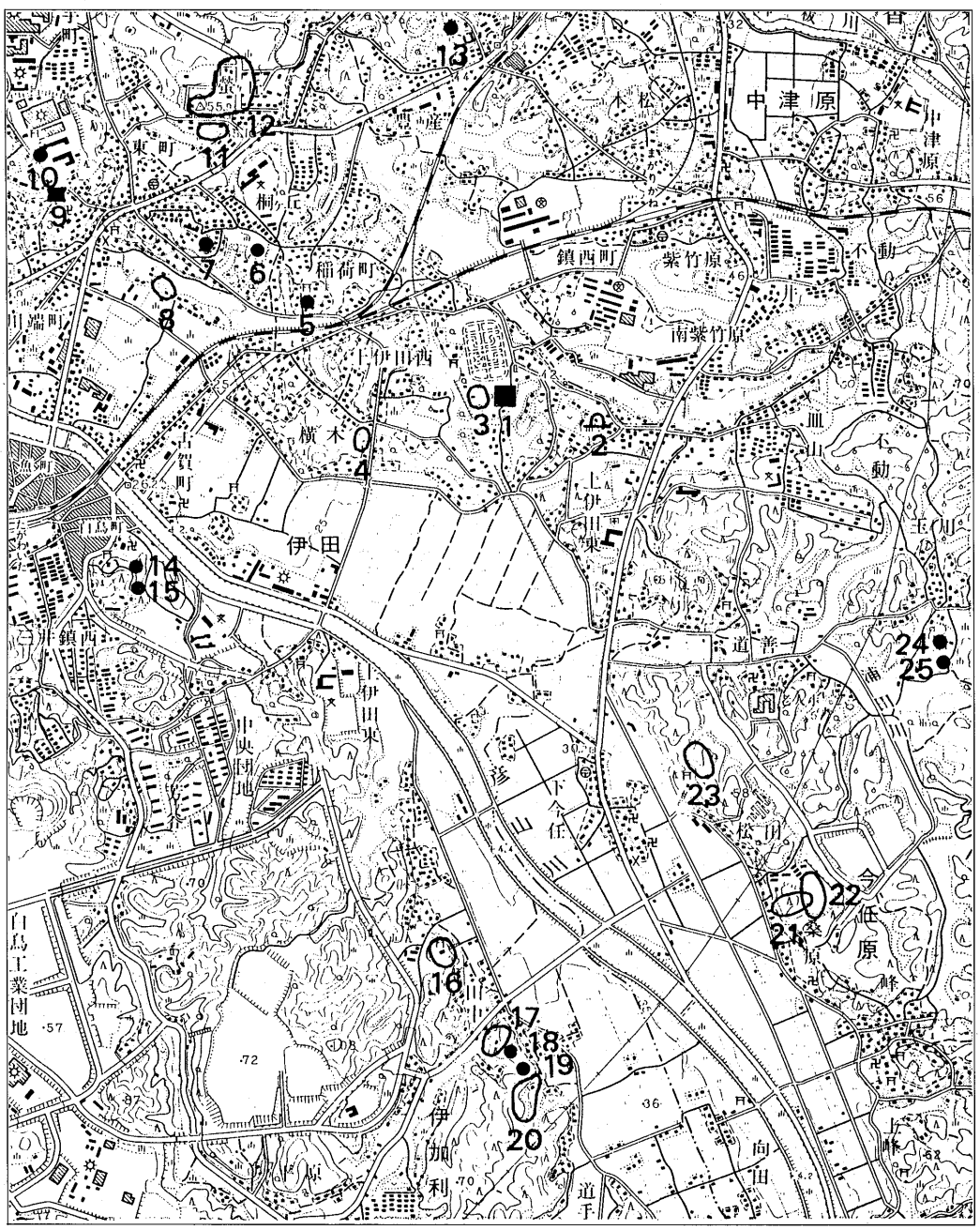
田川市教育委員会	教育長	角　銅　　圓
	教育次長	加　来　英　幸
	文化体育課長	西　村　　勝
	〃　課長補佐	平　　賢　一
	〃　係長	矢　野　勝　美
	〃　〃	清　水　弘　子
	〃　〃	武　内　　久
	〃　主任	橋　岡　佑　子
	〃　学芸員	森　本　弘　行
	〃　嘱託	原　田　拓　己

	文化体育嘱託	花　村　　究
	〃	上　野　智　裕
筑豊教育事務所	技術主査	新　原　正　典
九州歴史資料館	〃	森　田　　勉（調査担当）

発掘調査指導委員

横　山　浩　一（九州大学名誉教授）
沢　村　　仁（九州芸術工科大学教授）
小　田　富士雄（福岡大学教授）
花　村　利　彦（田川市立石炭資料館長）
石　松　好　雄（九州歴史資料館調査課長）
栗　原　和　彦（九州歴史資料館参事補佐）

なお、発掘調査に際しては福岡県教育庁指導第二部文化課、九州歴史資料館、筑豊教育事務所から種々の指導を得た。また長期にわたる発掘作業には地元の上伊田地区、田川高齢者事業団の方々の協力を得た。さらに今回の天台寺跡発掘調査事業を当初の目的通りに完遂できたのも、ひとえに土地所有者である田川護国神社（宇都宮正元前宮司、阿部重宏宮司）の御理解と御協力の賜であり、ここに明記して御礼申し上げる。



1．天台寺(伊田廃寺)　6．猫迫１号墳　11．螢ヶ丘遺跡　16．岩亀八幡横穴群　21．明神山遺跡
2．天台寺瓦窯跡　7．セスドノ古墳　12．螢ヶ丘横穴群　17．田中横穴群　22．明神山横穴群
3．鎮西公園内遺跡　8．先法月遺跡　13．一本松古墳　18．田中古墳　23．柳瀬山横穴群
4．横木遺跡　9．夫婦塚　14．成導寺公園内１号墳　19．伊加利古墳　24．玉川１号墳
5．猫迫２号墳　10．香春隠神社古墳　15．成導寺公園内２号墳　20．六角堂横穴群　25．玉川２号墳

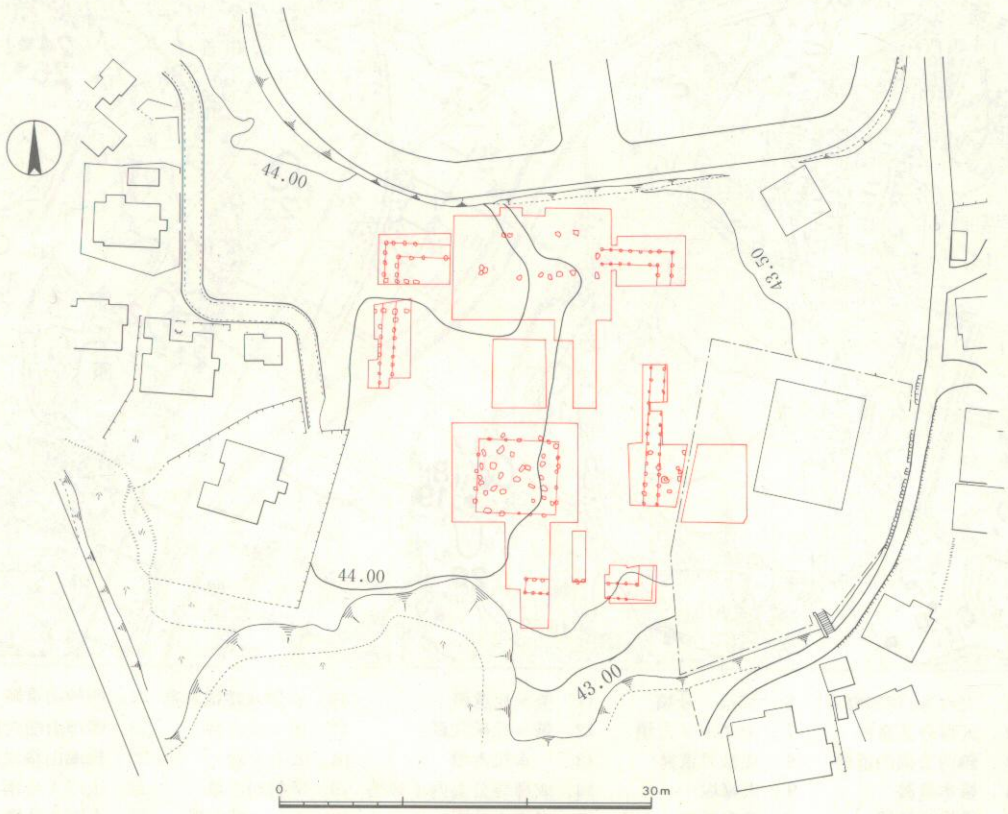
第１図　周辺主要遺跡分布図

II　遺跡の位置と環境

天台寺（上伊田廃寺）跡は田川市大字伊田675番地の１に所在しており、かつては上伊田村に属し、香春町勾金に近接している。

もともと田川地方は南に英彦山連峰、東西には仲哀峠や烏尾峠があり、北は香春三山から福智山に連なる山々に囲まれた盆地で、その中を彦山川が南から北に流れ、その西を流れる中元寺川、それに香春岳の東麓から迂回して西へ流れる金辺川が、それぞれ彦山川に合流し、さらに直方市で遠賀川に合流して玄海灘へそそいでいる。

寺跡のある台地は彦山川と金辺川の支流である御祓川とにはさまれた標高40～50ｍの台地で、彦山川の北岸にあっておよそ５kmほど川に沿って延びており、田川盆地のほぼ中央部に位置する。この台地から南に英彦山・鷹巣山の連山が眺望され、北は香春岳が真近である。この台地上に立地する遺跡としては弥生時代の下伊田遺跡や上の原遺跡、横木遺跡をはじめ台地上の各地点に住居跡や土器散布地がある。また同じ台地上にセスドノ古墳や夫婦塚古墳群もある。金



第２図　天台寺跡周辺図

辺川北岸の夏吉古墳群は田川地方で最も規模が大きい。

歴史時代に入ると天台寺（上伊田廃寺）跡の台地のすぐ南には彦山川までの沖積地に条里の跡が川にそって延びている。ほかに中元寺川、泌川、金辺川沿いにも条里の跡がある。

本廃寺の真北２kmに香春岳がある。香春岳南山麓には『延喜式』の「神名帳」にみえる辛国息長大姫大目命神社がある。この神は香春神社の第一殿に祠られている。「豊前国風土記」逸文には「田河郡鹿春郷（略）昔者新羅神自度到来、住此川原、便即名日鹿春神」と新羅からの渡来神のこと、また「第三峰有銅並黄楊竜骨等」と香春三ノ岳より銅が産出することが記載されている。

このように新羅の神を奉祀する人びと、すなわち産銅技術をもった集団の存在や豊前地方の新羅系古瓦の出土をみると造瓦技術集団の存在など渡来人とのかかわりがうかがえる。特に豊前地方に渡来系の氏族が多かったことは、大宝２年の戸籍断簡によっても察せられるところである。

また、大宰府から宇佐への官道に沿って古代寺院が多いが、とくに田川盆地から行橋平野にぬける３か所の峠と古代寺院の関係をみると、香春町採銅所から味見峠を越えると椿市廃寺があり、香春町呉から仲哀峠を越えると菩提廃寺、香春町柿下から大坂峠をすぎると木山廃寺がある。

天台寺（上伊田廃寺）跡は太平洋戦争前まで塔、金堂、講堂の基壇も残っており、各堂塔の礎石も原位置のまま多数残っていたが、戦時中（昭和18年）にグライダーの滑空練習場にとの軍の命令により、これらの基壇をとりのぞき礎石は地中に埋められた。寺跡は戦後畑地として利用され、掘り出された礎石のほとんどは散逸してしまった。

III　調査の経過

1．既往の調査

香春明神と最澄とのかかわりは「元亨釈書」「続日本後紀」「伝教大師流記」などにみえるが、天台寺の建立については『両豊記』に「伝教大師帰朝の時、田河郡に伽藍十八か所を造始む、今の勾金の庄天台寺是その一つなり」とある。また『太宰管内志』所載の「古縁起」には、「最澄於豊前国田河郡、以赤染連清為壇越、此社者為比叡山王別社、以寺者為香春寺、寄田地為延暦寺別寺(略)」との記載があり、『太宰管内志』では本堂跡、塔跡、坊中跡の基壇の広さや、それに残る礎石の数の概略が記述されている。いずれにしろ永い間「天台寺」は弘仁七年に建立されたものとの説があった。[註1]

天台寺（上伊田廃寺）跡の実測調査は昭和5年山本通氏による報告が初めである。この報告書には礎石分布図、礎石間の距離及び塔心礎をはじめ各礎石の形が実測されている。[註2]それによって伽藍配置は法起寺式ではないと考えられてきた。[註3]

昭和6年には青柳頼吉氏が寺跡より東400mほどの所で土地調査中に瓦窯跡を発見した。その時新羅系軒丸瓦を採集した。山本通氏が瓦窯跡を調査し、昭和7年に報告された。[註4]その後、昭和35年に2号瓦窯跡を確認し、福岡県教育委員会、田川市教育委員会、九州大学で本格的な発掘調査がおこなわれ、階段式登り窯であること、および窯跡より寺跡から採集されたものと同種の新羅系瓦（複弁八弁蓮華文軒丸瓦）が出土した。[註5]

この新羅系瓦は大分廃寺、天台寺（上伊田廃寺）跡、天台寺瓦窯跡、椿市廃寺、垂水廃寺、友枝瓦窯跡、虚空蔵寺跡など大宰府から宇佐への官道筋から出土している。[註6]この新羅系瓦についてはその精麗さを称賛され、[註7]その文様を統一新羅時代の梵鐘の文様と比較されるなど[註8]早くから注目されてきた。その後新羅系瓦の製作について「その年代は鐙瓦の蓮花文や宇瓦の唐草文が京都妙心寺梵鐘の撞座の蓮花文や上下帯の唐草文に相似する」として梵鐘銘文中の「戊戌年」はすなわち文武天皇二年（698)に比定されるとしており、[註9]天台寺創建時の瓦であると考えられている。[註10]

天台寺（上伊田廃寺）跡塔心礎については早くから「天台寺塔心礎」として分類上注目されているが、当時は創建年代を平安初期とし心礎もその時期のものと考えられていた。[註11]また心礎柱座径と塔一辺長との割合いから塔の高さ及び層数を算出する方法[註12]から算定すれば、天台寺の塔は高さ28mの五重塔であろうと考えられていた。[註13]

このように天台寺（上伊田廃寺）跡は創建年代や伽藍配置で疑問の多かった寺跡であっただけに今度の発掘調査の意義は極めて大きいと言える。

２．発掘調査の概要

天台寺跡の遺跡については、すでに『太宰管内志』に記載があり、戦前までは三つの土壇と礎石群が保存されていたようである。鏡山猛の復元によれば、これらは塔が東に金堂が西に一直線上にならび、金堂の背後に少し離れて僧房を配したいわゆる法起寺式の伽藍配置であったとされている。ところが残念なことに、遺跡は戦時中にグライダーの練習場として使用されることとなったため土壇は削平され、さらに礎石は穴の中に落し込まれ、あるいは運び去られてしまい現在では、これらの位置さえもわからなくなっている。

今回の発掘調査にあたっては、まず戦前まで遺存していた塔、金堂、僧房の位置を確認することを目的として初年度は調査対象地に４本のトレンチを設定し調査を実施した。その結果、各所において落し込まれた礎石が検出され、各建物のおおよその位置を確認することができた。この結果を受けて第２年度は金堂跡と塔跡について精査を行い正確な位置と規模を把握することにした。まず金堂については従来の研究では５間×４間の四面庇付建物に復元されている。発掘調査では推定位置から27個の礎石が検出されるとともに原位置を知り得る有力な手懸りを得ることができた。 それは金堂建設時に設置された足場の柱穴で、南と北に５個ずつ東と西に４個ずつで四隅の柱穴を欠いている。これにより金堂の復元が可能となった。次に塔跡については金堂の中心から東へ約100尺の地点から心礎が検出されたが正確な位置を明きらかにするまでにはいたらなかった。ところでこの塔跡の調査では塔跡と重復する位置で南北方向にのびる２条の柱穴列が検出された。これらは金堂跡で検出した足場の柱穴と同一方向であることから金堂と密接な関係があると推定され、東面回廊である可能性が考えられるにいたった。第３年度は僧房跡の調査と塔跡で検出した柱穴列がはたして回廊であるのか、その行方を追究することとした。僧房跡では基壇の掘り込み地業が確認され、基壇の規模は東西92尺、南北58尺であることがわかった。それとともに従来僧房と考えられてきたこの建物は講堂であることが判明した。しかしながら平面規模については、検出された礎石がすべて移動していることから明きらかにすることはできなかった。次に回廊と推定されるにいたった柱穴列については金堂跡の北西部に各々トレンチを設定して調査した結果、塔跡と同様に２条の柱穴列を検出し、この遺構は推定どおり回廊であることがわかった。当初の計画では３年で調査を終了する予定であったが、未だ塔の遺構が不明確であること、さらにこれと重複して検出された回廊についても解決すべき点があることなどから計画を１年延長することとした。しかしながら塔跡の位置については結局おおよその位置を推定できるにとどまった。また回廊は講堂基壇の中央に接続し、東西182尺、南北221尺の規模である。

3．調査日誌

第1次調査　1985．11．5～11.29

11・5～11・6　実測基準点設置。金堂跡推定地にAトレンチを設定し調査を開始。礎石9個を検出したが、原位置を保っているものはなく、すべて移動している。

11・7～11・8　塔跡にBトレンチを設定、表土を除去した後遺構検出。トレンチのほぼ中央にて座った状態で心礎を検出したが、精査の結果、新しい時期の穴に落し込まれていることが判明。塔の基壇らしきものは見当らない。

11・9～11・11　講堂跡にCトレンチを設定。表土・暗褐色土を除去。基壇らしき痕跡は見当らない。

11・12　Cトレンチ北端で柱穴2個と版築らしきものを検出したためトレンチを延長する。

11・13　Cトレンチ西側を深く掘り下げ版築状の積土を調査、その結果厚さ20cm程度の積土であることを確認。Dトレンチ設定、表土除去。

11・14～11・18　C・Dトレンチの調査。いずれのトレンチでも礎石らしきものを検出したが、すべて動いている。Eトレンチ設定。

11・19　Cトレンチ北端の掘立柱建物検出。この掘立柱建物と重複して土壙1基を検出。埋土からは多量の瓦片とともに8世紀後半から9世紀初頭にかけての土器が出土。Eトレンチの表土除去。

11・20～11・22　Eトレンチの遺構検出。弥生時代前期末頃の貯蔵穴3基を検出。各トレンチで検出した礎石の洗浄を行う。

11・23～11・24　写真撮影のため各トレンチの清掃。

11・25～11・26　写真撮影、写真終了のトレンチから実測の準備にかかる。

11・27　遺構実測開始。

11・28～11・29　遺構・土層図実測、調査終了。

第2次調査　1986．10・14～12・7

10・14　金堂跡、塔跡発掘区設定。機械力により表土を除去する。

10・16～10・20　人力によって表土を除去する。

10・21　遺構検出開始。礎石を検出するも、すべて穴に落し込まれている。

10・22～10・24　金堂跡の発掘区遺構検出。弥生時代前期の貯蔵穴を検出。金堂跡では27個の礎石を検出したが、すべて後世の穴に落し込まれており、原位置を保っているものはない。

10・25　本日にて金堂跡の調査をほぼ終了する。

10・27　塔跡の調査開始。表土を除去する。新たに3個の礎石を検出。

10・28～10・30　暗褐色土を除去する。南北方向に柱穴6間分を検出、柱間は2m等間でや

や東に振れる。

10・31　昨日検出した柱列を追究するため北および南へ発掘区を拡張。

11・1　新に南北方向の柱列を検出。10・31検出の柱列との間隔は約9尺。したがって梁行9尺。桁行7尺の掘立柱の回廊である可能性が強い。

11・2～11・3　作業中止

11・4～11・6　塔跡北拡張区を更に北側へ6mほど拡張。新に柱穴6個を検出。結局13間分を検出。

11・7～11・13　調査担当者所用のため作業中止。

11・14　金堂跡中心部より南側よりにトレンチ設定。田川地区文化財指導者研修会（午后）。

11・15　表土・暗褐色土を除去。

11・17　金堂跡トレンチを拡張。東西棟の掘立柱建物検出。

11・18～11・20　金堂跡トレンチを更に南と東に拡張し遺構検出。弥生期貯蔵穴を検出。

11・22　写真撮影のため清掃作業開始。

11・24　金堂跡で検出した礎石群の四周にて掘立柱穴列を検出。金堂造営後の足場のものと考えられる。清掃作業続行。

11・25　雨のため作業を中止し、発掘調査指導委員会議の資料を作成。

11・26～11・27　写真撮影。

11・28　実測の準備。

11・29　発掘調査指導委員会議。

12・1～12・6　遺構実測。

12・7　遺構断面図実測。本日で調査終了。

第3次調査　1987・10・19～12・11

10・19　講堂跡・回廊跡に発掘区設定。

10・20～10・23　講堂跡発掘区の表土を除去する。

10・24～10・26　降雨のため作業中止

10・27　講堂跡遺構検出開始。

10・28　暗褐色土除去。礎石7個を検出。いずれも原位置にはない。

10・29　回廊跡東南部発掘区の表土を除去する。

10・30～10・31　作業中止。

11・2～11・3　土壙状落ち込みの排土作業を続行する。瓦片多量に出土。

11・4　土壙状落ち込みの排土作業を続行する。

11・5　土壙状落ち込みから紅皿等の遺物出土。これにより、この落ち込みは江戸時代以降のものであることが判明。僧房跡発掘区で整地層らしきものを検出したが創建当時のもので

あるか判断できない。

11・6　東西方向に2列にならぶ柱穴を検出。このため発掘区を西側へ拡張する。

11・7　拡張区で柱穴を検出。本日にて回廊跡東南部発掘区の調査終了。

11・9～11・10　講堂跡発掘区の暗褐色土を除去する。瓦片を多量に含む。

11・11　発掘区南側で掘り込み地業を思わせる土層が観察されたため発掘区を北側へ拡張。その結果、講堂跡では掘り込み地業が行われていることが明確となる。

11・12　発掘区南辺中央部にて土壙を検出。単弁八弁軒丸瓦、土師器、須恵器が出土。8世紀後半頃。

11・13　掘り込み地業の範囲を確認する。南辺・西辺は確認できるが、東辺・西辺は明確ではない。

11・14　これまでに検出した礎石および落し込み穴の清掃。

11・16　講堂跡発掘区南側に設定したトレンチで南北にのびる柱穴列2条を検出。西面回廊であることを確認。

11・17　回廊の柱穴とは異なる柱穴を3個検出したためトレンチを北側へ拡張。

11・18　新に検出した柱穴は結局5間×2間の南北棟建物であることが判明。回廊の柱穴と重複しており、掘立柱建物の方が先である。本日にてこの地区の調査はほぼ終了。

11・19～11・24　清掃を兼ねて講堂跡発掘区および南側トレンチで検出の回廊、掘立柱建物の周辺を精査。

11・25　降雨のため作業中止。

11・26　遺構の写真撮影。

11・27～12・2　遺構実測の準備。降雨のため、しばしば作業中断。

12・3～12・9　遺構実測。

12・10　各柱穴のたち割りののち写真撮影を行う。

12・11　調査終了。柱穴等埋戻す。

第4次調査　1988・4・11～6・11

4・11～4・12　発掘調査準備。回廊西北隅、塔跡、金堂・講堂間の3か所に発掘区を設定。

4・13　回廊西北隅発掘区の表土を除去する。

4・14　表土の除去が終了した所から遺構検出を開始。

4・15～4・16　発掘区西半部で回廊の柱穴を検出。発掘区中央より東側では暗褐色土、黒色土が堆積している。両層とも瓦片を多量に含んでいる。

4・18　降雨のため作業中止。

4・19　金堂・講堂間の発掘区の表土を除去する。

4・20～4・21　回廊西北隅発掘区の遺構検出。遺構検出終了。

４・22～４・23　金堂・講堂間発掘区の表土を除去。

４・24～４・25　遺構検出。小規模な掘立柱建物（時期不明）１棟を検出した他は顕著な遺構はない。

４・26　塔跡発掘区の表土を除去する。

４・27～５・８　ゴールデン・ウィークのため作業中止。

５・９　発掘作業再開。塔跡発掘区の調査。

５・10　回廊東北隅に発掘区を設定し、表土を除去する。

５・11　回廊東北隅発掘区の暗褐色土を除去する。

５・12　暗褐色土の除去を終了後、東から遺構検出を開始。発掘区西南部で瓦溜りらしき遺構を検出。

５・13　瓦溜りを発掘。

５・14～５・16　回廊東北隅を精査の結果、コーナーの部分を確認する。

５・17～５・18　塔跡発掘区の遺構検出。回廊の柱穴を検出。

５・19　塔跡発掘区の調査終了。午後は発掘区内の清掃を行う。

５・20　降雨のため石炭資料館にて瓦の整理を行う。

５・21　降雨のため作業中止。

５・23　講堂と回廊の取り付き部を確認のため発掘区を西へ一部拡張し柱穴の検出を行う。回廊は講堂の中央部分に接続することが判明。

５・24　写真撮影のため発掘区の清掃を行う。

５・25～５・27　写真撮影、遺跡が木立ちの中にあるため直射日光のもとでは陰影が強くなり撮影が困難。このため写真撮影に手間どる。写真撮影終了部分から実測の準備を行う。

５・28～５・29　実測準備。

５・30～５・31　遺構実測。

６・１～６・２　降雨のため作業中止。発掘調査指導委員会議資料を作成。

６・３　発掘調査指導委員会議。

６・４～６・７　遺構実測。

６・８～６・９　降雨のため作業中止。

６・10　塔跡土層図、柱穴断面図実測。

６・11　回廊西北隅柱穴たち割り、土層図実測、調査終了。

註

1．箕田軌「田川郡の天台寺に就て」『鷹羽郷土研究会会報第１号』 1922
2．山本通「天台寺趾調査」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第五輯 1930
3．田川市史編纂委員会『田川市史上巻』 1974
4．山本通「天台寺瓦焼窯址の調査」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第七輯 1932
5．花村利彦「豊前天台寺瓦窯址発掘調査の概要」『郷土田川』18号 1960
6．九州歴史資料館編『九州古瓦図録』 1983
7．関野貞「瓦」『考古学講座』 1936
8．鏡山猛「北九州古瓦の一様式について」『夢殿』 第十九冊 1939
9．奈良国立博物館編『飛鳥白鳳の古瓦』縮刷版 1982
10．小田富士雄『九州考古学研究』 歴史時代編 1977
11．田中重久『聖徳太子御聖蹟の研究』 1944
12．石田茂作「塔の中心礎石の研究」『伽藍論攷』 1948
13．田川市史編纂委員会『田川市史上巻』 1974

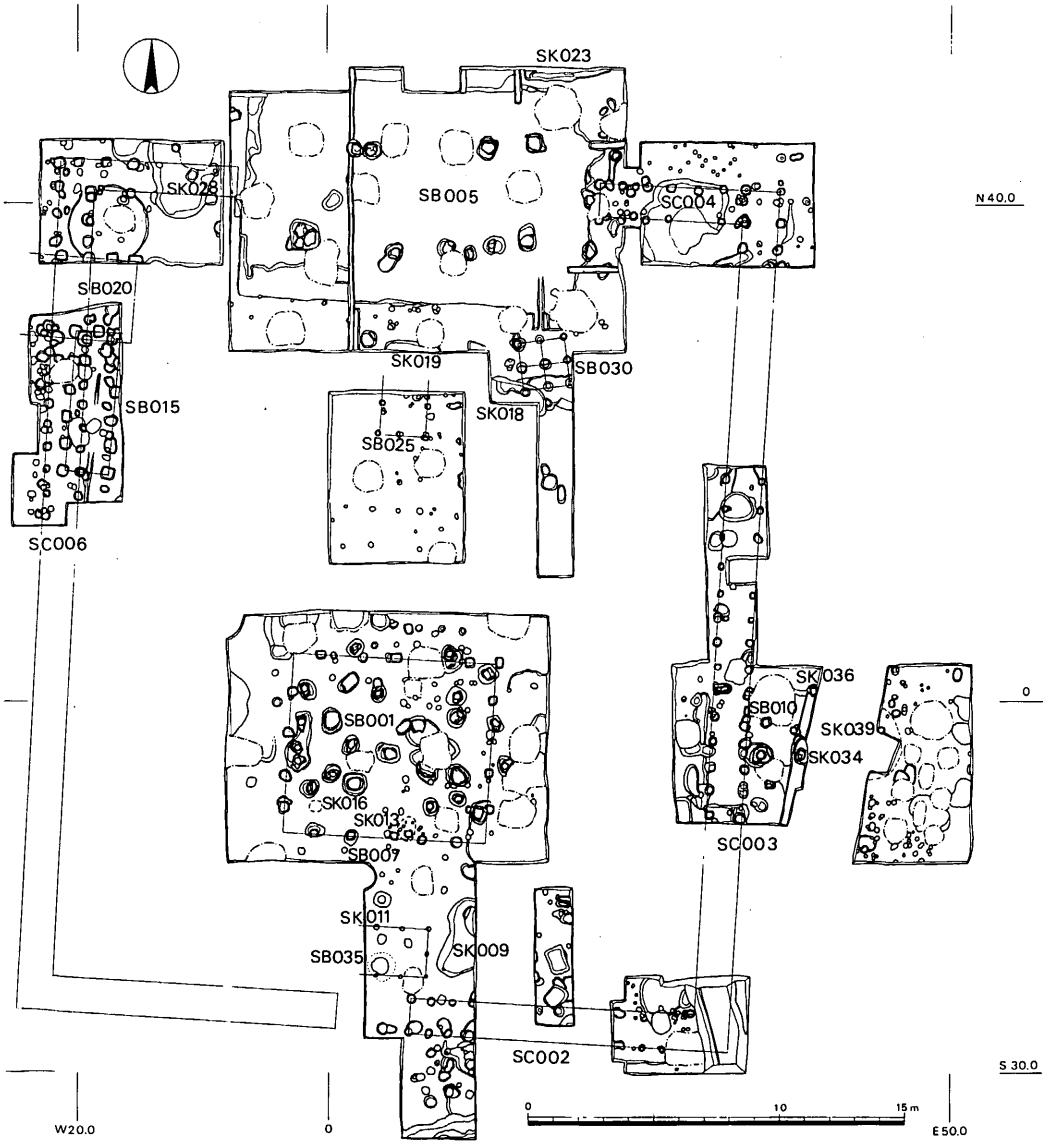


第３図　発掘風景（中央が故森田勉氏）

Ⅳ 遺 構

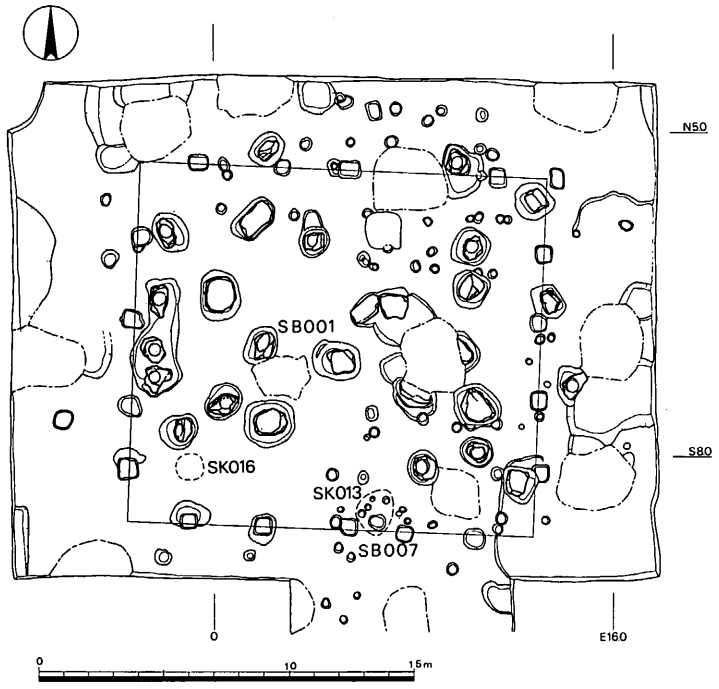
1．金堂跡 SB001

初年度に鏡山猛[注1]・山本通両氏の報文[注2]、付近の住民の伝聞を手懸りとして、その推定地域に4



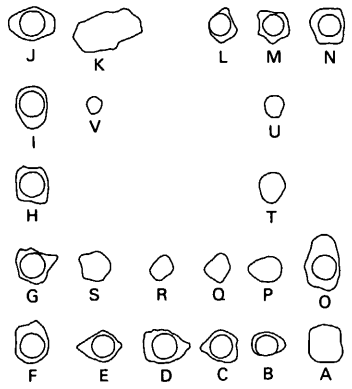
第４図 天台寺跡遺構配置図

m×20mのトレンチを設定し調査した結果、礎石9個を検出した。これらの礎石は全て現位置を動いており、穴に落し込まれた状態であった。しかしながら、位置的に両氏報文の金堂跡の礎石であることがほぼ確認できたので、次年度にこの礎石をもとに従前の研究による東西5間、南北4間の規模の建物を想定し、その範囲を拡張し調査した。

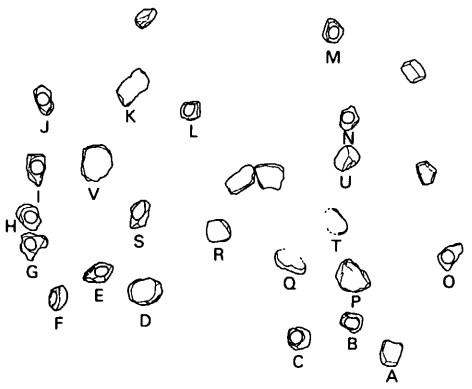


第5図　金堂跡 SB001 遺構配置図

その結果礎石27個を検出したが、これらは現位置を保つものはなく全て穴に落し込まれていた。前述の二氏の報文によると礎石22個が確認され、それによって5間×4間の四面庇の建物に復元されているが、今回はその時の調査より5個多い礎石を検出したことになる。二氏の研究による建物復元に従えば計28個の礎石が必要であり、今回の調査でほぼその数に近い礎石を検出したことになる。山本氏の報文では柱座の造り出しをもつ礎石が13個記録されているが、今回



第6図　金堂跡礎石配図（山本通氏図）



第7図　金堂跡礎石移動想定図(発掘調査検出)

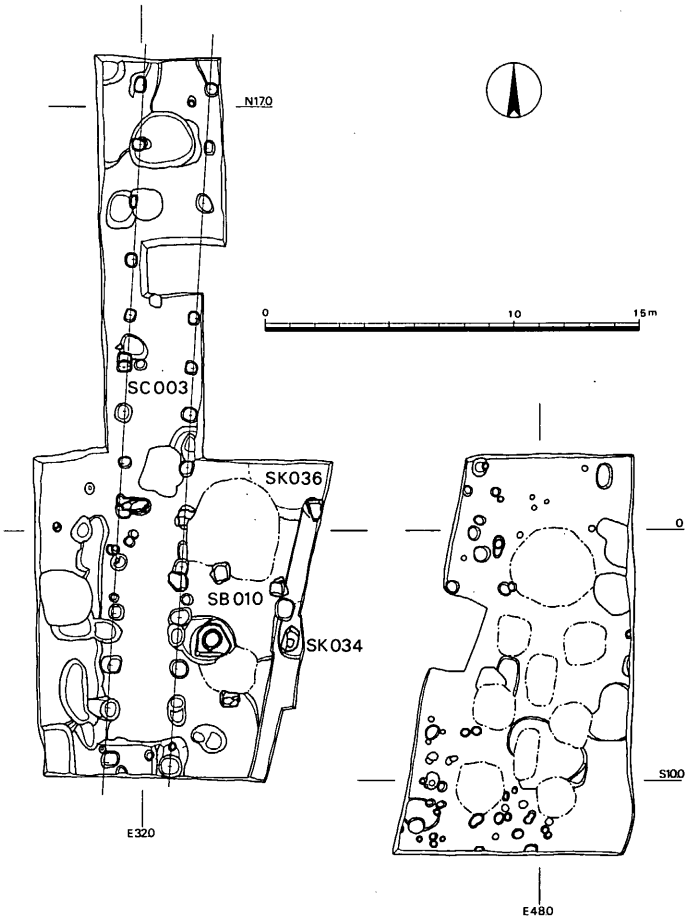
の調査でもそれと同数の礎石を確認した（第15図１～６・図版３）(但し、裏返しになったと思われる礎石の柱座の確認は行っていない)。因みに氏の報文によれば柱座を有する礎石は側柱の礎石として記されている。

以上のように、検出した礎石は建物復元に必要な数をほぼ充すものであったが、全て原位置を移動しており、また、基壇も完全に削平されているため復元は不可能に近い状態であった。その様な状況のなかで、唯一その建物復元の手掛りとなり得る「作業の足場穴」(SB007）を検出できた事は幸いであった。この足場穴は礎石群をほぼ取り囲む形で、南と北に各々５個（北は樹木のために１個所未検出)、西と東に各々４個が並列する。四隅の柱穴を欠いているが、東西幅16.5m（55尺)、南北幅14.4m（48尺）である。柱掘形は大略70cm前後、深さ50cm前後の隅丸方形のものであるが、柱間寸法は８尺～11尺と必ずしも一定していない。

この足場穴と鏡山・山本両氏の研究を勘案すると基壇は東西50尺、南北45尺程度で、建物の規模は鏡山氏の復元案のとおり５間×４間の四面庇で柱間寸法は6.8尺等間の金堂建物とすることは可能である。

２．塔跡　SB010

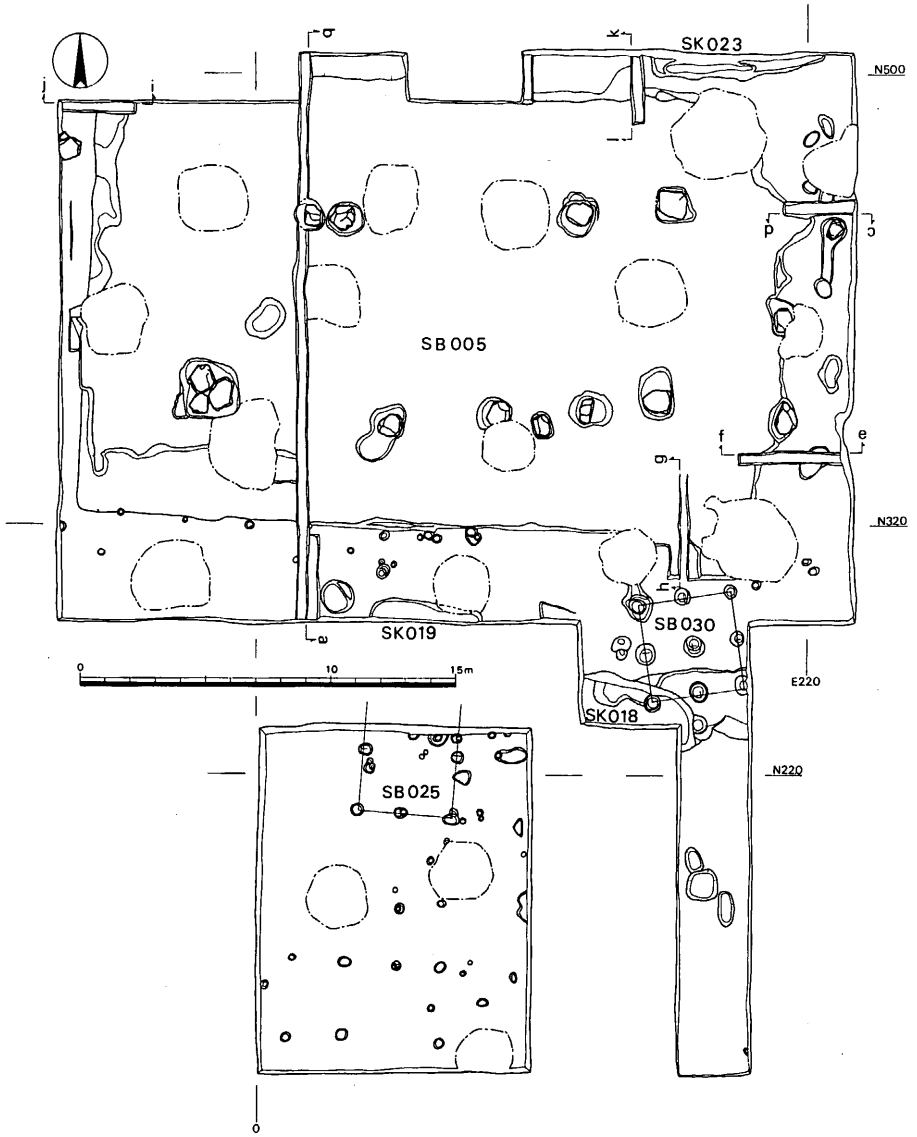
鏡山氏の報文では金堂の東方101尺の距離のところに記されている塔心礎は初年度の調査で検出した。この塔心礎はほぼ水平に近い状態であったが、根石等はなく、土層の観察からも原位置ではなく移動したものであることが明らかであった。心礎（第15図21・図版５）の材質は花崗岩で、ほぼ中央に直径73.0cm～75.5cm、深さ7.9cm～9.0cmの柱



第８図　塔跡SB010, 東面回廊SC003遺構配置図

座の刳り込みがある。刳り込み底部の周囲には幅5.5cm、深さ0.5cm～0.7cmの浅い溝が掘られ、この溝に連続して幅10cmの溝が設けられている。今回検出した心礎と金堂の心々距離を検討すると、鏡山氏計測位置より北に約90cm（3尺）、西に約40cm（13尺）ずれていることが判明した。この結果から、検出した心礎は原位置からさほど移動していないことになる。

この心礎の周辺からは礎石8個を検出したが、個数としては鏡山氏の報文の礎石数と一致するものの全て移動している。また、残存する礎石から3間×3間、柱間寸法は中央間6.5尺、脇



第9図　講堂跡SB005・掘立柱建物SB025・030遺構配置図

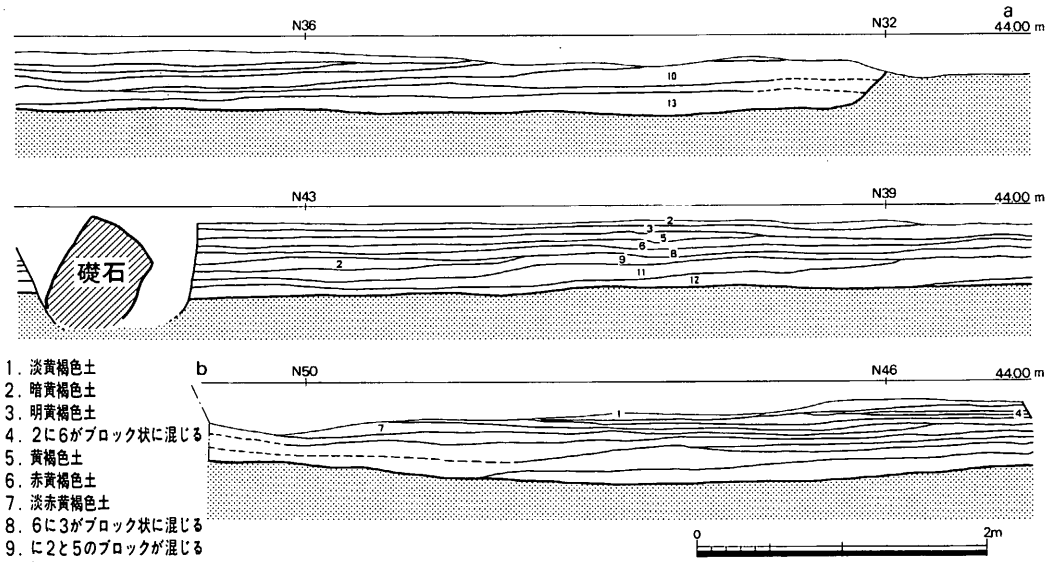
間6尺の平面規模を復元されている。もし、報文通り金堂と塔の心々距離が101尺であれば、ほぼこの位置に塔が存在したことになる。しかしながら塔心礎の他は基壇はもちろんのこと、掘り込み地業等も検出されずその位置を確定し得るまでには至らなかった。さらに、塔心礎の約3m西方で、後述する東面回廊の柱穴列を検出したことにより、塔と回廊が重複することになり問題が生じる。このため、さらに東側に調査区を設定し調査したが、塔の存在を示す遺構は確認できなかった。したがって、層位の関係などを勘案すると回廊廃絶後に塔は造営されたと考えざるを得ない。

3．講堂跡　SB005

鏡山氏の報文[註3]では金堂の北方の土壇を僧房跡（『太宰管内志』では坊中と記されている）に比定している。そして、その位置は心々距離で150尺の計測値が示されている。氏はその根拠として、金堂との間隔が広いことから、この間に講堂を想定し、北方の土壇を僧房跡とされたのであった。しかし、講堂跡と推定した位置には何の痕跡もなく既に湮滅したとされている。

調査は初年度に僧房および講堂の推定位置に南北トレンチを設定し遺構の確認を実施した。まず、僧房推定地で礎石および基壇の掘り込み地業らしき痕跡がみられたので、次年度に範囲を拡大し本格的調査を実施した。

調査の結果、基壇は削平されていたが掘り込み地業がなされており、上面をかなり削平されているもののある程度の範囲は確認することができた。地山面の掘り込みは深いところで50cm程

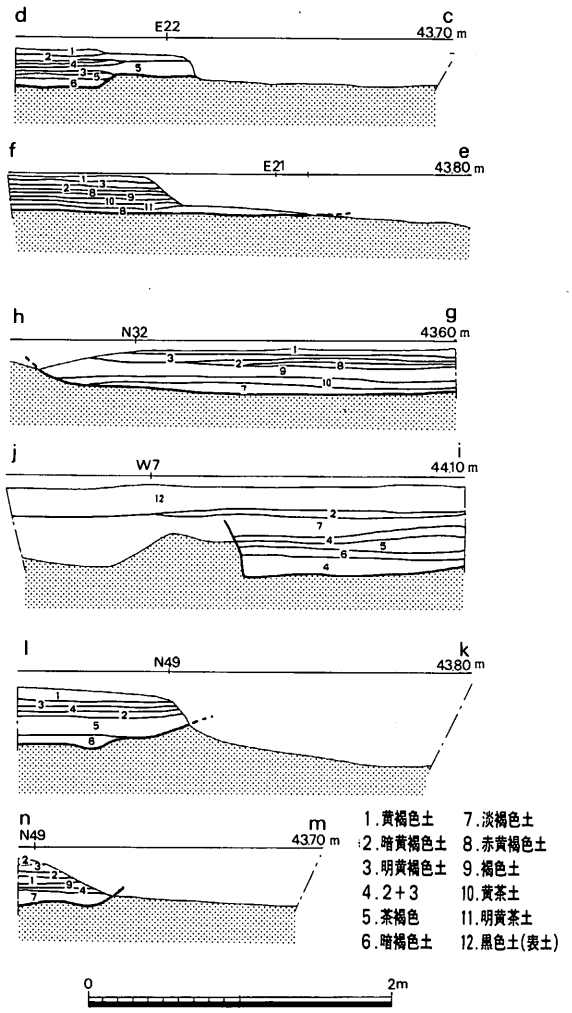


第10図　講堂跡基壇土層図(掘り込み地業)

残っており、版築もしっかりしている。掘り込み地業の範囲から、基壇の規模は東西92尺、南北58尺程度と推定できた。また、ここからは15個の礎石を検出したが、これらは金堂跡と同じく全て原位置から移動しており建物の平面規模の復元の資料とするまでには至らなかった。そして、礎石は全て花崗岩で柱座の造り出しが認められるのは第15図７の１個のみである。

鏡山氏は残存する礎石から２間×６間、柱間寸法12尺等間の建物を復元されているが、この建物を今回検出した掘り込み地業の範囲にあてはめると、推定基壇の規模と建物のまわりとの間にかなりの空間が生じる。

また、金堂と僧房との間、すなわち鏡山氏が講堂と推定した位置を全面調査したが、その痕跡を示すものは何ら認めることは出来なかった。この調査の結果と後述する東北隅および西北隅の回廊跡調査の結果を合わせ検討すると、かつて鏡山氏が僧房跡とされた土壇と建物は講堂跡とした方が妥当である。因みに金堂跡と講堂跡の推定基壇の心々距離は150尺であり、氏の計測値と一致する（金堂と僧房との心々距離）。



第11図　講堂跡基壇土層図(掘り込み地業)

４．回廊跡　SC002・003・004・006

回廊の調査として、南面回廊・同東南隅（SC002）、東面回廊（SC003）、北面回廊・同東北隅（SC004）、北面回廊・同西北隅、西面回廊（SC006）の計５個所で実施した。

(イ)　南面回廊・同東南隅　SC002

塔跡で検出した掘立の二本柱列（東面回廊）の延長上にトレンチを設定し調査したところ東西方向の二本柱列（南面回廊）の柱穴３間分を検出した。回廊の入隅部は現代の溝SD031によって撹乱されているが、内側柱列の最東端の柱穴は塔跡付近で検出した東面回廊の内側柱列の延長線と一致している。このことから東面回廊はこの位置で西へ直角に折れることが明らかとなり、さらに西方に２個所のトレンチを設定し、南面回廊を追究した。

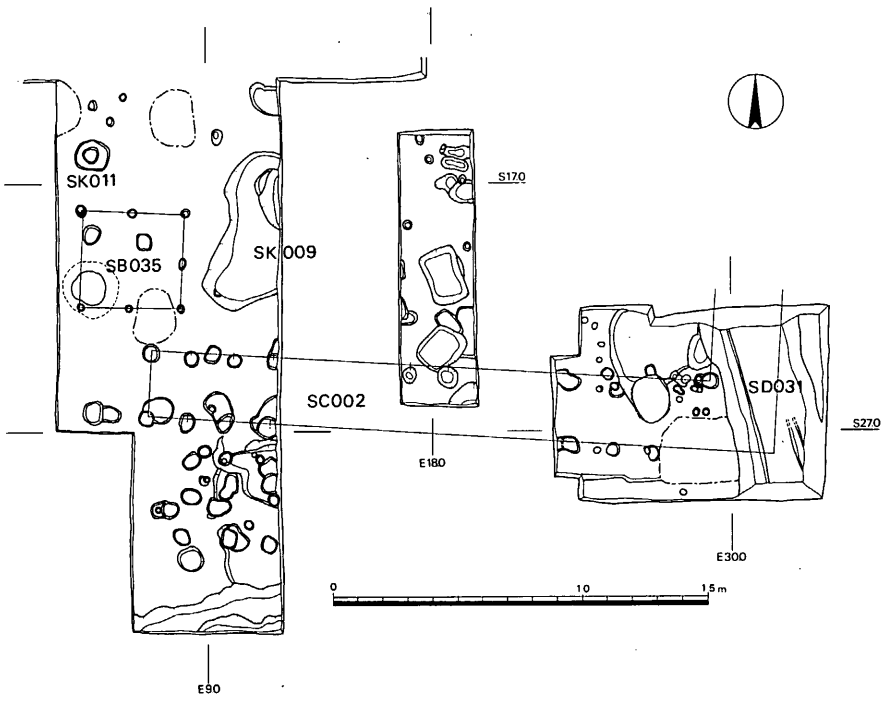
その結果、中間部のトレンチで内側柱１間分、西端のトレンチで３間分を検出した。西端の

トレンチで検出した柱穴は3間分で西へは延びておらず、ここで一担終息することが判明した。この途絶えた位置は推定中軸線から東へ約2.7m(9尺)、東面回廊との心々距離は24.6m(82尺)である。柱掘形は径20cm～30cmの不整円形を呈し、深さは20cm前後のものである。桁行の柱間数については柱間寸法が一定していないため明らかでないが、西側トレンチ検出の3間分は1.65m (5.5尺) 等間、中間で1.65m (5.5尺)、入隅部トレンチで西から2.1m (7尺)・1.65m(5.5尺)・2.1m (7尺) である。梁行の寸法は2.7m(9尺) である。

(ロ) 東面回廊 SC003

塔跡の調査時に検出したもので、東面回廊のほぼ中央部分にあたり、桁行13間分を検出している。この位置は鏡山氏復元による塔跡推定地にあたり、もし塔の位置が報文のとおり動かし難いものであれば塔と回廊は位置的に重複することになる。そして層位の関係から塔は回廊の廃絶後に建立されたと考えざるを得ない。しかし、塔跡の痕跡としては塔心礎が推定地近くに存するだけで他には位置を確定し得るものはみられない。

柱穴は南面回廊と同様に不整円形を呈するが数個所で後世の撹乱が著しく、わずかにその痕



第12図 南面回廊SC002, 掘立柱建物 SB035 遺構配置図

跡をとどめるのもある。桁行の柱間寸法は南面回廊同様に必ずしも一定ではなく、南から、1.9・1.9・2.1・1.9・2.1・1.9・1.8・1.8・2.1・2.4・2.1・2.4・2.4mでばらつきがあり、平均すると2.07mとなる。梁行は南面回廊と同じく2.7m(9尺)である。

(ハ) 北面回廊・同東北隅 SC004

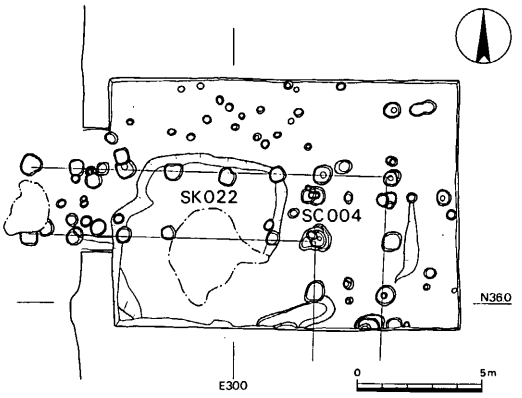
講堂の東側に接続する回廊で6間分を検出した。北へ延びる東面回廊は南面回廊と心々距離にして66.3m(221尺)のところで直角に西折し6間分で終息する。この位置は講堂の東側の掘り込み地業の線から約3尺である。桁行の柱間寸法は西から2.1・1.8・1.8・2.1・2.1・2.1mであり、入隅部は梁行寸法に合わせ2.7m(9尺)である。

(ニ) 西面回廊 SC006

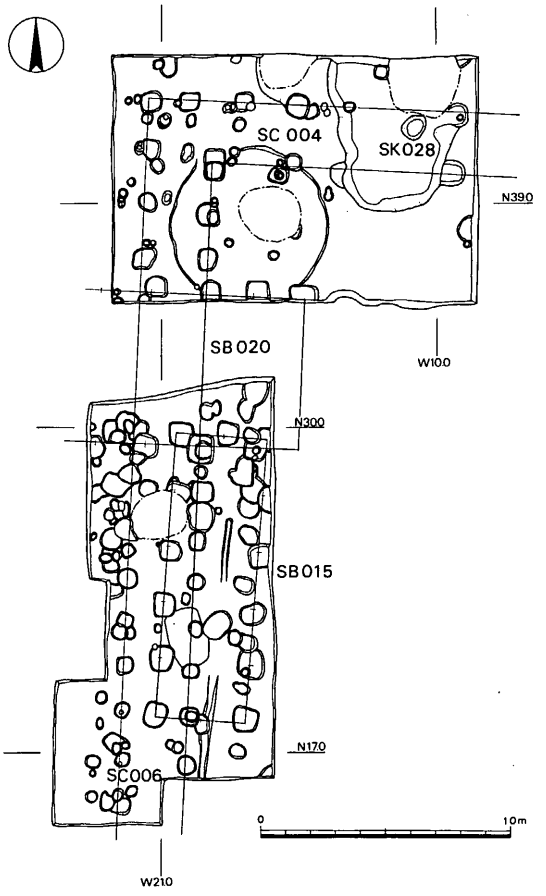
西北隅回廊に近いところで8間分を検出した。東面回廊と同一方位をとり、心々距離にして54.6m(182尺)を測る。柱間寸法は南から第2番目の柱間が2.1m(7尺)と若干広いが、他は1.8m(6尺)等間となっている。梁行は2.7m(9尺)である。

(ホ) 北面回廊・西北隅 SC004

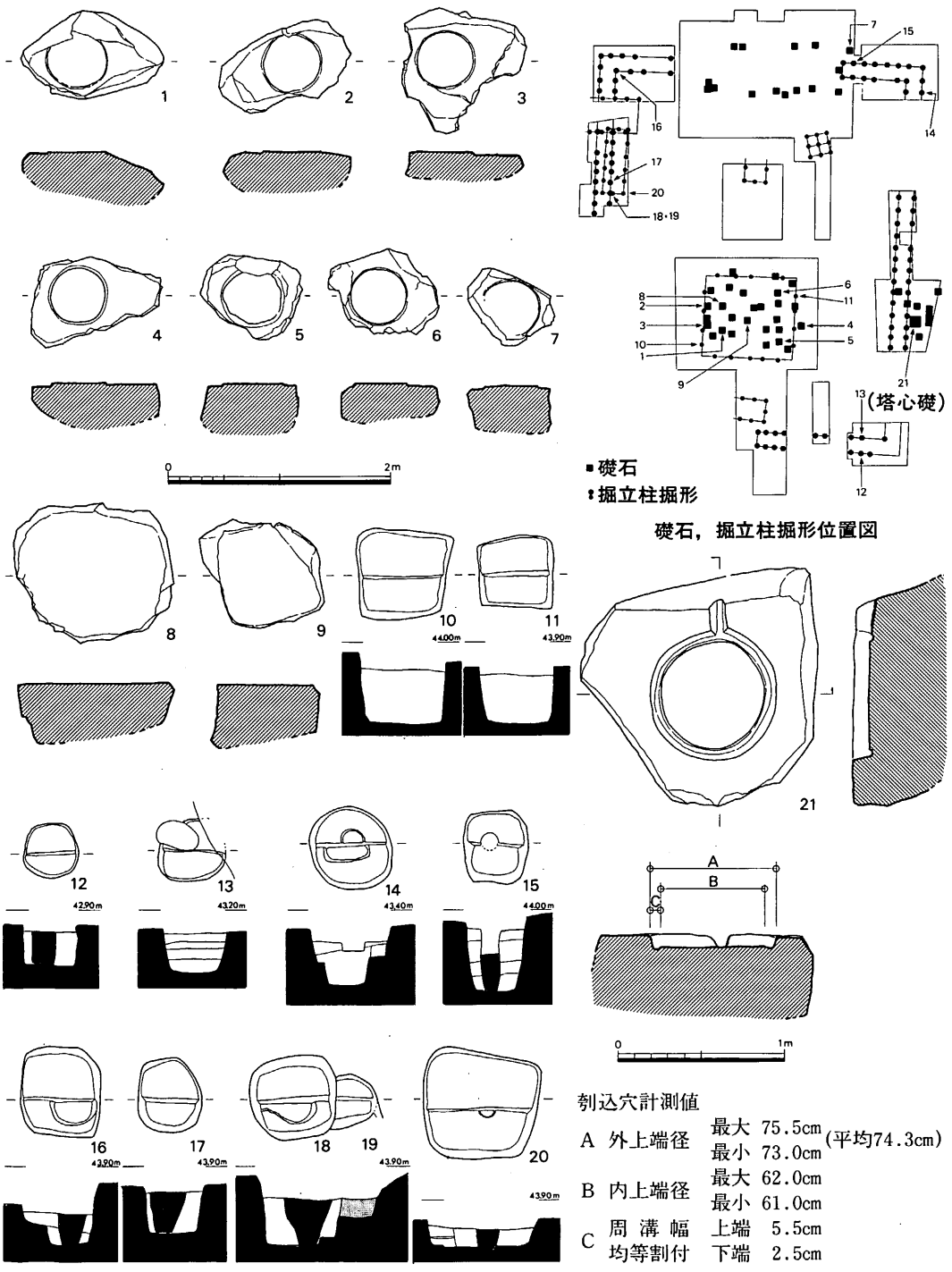
講堂の西側にとりつく回廊で、講堂の東側に接続する回廊と柱筋は合わせているが柱間寸法は異にしている。検出した柱穴は外側柱で5個、内側柱で4個であるが、東側2個を除いて他は外側柱の柱間寸法は西より1.5・2.1・2.1mであり、東北入隅が梁間に合わせ2.7m(9尺)としているのに対し、1.5m(5尺)と約半



第13図 北面回廊 SC004 遺構配置図



第14図 西面回廊 SC006, 北面回廊 SC004 掘立柱建物 SB015・020 遺構配置図



第15図　礎石，柱掘形，塔心礎実測図

分の柱間となっている。そのために内側との柱間が対応しなくなるという結果が生じたものとみられる。講堂との接続部すなわち東端の終息部の柱穴は検出していないが、終息部およびその前の柱位置付近で全体を合わせている。

5．その他の遺構

掘立柱建物

SB015　西南回廊SC006およびSB020と重復する2間×5間の南北棟建物である。柱穴の切り合い関係からSB015→SB020→SC006となり、SB015が最古期の建物で回廊が最も新しい時代に構築されたことになる。先行するSB015・020は寺院と直接関係する建物とは考えられない。柱間寸法は梁行1.8m（6尺）、桁行2.25m(7.5尺）等間である。建物の方位は約N－5°－Wである。

SB020　SB015より新しくSC006より古い。桁行4間以上の東西棟建物である。梁行2間とすれば柱間寸法は10尺で、桁行の柱間寸法は2.1m（7尺）等間である。柱掘形はSB015の柱掘形より大きく径約90cmの隅丸方形を呈する。建物方位はSB015と同一方位をとる。

SB025　講堂と金堂との間で検出した2間×1間以上の南北棟建物である。柱穴掘形は円形を呈し、径40cm前後、深さ30cm前後である。柱間寸法は梁行1.8m（6尺）、桁行2.4m(8尺）である。桁行が8尺等間だとすると3間以内と考えられる。もし4間以上とすると講堂跡の調査に柱穴が検出されていなければならないが、その痕跡は確認していない。この建物の心は伽藍の中軸線と合致する点注目され、講堂に付属する簡単な屋舎であった可能性も考えられる。

SB030　講堂の南側で検出した2間×2間の総柱建物である。柱の構造から倉庫とみられる。柱掘形は円形で、径50～80cm、深さ50～60cmを測り、前述のSB025建物の掘形より一回り大きい。柱間寸法は東西方向で1.8m（6尺）等間、南北方向で2.1m（7尺）等間である。建物の方位はN－8°35′－Wで、今回検出した建物群の中で唯一西偏するものである。柱間寸法は東西方向で1.8m（6尺）、南北方向で2.1m（7尺）である。この建物の年代については西南隅の柱穴がSK018から切られており、SK018に先行する。そして、SK018からは奈良後半期の土師器が出土していることから、それより下ることはない。

SB035　金堂跡の南側で検出した2間×2間以上の東西棟建物である。柱の掘形は円形で径25～35cm、深さ15cm前後である。柱間寸法は梁行1.8m（6尺）、桁行2.1m（7尺）である。建物方位は前述のSB025と同様、伽藍軸線方向に合致している。この建物は西側の発掘区外に延びているが、もし桁行が4間とすれば先のSB025と同じく建物の心と伽藍の中軸線が一致することになり注目される。

土壙

SK009　金堂の南側、SB035の東側で検出した不整形の土壙で長径6.5m、深さ40～75cmを測

る。これは東側の発掘区外に拡っており、約半分程を検出したことになる。

SK013　金堂跡の南の足場穴列中央部付近で検出した浅い瓦溜りで、略円形を呈する。この瓦溜りを完全に除去後に足場穴が検出できる。ここからは13点の瓦当が出土している。

SK016　金堂の足場穴列の西南隅部付近で検出したもので、SK013同様に浅い掘り込みで、足場穴検出時にはその痕跡を失なう。

SK018　講堂跡の南側で検出した不整形の瓦溜りで、SB030の西南隅部柱穴を切っている。深さは30cm前後で底面はほぼ平坦である。ここからは多くの瓦片および8世紀後半代の土器が出土している。このことからSB030は8世紀後半代を下るものではない。

SK019　講堂跡の発掘区南端で検出した長円形の土壙で、その一部を検出した。検出部分の長径4.4m、深さ30cmで底面は平坦である。ここからは8世紀後半代の土器が出土。

SK022　回廊の東北隅地区のほぼ中央部で検出した不整形の瓦溜りで、深さ40cm前後であるが、大部分は樹木のため完掘できない。この瓦溜りを除去後回廊柱穴を検出する。

SK023　講堂跡発掘区の北端で検出した深さ20～30cmの土壙で、全体の形状はそのほとんどが発掘区外であるため不明である。瓦片が多量に出土したことから瓦溜りとみられる。

SK028　回廊西北隅地区で検出したほぼ円形の小土壙で、径100cm、深さ20cm前後のものである。

SK034　塔跡発掘区の東端部で検出した瓦溜りである。

SK036　塔跡発掘区の東北隅部で検出した瓦溜りで全体の形状は不明。深さ30cm前後を測る。

註

1．鏡山猛「北九州古瓦の一様式について」『九州考古学論攷』　1972

2．山本通「天台寺阯調査」『福岡県史蹟名勝記念物調査報告書』第五輯　昭和5年3月

3．註1と同じ

V 遺 物

4次にわたる発掘調査を通じて主に土壙などから多数の遺物が出土した。その大部分は瓦類である。以下出土遺物について瓦塼類、土器類、その他の遺物に分けてのべることにする。

1．瓦塼類

発掘調査を通じて出土した瓦類は膨大な量にのぼっており、主に金堂跡、講堂跡の周辺で検出した瓦溜りSK009、SK013、SK016、SK018、SK023などから出土した。瓦塼のうち大部分は丸・平瓦である。以下種類ごとにのべる。

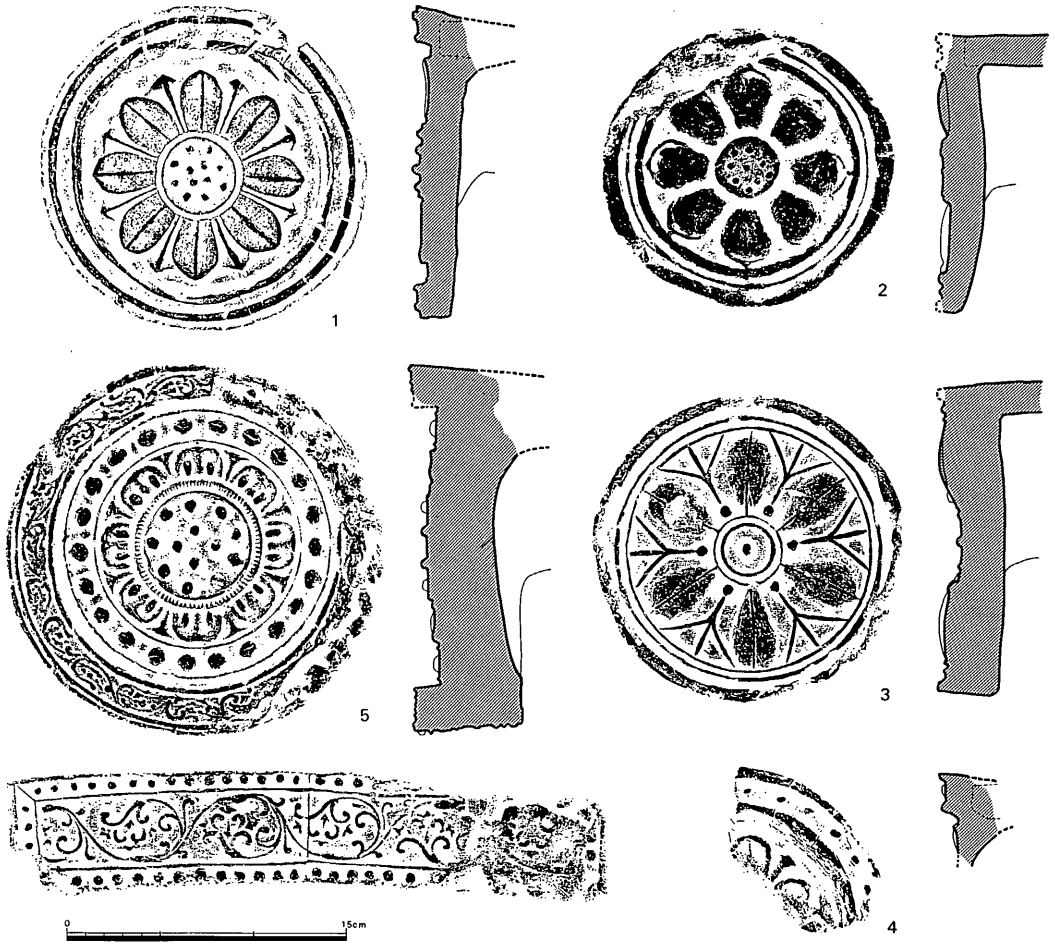
軒丸瓦（第16図、図版19）

4次にわたる調査で合計108点が出土した。これらは5型式に分類できる。このうちⅠ類が最も多く全体の83%を占めている。

Ⅰ類（1） 単弁八弁蓮華文で、中房は一段高く、やや幅の広い沈線によって囲まれる。中に4＋8の小さな蓮子を配する。蓮弁は浅い匙面をなし中央部に稜線が走る。弁端は尖り気味である。外縁は直立縁で、断面が台形状を呈する圏線がめぐる。丸瓦の接合位置は高く外縁付近にある。また接合位置は瓦当面文様に対して必ずしも一定していない。瓦当裏面は丁寧なナデ調整を行っている。丸瓦部凸面は縦方向のヘラナデにより調整している。胎土は砂粒をほとんど含まないものと、多量に含むものがある。この軒丸瓦の弁とよく似た特徴を有するものは韓国慶州所在の皇龍寺や雁鴨池から出土しており、あるいはこの軒丸瓦は、その系統を新羅にたどれるのかも知れない。同笵例は大分廃寺から出土している。89点出土。

Ⅱ類（2） 単弁八弁蓮華文で、中房は小さく、中に1＋9の小さな蓮子を配する。外まわりの9個の蓮子は整然と配置されていない。弁はふくらみを持ち、弁端は尖る。外区には三重の圏線をめぐらすが中央のものは細い。丸瓦の接合部は外縁付近にあり、接合に際しての補強の粘土の貼りつけも薄い。瓦当裏面は丁寧なナデ調整を行っている。外縁部の圏線の間に1個所笵型のキズによると考えられる痕跡があり、これを基準に瓦当面に対する丸瓦の取付け位置をみると1と同様に一定していない。胎土は砂粒をあまり含まず精良である。6点出土。

Ⅲ類（3） 単弁蓮華文で、中房は小さく弁区よりも低い。二重圏線によって囲まれた中央に小さな蓮子一個を配する。弁は倒卵形の素弁で、弁央に細い縦線が走る。間弁は下端に珠文を付した松葉状の凸線で表現されている。外区内縁は二重の圏線がめぐり、外縁は幅の狭い直立縁をなす。瓦当裏面は丁寧なナデによって調整している。丸瓦の接合位置は高く裏面の接合粘土の貼り付けもわずかである。丸瓦部凸面には小さな格子目の叩きが残る。系統的には高句麗系に属するのであろう。同笵例は行橋市所在の椿市廃寺から出土している。2点出土。



第16図　軒丸瓦拓影・実測図

Ⅳ類（4）　小片であるため弁数や、中房については不明である。弁は単弁で弁端が尖り、弁央に縦線が走るが、全体の形状については不明である。外区は一段高く珠文を配する。丸瓦の接合位置は比較的高い。外区に珠文を配する点から前三者よりは時期的に下るものであろう。1点出土。

Ⅴ類（5）　いわゆる新羅系軒丸瓦と呼ばれているものである。中房は大きく4＋9の蓮子を配する。周囲には幅5㎜程度の蕊帯をめぐらしている。弁は複弁八弁蓮華文であるが蓮弁自体は短くずんぐりしている。外区内縁は大粒の珠文をめぐらし外縁は高い直立縁で、宝相華唐草文をめぐらしている。また顎部は幅広く、ここにも珠文帯によって囲こまれた中に外縁と同じ唐草文をめぐらしている。瓦当裏面の下端部には幅の広い凸帯をめぐらしている。この軒丸瓦の内区の文様構成および蓮弁などの形状は我国最古といわれる筑紫観世音寺および京都妙心

寺の梵鐘の撞座の蓮華文に酷似している。京都妙心寺の梵鐘には「戊戌年四月十三日壬寅　收糟屋評造　春米連廣國鋳鐘」の銘が陽鋳してある。戊戌年は文武天皇二年（698）であり、この瓦の年代も698年を前後する時期に考えて大過ないものと考えられる。同笵と考えられるものは嘉穂郡穂波町所在の大分廃寺から出土している。10点出土。

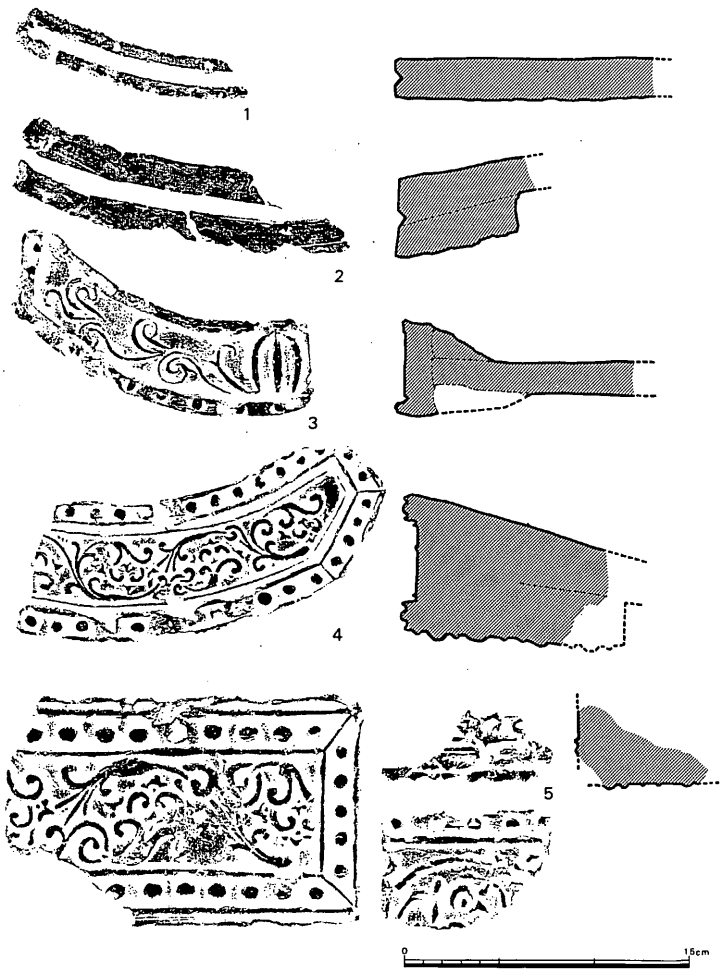
軒平瓦（第17図、図版20）

出土点数は36点で軒丸瓦の３分の１にすぎない。これらは３型式５種類に分類できる。

Ⅰ－ａ類（１）　平瓦の広端面に一条の沈線を施した二重弧文軒平瓦である。沈線は幅６㎜前後で、断面はＶ字形をなす。両側面はヘラケズリによって調整している。凸面は斜格子の叩きである。６点出土。

Ⅰ－ｂ類（２）　二重弧文軒平瓦であるが、１とは異り瓦当部は幅５～６cm、厚さ２cm前後の粘土板を貼り付けた後、平瓦との合せ目に幅１cm、深さ５㎜程度の断面がＶ字形をした大き目の沈線をヘラによって施したものである。側面は丁寧なヘラケズリによって調整している。平瓦部凸面と顎面には斜格子目の叩き痕が顕著に残っている。９点出土。

Ⅱ類（３）　均正唐草文である。中心飾は中央に１条の縦線を施した円頭曲線文で、その左右に５回反転する唐草文を配するか、左右で唐草の形状が多少異っている。外区は下外区および両脇区には珠文を配しているが、上外



第17図　軒平瓦拓影・実測図

区は素文である。破片の断面観察によると成形にあたっては、まず笵形に薄く粘土を押し込んだ後、平瓦をあてがい、その上下に粘土を補充している。特に顎部には粘土を厚く補充し、段顎風に成形している。文様の形状や瓦当部の製作技法からみて軒平瓦の中では時期的にもっとも下るものと考えられる。6点出土。

Ⅲ－a類（4）　いわゆる新羅系軒平瓦で、内区文様は左へ扁行する宝相華唐草文である。瓦当面の両脇区は三角形に作って二区画とし、上・下両外区とともに半円形の珠文をやや密に配している。顎部は深顎で、この面にも瓦当面の文様を拡大した宝相華唐草文を施し、周囲は珠文帯で囲んでいる。顎部成形にあたっては粘土板を貼り付けている。平瓦部凹面は丁寧な横方向のナデによって調整している。凸面はやや大き目の正格子の叩きである。14点出土。

Ⅲ－b類（5）　小片であるため瓦当面および顎面の文様はわずかしか残っておらず、全体の文様の形状は知り難い。顎部文様は4と同様に珠文帯で囲まれているが、内区の唐草文は線の表現も粗雑で本来の文様構成からは大きく退化している。1点出土。

丸瓦・平瓦（第18～20図、図版21～23）

寺院の建立にあたって用いられた丸瓦・平瓦の量は、相当な枚数であったはずである。天台寺跡の場合、地方寺院と言えども主要な建物（金堂跡・講堂跡）は、瓦葺であったから、少なく見積っても10万枚以上の瓦を必要としたものと考えられる。

今回、3次にわたる発掘調査によって得られた瓦類は、整理箱425箱分である。整理箱の重量の平均が15kg程度であるから、総重量が6375kg程度と推定出来る。第18図の丸瓦が3.5kg、平瓦が5kg程度であるから、今回、得られた出土瓦の量は丸・平瓦各750枚分程の出土量に過ぎず、金堂・講堂等を全面発掘した量としては少なすぎる。

また、完形に近いものも1～2点に過ぎず、分類用の標本資料としてとり出したものも細片を含まざるを得ない結果となった。

このことは、第二次大戦中、当遺跡が軍用地となり礎石まで穴を掘って埋めこまれたことと無関係ではないものと推定される。おそらく、多量の瓦類が、まとめて処分されたと思われる。

(1)　丸瓦

丸瓦は、次の二群に大別される。

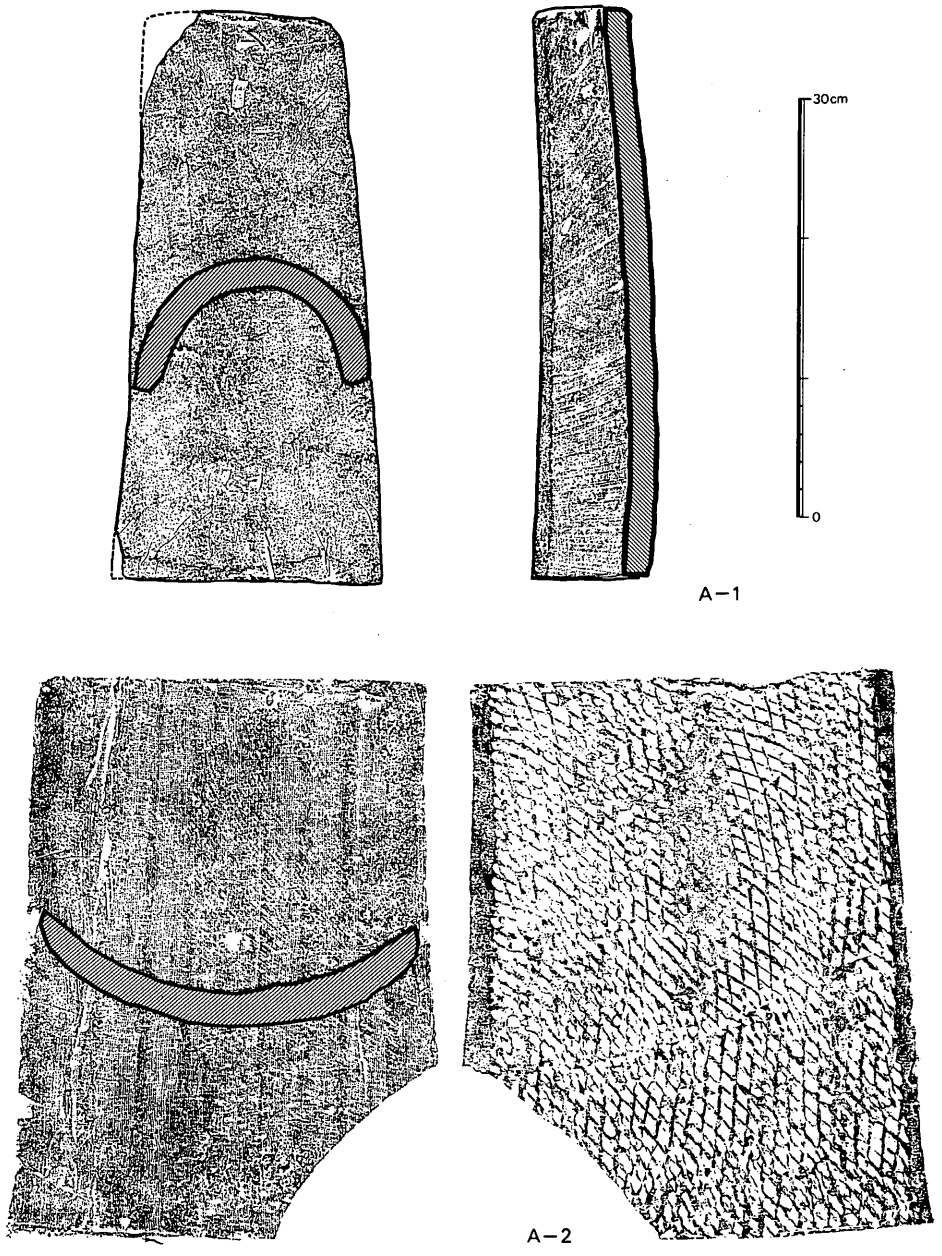
A．行基式のもの（第18・19図、図版21・22）

B．玉縁式のもの（第19図B、図版22－B）

Aは、完形に近いもの（第18図A－1）が1点ある他はすべて破片である。叩打具や模骨・製作技法から5種に分類出来る。A－1は、長さ40.8cm中央幅17.0cmである。表面は、すり消し、裏面には布目・糸切り痕を残している。側面部内側をヘラ削りしている。胎土に砂粒を含み、焼成は良く暗灰色である。

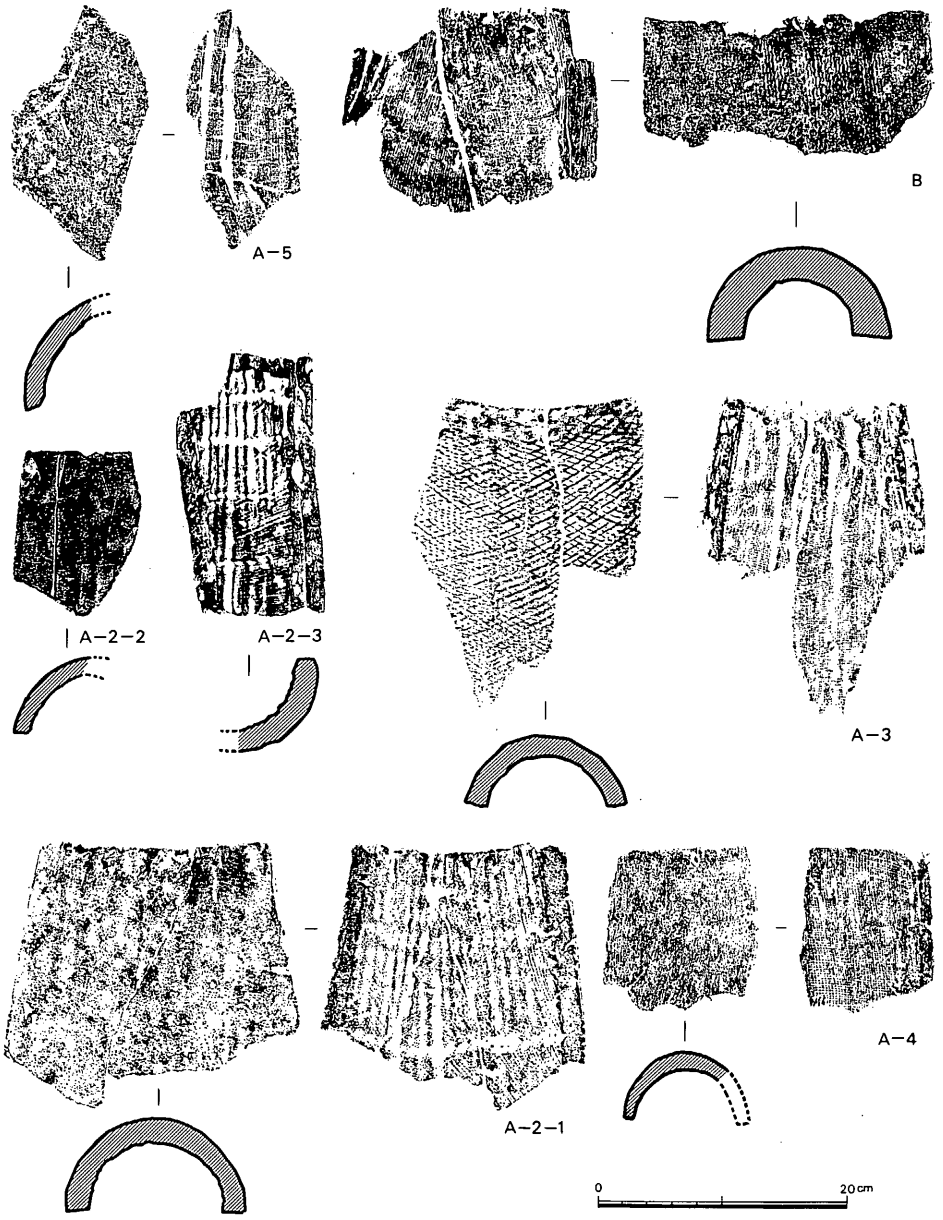
A－2は、狭端部の径がA－1に近く、ほぼ同大と考えられるよう。模骨に特徴があり竹管

状の材を数ヶ所で結束して、すだれ状のものとして使っている。A－2－3は、その1例である。この種の模骨は、福岡市三宅廃寺にもみられる。また、もう1つの特徴はA－2－2に示すように円筒状の瓦を2つ割りするにあたって、分割計画線が予じめ外面にひかれている。分



第18図　丸・平瓦拓影・実測図

割計画線を無視する状況で分割された瓦片は、10点以上におよんでいる。胎土に少量の砂粒を含み、焼きも良い。赤紫・灰色・暗灰色等種々の色調のものがある。Ａ－３は、やや小型で外面に細かい斜格子目を残す。叩打具が長い為か面をとった感じの断面となっている。円筒の分割



第19図　丸瓦拓影・実測図

は内側から切り込みを入れ、乾燥した後、打撃を加えて２分割したものである。砂粒を含み、灰橙色をしたものが多く、焼成もやや悪い。Ａ－４はさらに、小型のものと思われる。外面をなでつけて整形したもので、内面布目はやや粗い。砂粒を含み、暗灰色のものが多く焼きは悪い。Ａ－５は、ただ１点であるが粘土紐で作成された瓦である。砂粒を含み、橙色で焼きはやや悪い。

Ｂは、外面を縄で叩打した後、すり消していて、やや短か目の玉縁がつく。暗灰色～灰白色のものが多い。胎土に砂粒を多く含み、焼きは良い。

(2)　平瓦

平瓦も二群に大別される。

Ａ．桶巻き作りで、裏面に格子目の叩打痕を残すもの（第18図Ａ－２・第20図、図版21・23）

Ｂ．１枚作りで、裏面が縄目の叩打痕のもの（第20図Ｂ、図版23－Ｂ）

Ａは、主として叩打文の違いから７種に分け得る。Ａ－１は、幅6.8cmで長さ7.0cm以上の正格子の叩打具を用いた瓦で、叩打文をまばらに裏面に残す。胎土に砂粒を含み、焼成も良い。色調は灰白色から暗灰色のものが多いが、淡橙色のものもある。Ａ－２は、裏面全面に斜格子目を残す。長さ39.5cm、最大幅28～29cm程の大きさである。表面は、板状模骨の痕、糸切り痕、布目が残る。粘土円筒を切り離した後に、側面から凸面にかけて面取りをする癖がある。胎土に砂粒を含み、焼成も良いものが多い。灰色から暗灰色のものが一般的である。Ａ－３は、Ａ－２の斜格子目に近似するが二条の横線が認められる。胎土や色調、焼成等もＡ－２に類似し、側面から裏面にかけての面取りする癖も共通する。Ａ－４は、Ａ２・３に比較して細い斜格子目の瓦である。表面布目をすり消しているものが多い。側面から凸面にかけて面取りする。砂粒を含み、黒色で須恵質のような焼上りのものが多い。Ａ－５は、さらに細かい斜格子を裏面全面に施す。砂粒を含み、暗灰色で焼成も良い。Ａ－６としたものは、裏面斜格子目の叩打をした後に、全面をすり消している。従って、叩打文の全容をつかみにくく、Ａ－４・５あたりと同じ叩打具の可能性を残している。砂粒を含み、淡紫色で焼成も良い。Ａ－７は、丸瓦Ａ－３と同じ叩打具を使用したものと思われる。胎土、焼成、色調ともに類似している。７種の瓦のうち、Ａ－３・５には、模骨に分割位置を示す突起があったものと推定出来る溝状の痕跡の残すものがある。

Ｂの瓦には、Ａとの比較において以下のような相異がある。

①　裏面に縄の叩打痕を残す。

②　砂粒を多量に含み、灰色に焼上っている。

③　Ａの瓦の長さを計れるものが２点あるが、39.5～40cmであるのに対し、Ｂでは36cmとやや短い。

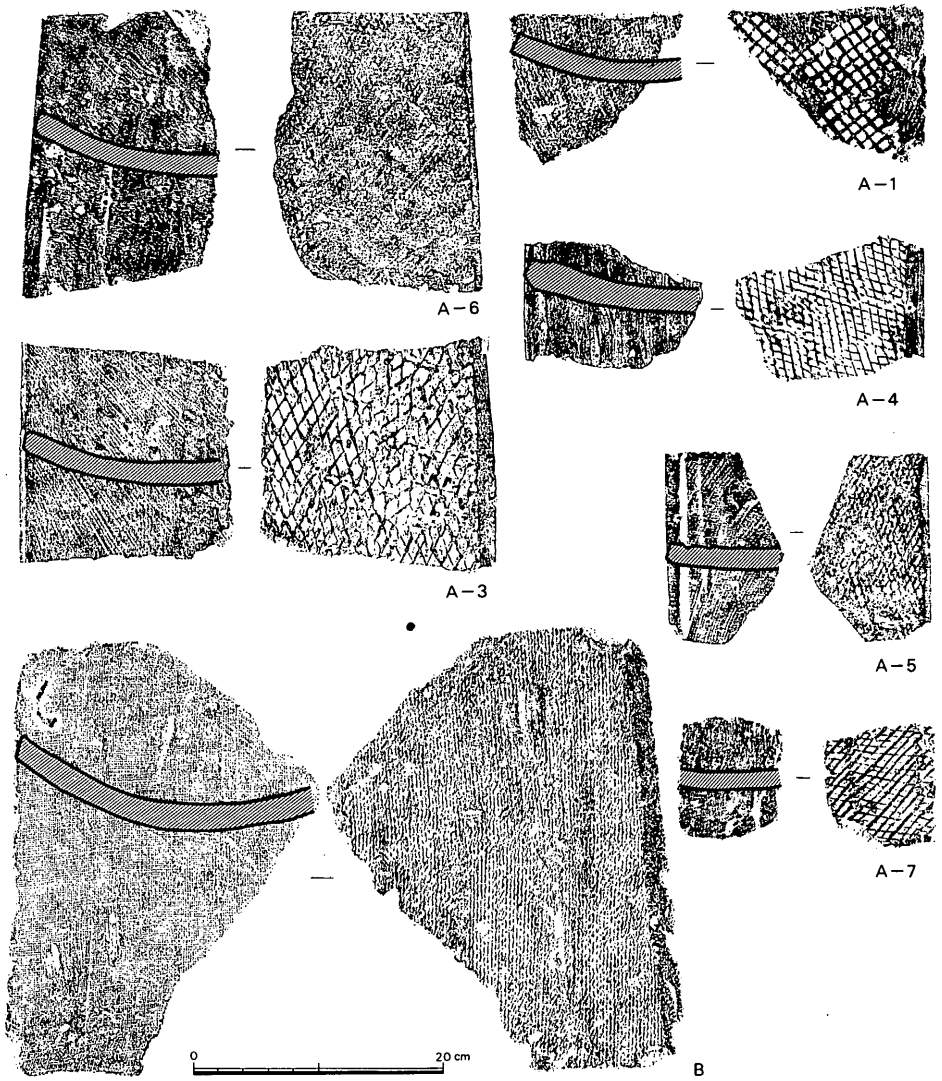
などの相異がある。Ｂが一枚作りと考えられる理由は、

①　粘土に合せ目の痕跡が１点もない。

② 布目にも継ぎ目の痕跡がない。

③ 側面を第21図1・2および図版24－B・Cのようにヘラで削りとって整形しているにもかかわらず、第21図3、図版24－A・Bのように削り残された部分に表面から布目が続いて残っている瓦片が10点余ある。

④ 側面がヘラ削りされているにもかかわらず第21図4および図版24－Dのように削り余った土を内側へおさえ込んでいる例が20数点ある。



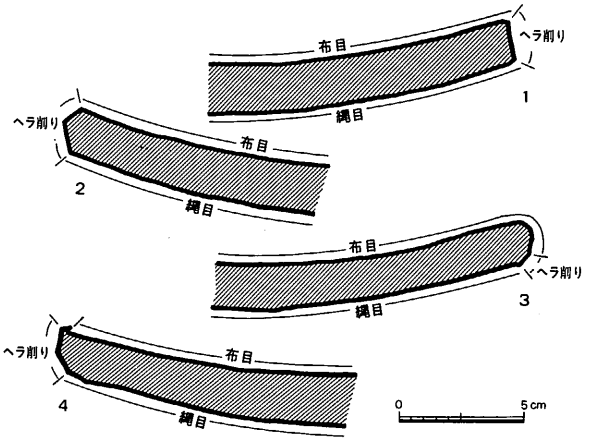
第20図　平瓦拓影・実測図

⑤　図版24の３は、木口部分に布目がまわる例であるが、側端に近ずくにつれて粘土の厚さが布の圧力により薄くなる例がある。

⑥　第20図Ｂの瓦で、桶巻き作りを想定した円周を測ると 157 cmほどになる。瓦の幅を20～30cmと考えた場合５枚の瓦が出来ると想定される。また、４で割った場合、幅40cmとなりこれだけの幅をもつ瓦はＡにもない。

⑦　模骨の痕跡がない。

などが指摘出来る。



第21図　平瓦Ｂ類手法模式図

③は、瓦一枚分の粘土板の側端部を最も明瞭に示すものであり、一枚作りと考えてよい。①・②・⑥は、浦林亮次氏が法隆寺東院伽藍の資料[註2]から平瓦一枚作りを論証した時の傍証根拠である。又、⑦は、①・②・③と合わせて凸面型の平瓦一枚作り用の製作台を予想させるものであり、④・⑤の現象は、平瓦一枚作りであるから起り得る状況と考える。[註3]

道具瓦（第22図、図版24）

熨斗瓦19点と、隅切瓦の未製品１点がある。熨斗瓦は、２枚割のもの５点すべてがＡ－２の平瓦を原体としている。３枚割は15点あってＡ－１の叩打文のも11点、Ａ－２の叩打文のもの４点である。隅切瓦の未製品は、表面にヘラで切り離し計画線を入れている。Ａ－３の叩打文の瓦である。

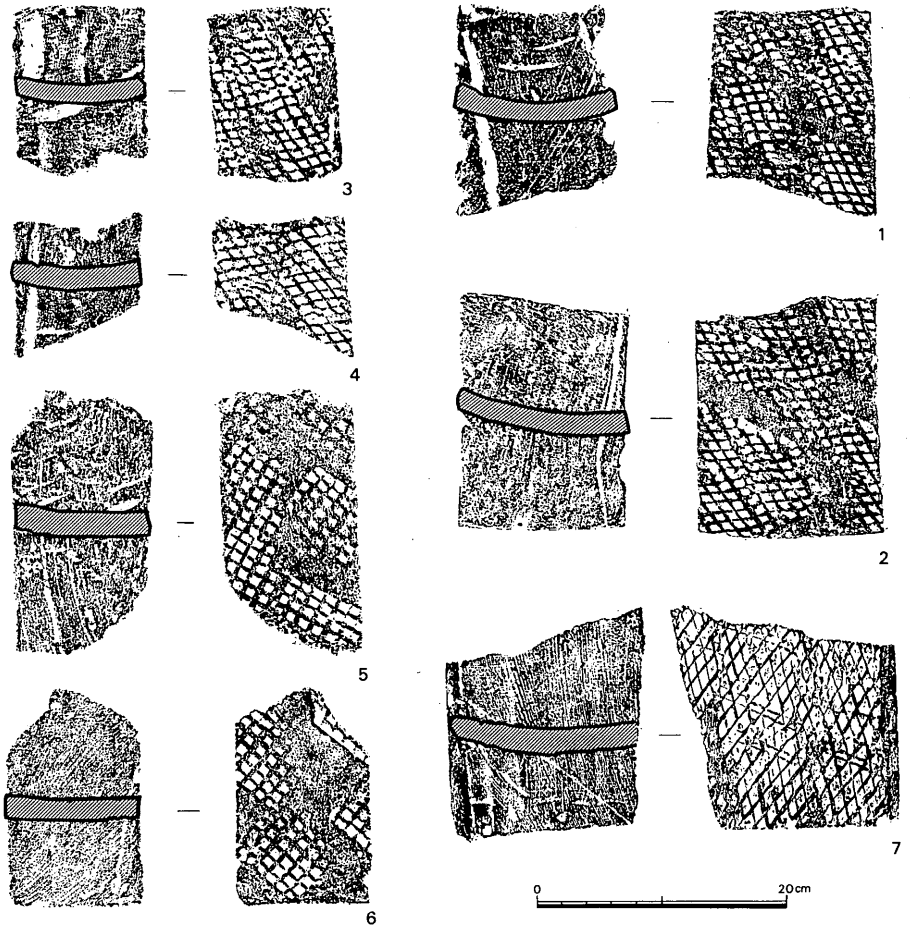
天台寺瓦窯の平瓦（第23図、図版25図）

天台寺瓦窯の平瓦が、九州歴史資料館に整理箱３箱分保管されている。天台寺瓦窯跡の調査は、昭和６年１号窯跡[註4]が、山本通氏により調査され県報に報告されたものと、昭和35年２・３号窯跡が福岡県教育委員会・田川市教育委員会[註5]・九州大学考古学教室によって調査されたものとがある。昭和35年の調査では、３号窯跡は、完全に破壊されていたと報告されている。調査を担当された渡辺正気氏の話と合せて、九州歴史資料館にあるものは、２号窯跡出土の資料と判断出来る。この２号窯跡からは、軒丸瓦第５類３点と平瓦が出土している。平瓦は、第23図に示すとおり、Ａ－１・２の叩打痕の瓦だけである。

軒瓦と丸・平瓦の対応関係

軒丸瓦では、Ⅰ類が丸瓦部に格子目を残し、裏面に竹管状の模骨痕を残していることから、丸瓦Ａ－２類と考えられる。（図版22図最下段）

軒平瓦では、重弧文に荒い斜格子が残るものがあり平瓦Ａ－２と対応する。また、軒平瓦Ⅲ－



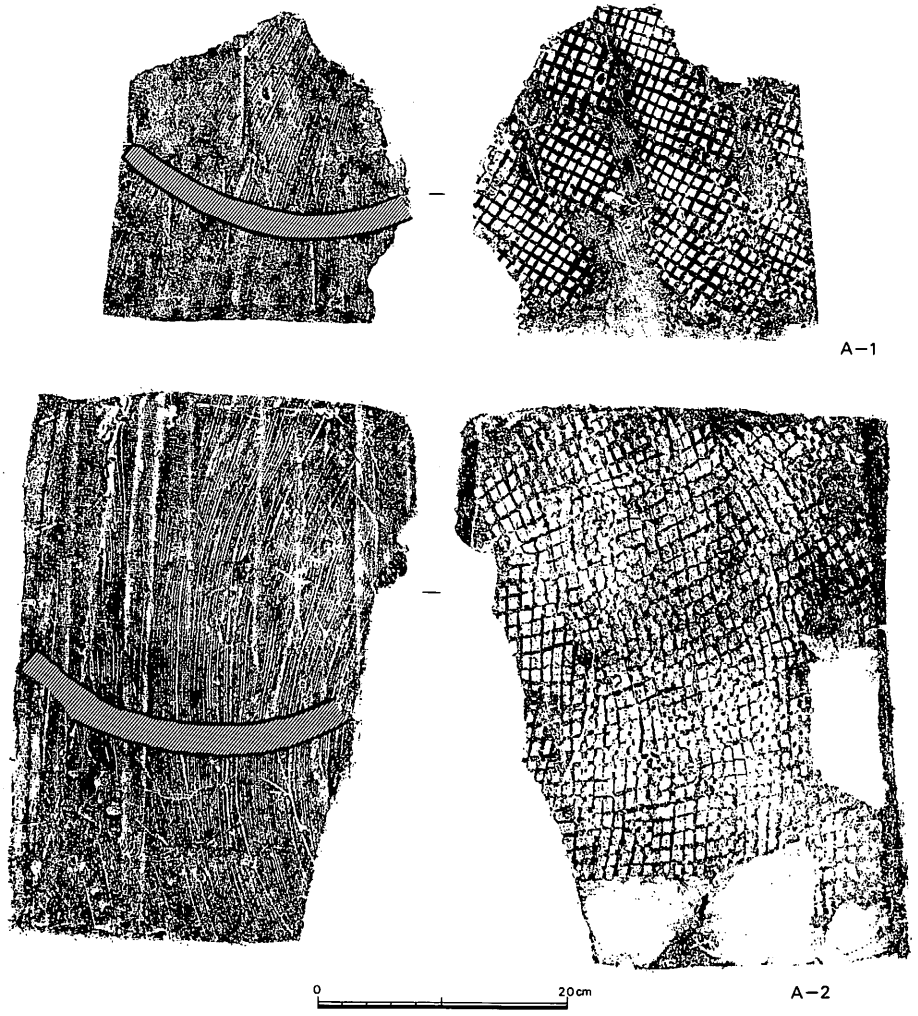
第22図　道具瓦拓影・実測図

a類には、平瓦部にA－1の叩打痕が残っている。

また、天台寺2号瓦窯で、軒丸瓦V類と平瓦A－1・2が出土していることから、新羅系セットと、平瓦A－1・2が対応するものと推定される。

丸瓦・平瓦の対応関係

丸瓦B・平瓦Bは、ともに縄目の叩打痕を残すことからセットとして考えられる。また、丸



第23図　天台寺瓦窯平瓦拓影・実測図

瓦Ａ－３、平瓦Ａ－７も、叩目や胎土等からセットとして製作されたものと考えられる。他の行基式丸瓦・桶巻き作り平瓦は、製作工房の同一性を積極的に推定出来るような根処は、見い出せていない。なお、丸瓦・平瓦から見た時期的な経過を考えるとすれば当寺院の創建時期の丸・平瓦は、行基式の丸瓦と桶巻き作りの平瓦が用いられた。奈良時代後半になって、玉縁式の丸瓦・一枚作りの平瓦が差しかえ用として用いられたと考えたい。それぞれの丸瓦・平瓦について、百分比などをもとめてはいないが、縄目の丸瓦・平瓦の量は相等数あり、当寺院の最後の修復事業の時期を示すものと思われる。

2．土器

須恵器（第24図・1～9、図版26）

杯（1～3）　1は復元口径12.8cm、器高3.5cm、底径8.0cm、器肉が厚く体部は直線的にのびる。底部はヘラ削り調整、体部はヨコナデで内底はナデ調整する。SK009出土。2は口径13.8cm、器高3.8cm、底径9.0cm。底部はヘラ切りのままで、他はヨコナデ調整である。体部と底部の境いは明瞭さを欠く。口縁部に油煙が付着し、灯火器として使用されている。暗褐色土層出土。3は復元口径13.5cm、器高4.4cm、底径9.0cm。体部下半は丸味をもっている。底部はヘラ切り未調整、体部はヨコナデで、内底はナデ調整している。塔跡の暗褐色土層出土。

高台付杯（4）　復元口径12.2cm、器高3.7cm。底部から体部は丸味をもち、体部は口縁部に向って外反気味にうすく引き出される。断面四角の低い高台は体部と底部との境いに貼付される。胎土は精選され、調整も丁寧である。金堂と講堂との間の遺構面上から出土。

瓶（5・6）　いずれも体部上位および口頸部を欠失する。5は底部に最大径をもち、ほぼ直線的な体部は上方に向ってすぼまり、特異な形態となる。体部の外面はヘラ削り調整。やや高めの高台は外開きで端部を丸くする。SK009出土。6は小形の肩の張った扁球形の瓶である。全形は知り得ないが、器高が3.5cm程度の細い口頸部を有するとみられる。低い高台は底部端に貼付され、端部は凹状にする。外底の中央付近に「×」のヘラ記号がある。体部外面はヘラ削り調整し、胎土・調整とも良好である。暗褐色土層出土。

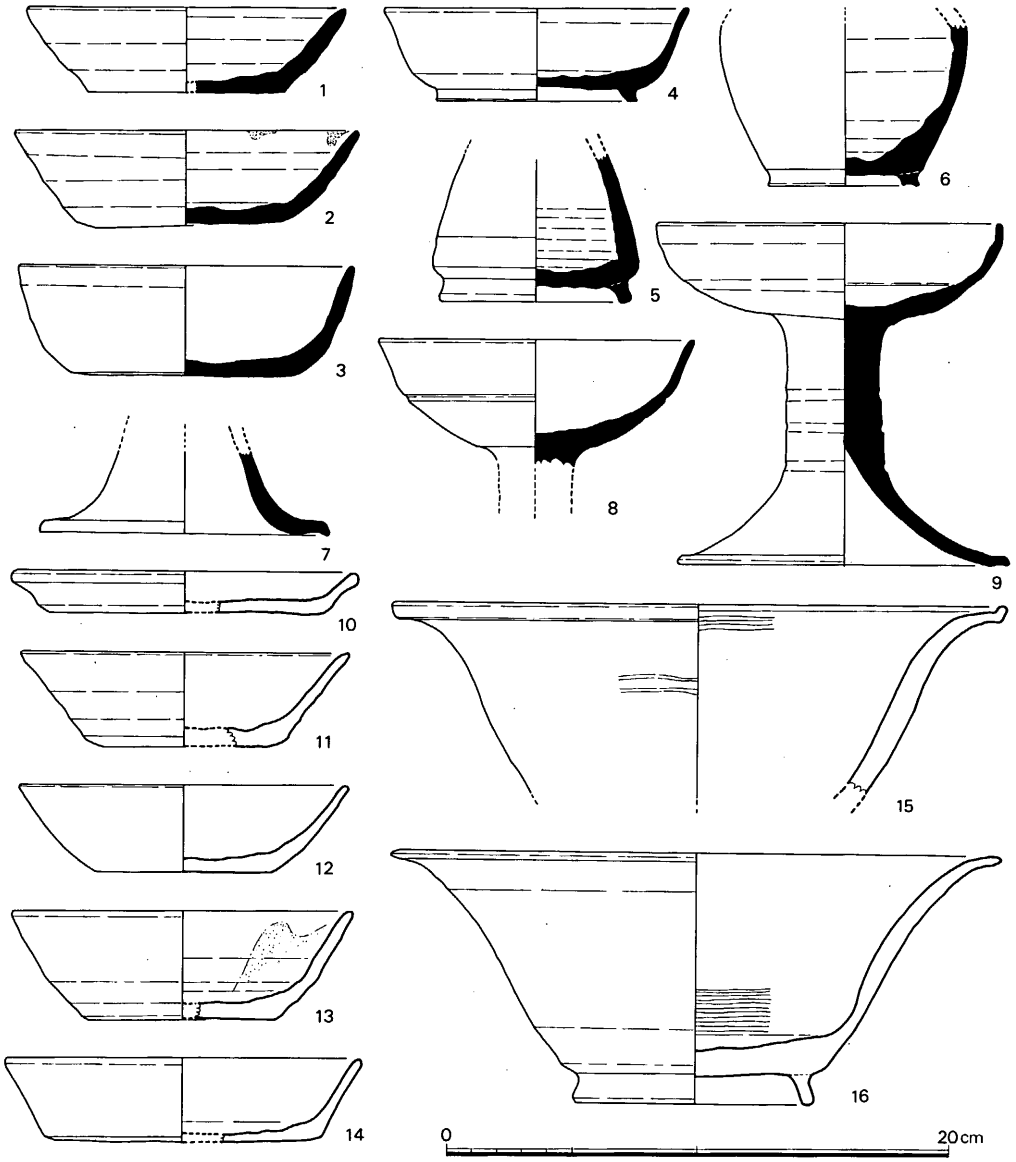
高杯（7・8・9）　7は脚の下半部である。端部はやや不明瞭であるが断面三角形を呈する。SK022出土。8は脚部を欠失するが長い脚を有するものと考えられる。やや深い杯部は体部中位に段を有し、細目に引き出された口縁部はやや外反する。9は比較的保存状態が良く全形を知り得る。口径13.7cm、器高13.2cmである。比較的浅い杯部は丸味を有し、口縁部は直上に引き出され端部を丸くする。ラッパ状に大きく開いた脚部は端部を断面三角形状にするが、やや明瞭さを欠く。脚の中位には三本の沈線をもつ。

土師器（第24図・10～16、図版26）

皿（10）　復元径14.0cm、器高1.7cmの小形の皿である。体部と口縁部はヨコナデ調整するが、底部はヘラ切り未調整である。口縁部には油煙の付着がある。

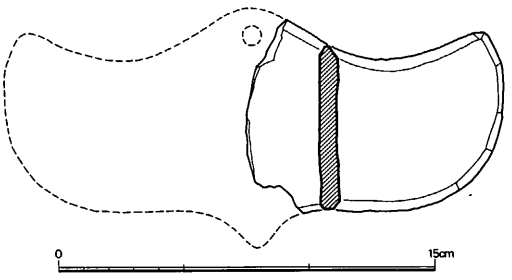
杯（11～14）　11～13は口径13.2～13.6cm、器高3.7～4.4cmを測り、ほぼ同じ形状を示す。底部から斜め外方にほぼ直線的にのびる体部はそのまま口縁部に至る。いずれも底部はヘラ切り未調整、他はヨコナデ調整である。13の内面には油煙が付着する。14は小片であるため口径にはやや疑問があるが、11～13とはやや器形を異にする。焼成不良のため摩滅が著しく調整は不明である。底部はヘラ切り未調整である。復元口径14.2cm、器高3.5cm。11はSK018、12は暗褐色土層、13はSK009出土である。

椀（15・16）　大形の高台付椀である。15は体部上位から口縁部にかけて$\frac{1}{4}$程が残存する。体部中位はや、内弯気味で上半を大きく外反させる。そして、口縁部はわずかに直上に引き上げ端部を丸くする。や、不明瞭であるが内面の口縁部付近と体部外面に一部ヨコ方向の細かいミガキがみられる。胎土は精選され、比較的硬質に焼成され赤味の強い茶色を呈する。復元口径24.6cm。16は図上復元が可能な$\frac{1}{4}$程度の破片である。平らな底部から体部は斜め外方に直線的に立ち上がり、上半を大きく外反させる。



第24図　出土土器実測図

口縁部は15と異なり、そのまま横へ引き出し、端部は尖がり気味にまとめる。全体に摩滅が著しく調整はやや不明瞭であるが、内面の体部下位に丁寧な細かいヨコ方向のヘラミガキが残っている。胎土は精選され緻密で、15と同様に赤味の強い茶色を呈する。いずれもSK018出土である。



第25図　風招実測図

今回出土した土器で、古墳期以降に年代的位置付けがなされるものはきわめて少ない。そして、出土土器の多くは遺構の上面に堆積する遺物包含層である暗褐色土層のもので、遺構と直接結びつく出土状態となると、ごく一部に限られる。出土土器から遺構の年代を判断するまでには至らないが、少なくとも遺構の存続年代を考える手掛りにはなり得よう。

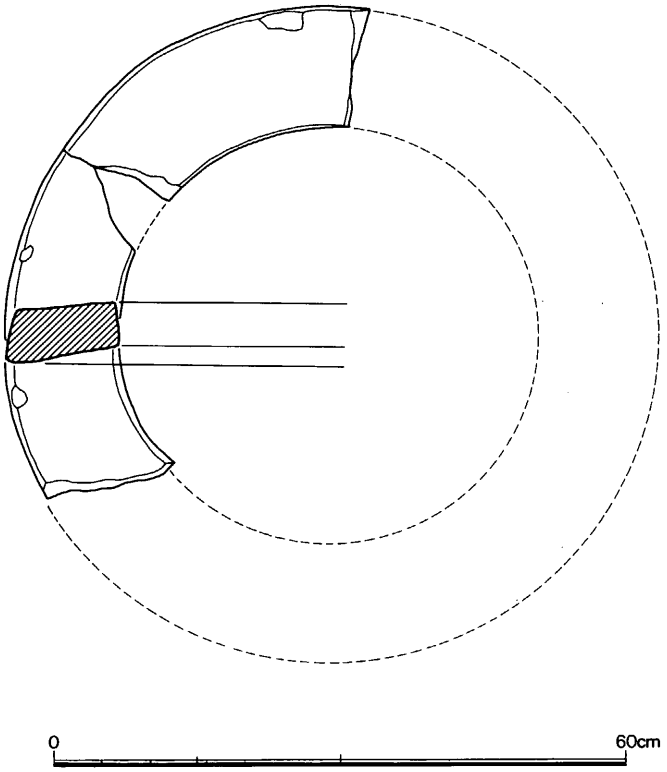
第24図の7・8・9は6世紀末、2・3・4・15・16は8世紀後半代、1・5・6・10を9世紀前半代に年代的位置付けすることができる。

3．その他の遺物

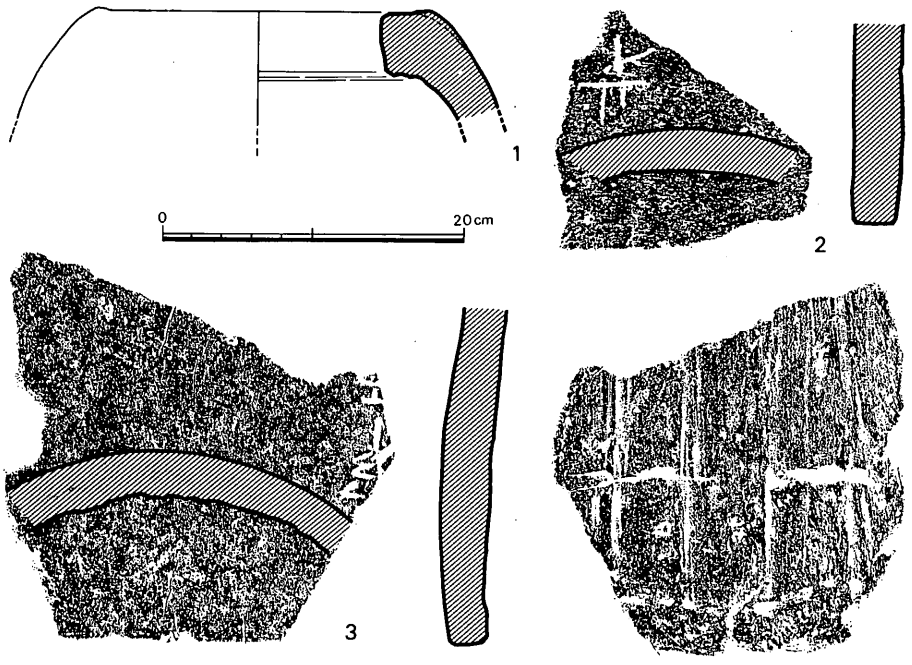
瓦塼類、土器類の他に土製品、金属製品がある。これらは主に金堂の東半部付近から出土した。

風招（第25図、図版27）

約2分の1程度の破片で、中央付近の正確な形状は知り得ないが、杏葉形を呈するものと思われる。厚さ8㎜の粘土板を成形したもので両面ともナデ調整している。周縁部はヘラケズリを行い両側とも面取りを行っている。



第26図　環状土製品実測図



第27図　筒形土製品拓影・実測図

風招の出土例として九州では観世音寺、般若寺、薩摩国分寺の例があるが、観世音寺出土のものは土製品であるとともに形態的にもよく似ている。

環状土製品(第26図、図版27)

破片が５個出土しているが同一個体のものとみられる。いずれも幅12cm、厚さ５cm程度で、断面は長方形を呈している。表面は風化しているが、ナデ調整によると思われる。破片のうち２個は接合でき、これをもとに復元すると外径は68.5cm、内径は44cm程度となる。建物のどの部分に使用されたものか明らかではないが、塔の相輪の基部に使用された可能性が考えられる。

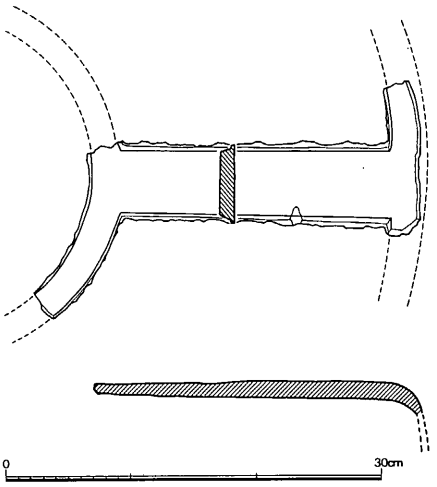
筒形土製品(第27図、図版27)

同一個体のものとみられる破片が10数片あるが、接合可能なものは少く正確な形状はわからないが、上半部が円頭をなし、頂部に穴のある筒形のものに復元できる。１は上端部と推定されるもので円頭形になる。頂部の穴は17cm前後に復元できる。２・３は凸面にヘラによる焼成前の文字と文字ないしは記号とみられるものが刻まれている。表面はナデによる調整が施され、凹面には模骨痕と布目痕とが残っている。もっとも大きな破片で復元すると下端部の直径は約40cm前後となる。厚さはいずれも３cm程度である。下端の直径が環状土製品の内径と相似た数値であることは、両者がセットで使用されたことも考えられる。用途としては伏鉢とも

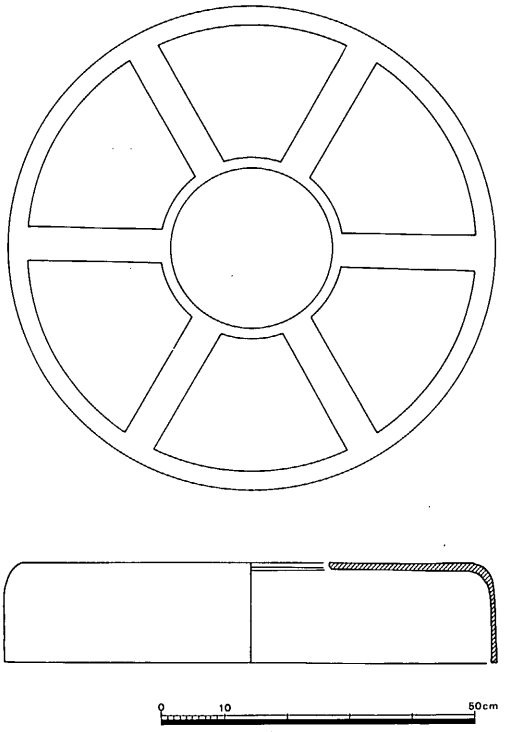
考えられるが、頂部の径があまりにも小さい点に疑問が残る。

九輪(第28図、図版27)

九輪の輻を中心とした部分の破片である。直径は77～78cmに復元できる。輻は幅５cm、厚さは内環付近で１cm、外環付近で1.4 cmである。横断面は台形を呈する。両側縁はいわゆるバリが残っており鋳放しのままである。擦管が貫通する内環は幅2.5cm、厚さ８mmで内径は25.6cmに復元できる。第29図は法隆寺五重塔の九輪を参考に復元したものであるが、輻の数は６本、外環の立上りは15～16cm程度であろう。材質は表面の緑錆から銅製とみられる。塔跡出土。



第28図　九輪実測図



第29図　九輪復元図

註

1．二宮忠司他『三宅廃寺発掘調査報告書』(福岡市埋蔵文化財調査報告書)第50集　1979

2．浦林亮次「瓦の歴史－法隆寺遺瓦群における技術的一論」『建築史研究』第28号　1960

3．栗原和彦「天台寺出土の一枚作り平瓦」『児嶋隆人先生喜寿記念論集』1990

4．山本通　「天台寺瓦窯跡の調査」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第７輯　1932

5．花村利彦「豊前天台寺瓦窯跡発掘調査の概要」『郷土田川』　第18号　1960

Ⅵ　まとめ

以上、今回検出した古墳期以降の主要な遺構と遺物について述べてきたが、ここで①伽藍配置②寺院以前の建物③出土瓦の三点について若干の考察と検討を行ない結びとしたい。

①　伽藍配置

今回の調査で検出ないし確認した遺構は金堂・講堂・塔・回廊である。

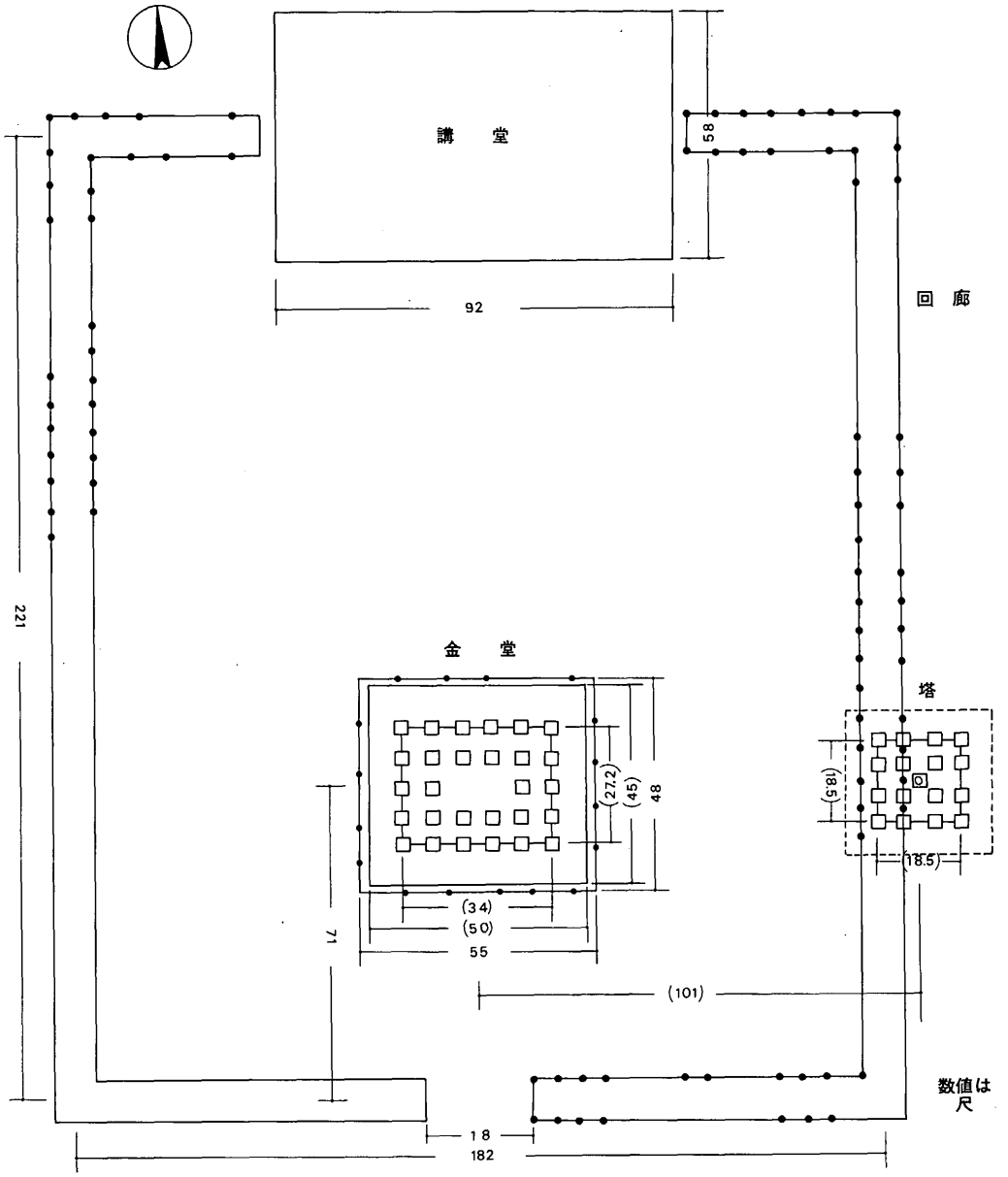
金堂　礎石27個を検出したが、いずれも動かされ、原位置を保つものは1個もなく残された礎石から建物を復元することは不可能であった。さらに、建物の範囲を示す基壇や掘り込み地業の痕跡も全くなかった。唯一その復元の手掛りとなったのは礎石を囲む形で検出された東・西・南・北の柱穴列である。これは位置関係等からみて金堂造営の際の足場穴と判断される。この足場穴は四隅の柱穴を欠くが、東西幅55尺、南北幅48尺である。この足場穴を結んだ範囲の中に鏡山氏復元の4間×5間（柱間寸法6.8尺等間）の四面庇建物を置くと、側柱から南・北では9尺幅、東・西では8尺幅の余裕をもつ東西50尺、南北45尺の基壇が復元可能となる。

講堂　礎石15個を検出したが金堂と同様に全て移動しており、それらからの復元は不可能であった。講堂の規模ないし位置を知ることが出来たのは基壇の掘り込み地業の痕跡からで、その範囲は東西92尺、南北58尺であった。この推定基壇と金堂の心々距離は150尺で、鏡山氏計測の金堂と僧房の心々距離に一致する。すなわち鏡山氏推定の僧房跡が、この掘り込み地業をもつ基壇と言うことになる。鏡山氏は金堂と僧房の間に講堂を推定されたが、調査の結果はその存在を示すものはなく、氏が僧房とされたのは今回検出の回廊との接続関係からみて講堂であることが判明した。建物の規模については、氏は残存する礎石から2間×6間、柱間寸法で12尺等間の建物を復元されているが、この建物を今回検出の推定基壇上に想定した場合、基壇が大きすぎて建物とのバランスがとれない。また、氏の復元された建物を身舎部とし、4間×7間の四面庇建物と考えた場合、推定基壇上におさまらないこともない。しかしながら、氏の報文の図では庇部の礎石は全くなく土壇の四面とも庇部礎石を配置する余裕はみられない。

以上のことから、現時点では講堂建物の規模を復元することは根拠に乏しいため、ここでは差し控えた。

塔　心礎と礎石8個を検出したが、いずれも原位置から移動していた。心礎は山本氏報文のものと形状等からみて同一のものであることは間違いない。鏡山氏は塔の位置を金堂との心々距離で101尺とされ、残存する礎石と土壇から建物の規模を3間×3間、柱間寸法を中央間6.5尺、脇間6尺で復元されている。検出した塔心礎は原位置を移動したとは言え、推定位置より北へ約90cm、西に約40cm動かされているだけで、ほぼ水平の状態で据えられていた。氏の報文が正しければ、ほぼこの位置に塔心礎と礎石および土壇は存在していたと思われる。しかし、

塔の存在を明確に示すような掘り込み地業等の確実な痕跡は残っていなかった。そのような状況のなかで、その位置判断をさらに複雑にしたのは下層から掘立柱の回廊が重複して検出されたことである。この結果、鏡山氏計測の101尺が動かし難いものとすれば塔は掘立柱回廊の一部あるいは全てが廃絶した後に構築されたことになり、特異な状況を呈する伽藍配置になる。



第30図　天台寺跡伽藍復元模式図

一方、101尺の推定地にとらわれないで、塔の位置を回廊外の東方に求めることも可能である。しかし、東方地域の調査を行った結果それを証明する遺構は存在しなかった。

以上のことから、塔は創建期には存在せず、ある時期に回廊が廃された後に新らたに建立されたもものと考えられる。鏡山氏報文にある金堂心から塔までの距離が101尺という計測値は金堂と講堂が心々距離で150尺あり、鏡山氏報文と正しく一致したことから考えて、信憑性はきわめて高い。したがって塔の位置は金堂心から101尺のところであったと結論づけざるを得ない。

回廊　南面回廊・東南隅、東面回廊、北面回廊・東北隅・西北隅で掘立柱の2本柱列を確認し、心々距離で東西182尺、南北221尺規模の回廊を明らかにした。柱間については、梁間は9尺でほぼ統一されているが桁方向については一定しておらず、まちまちである。また、西北隅部では内側柱と外側柱の柱位置が合っておらず、やゝ変則的なものになっている。そして、柱筋がやや不揃いなこと、柱間が一定していないこと、柱穴の深さがやゝ浅いことなどから築地の素柱の可能性も一部残されているが、ここでは回廊として報告した。

講堂との接続関係は推定基壇の中央に回廊が位置することから、建物の東・西の心に取り付くとみられる。また、南面回廊の終息位置を中軸線を対象に折り返すと18尺の空間が出来る。この空間には中門が想定できるが、その遺構は全く残っておらず不明である。

以上、各建物についてまとめ、その問題点等を指摘した。創建期の伽藍は金堂と講堂が中軸線を合わせ、心々距離にして150尺の間隔をもって建ち、中門から延びる回廊は心々距離182尺、南北221尺の規模で講堂に接続する。このとき塔は存在しなかった。そして、ある時期に何らかの理由で回廊が廃され、その頃に鏡山氏報文の金堂心から東へ101尺の位置に新らたに塔が築造され、ここに塔・金堂・講堂の主要伽藍が揃ったとすることができる。

創建の時期については出土瓦から7世紀後半の末頃に、廃絶の時期を出土土器の状況から9世紀後半代とすることができる。

②　寺院建立以前の建物について

寺院が建立される以前の建物として計5棟の建物（SB015・020・025・030・035）を検出した。これらの建物は方位および柱穴掘形から3グループに分けられる。すなわちⒶ西面回廊で検出したSB015・020Ⓑ伽藍中軸線上で検出したSB025・035Ⓒ講堂の南側で検出した倉庫建物SB030のグループである。

Ⓐはその柱掘形の大きさと形態から寺院建立の直前期にあたる建物とみられる。そして、その中心となる地域は伽藍の西方地域に求めることができ、その性格については在地の有力者層の居住地とみることができる。

Ⓑは伽藍の中軸線に建物の心を合わせ、同一方位をとることから寺院の付属施設的建物の可能性が高い。

©は唯一西偏する建物で、検出した建物の中で最も古期に属すると考えられる。年代については根拠はないが、出土土器の中で古墳期後半代のものがみられることから、その頃に推定することは可能であろう。

③ 天台寺跡出土瓦について

天台寺跡出土の軒瓦は、これまでに新羅系、百済系、高句麗系が知られており、なかでも複弁八弁連華文の優美な瓦当文様を施した新羅系（軒丸瓦Ⅴ類・軒平瓦Ⅲ－ａ類）の軒瓦は出土量も多く創建瓦と考えられてきた。[注1]

今回の調査では軒丸瓦５型式108点、軒平瓦３型式５種類36点が出土したが、これらは主に金堂跡、塔跡付近に集中している。まず出土量としては軒丸瓦ではⅠ類が圧倒的に多く全体の82.5％を占めている。この瓦と組み合う軒平瓦はⅠ－ａ類あるいはⅠ－ｂ類の重弧文のものが考えられるが、軒丸瓦と軒平瓦との間には出土量に大きな開きがあるうえ、両者とも出土点数がきわめて少く、どちらとも決しがたい。またⅡ類、Ⅲ類の単弁軒丸瓦も軒平瓦との組合せについては同様である。

次に軒丸瓦Ⅴ類と軒平瓦Ⅲ－ａ類の組み合せになる、いわゆる新羅系軒瓦については先きにも述べたように従来、創建瓦と考えられてきたものである。しかしながら今回の調査では軒丸瓦はわずかに10点が出土しただけで、全体の10％にも満たない出土率であり、単弁八弁軒丸瓦の出土率との間にはかなりの較差がみられる。したがって今回の調査結果だけから判断すると単弁八弁連華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦の組み合せが創建時において軒瓦の主体をなしたものと考えざるを得ず、この創建瓦については再検討が必要であろう。またこの新羅系軒瓦は軒丸瓦、軒平瓦とも金堂跡に集中して出土していることは注目しておく必要があろう。因みに、この天台寺跡と同じように新羅系軒瓦と共に単弁八弁丸瓦と重弧文軒平瓦のいわゆる百済系軒瓦を共伴する例としては築上郡新吉富村所在の垂水廃寺がある。この遺跡については昭和48年から50年にかけて発掘調査が行われ、軒平瓦では重弧文のものが多く、軒丸瓦では逆にこれと組み合う単弁八弁軒丸瓦が少いという結果がでており、軒瓦の使用方法が問題点として指摘されている。残念ながら垂水廃寺の場合、各々の軒瓦の出土点数が示されていないので比較できないが、このような現象が認められることは創建時に使用された軒瓦が必ずしも一組だけでなく、複数の組合せの軒瓦が使用されたことも考えられ、今後の検討課題として残されていると言えよう。

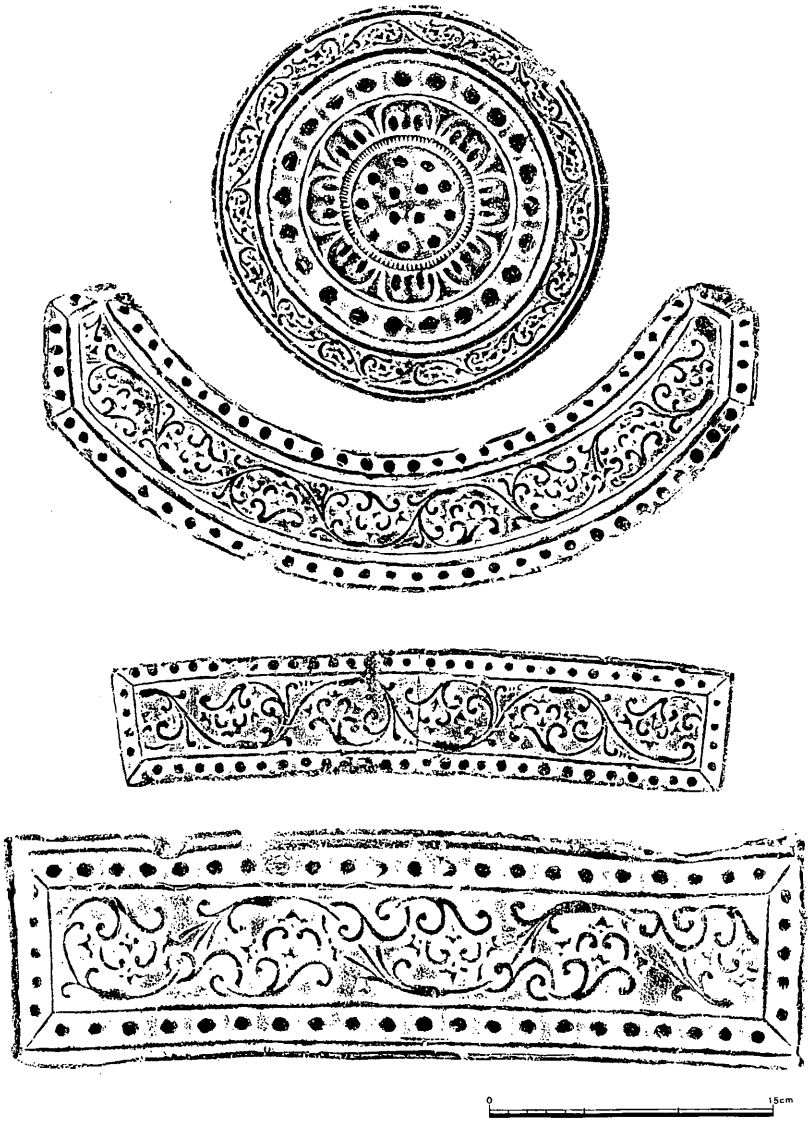
次に遺構の項で述べたように寺院創建時には塔は建立されず、掘立柱回廊が廃絶した後におくれて塔が建てられたと判断されるが、この間の時期差がどの程度であったかは遺構の面からは知り得ない。これを出土軒瓦からみた場合どうであろうか。出土した軒瓦は軒丸瓦、軒平瓦とも型式的に数は少く軒丸瓦Ⅵ類と軒平瓦Ⅱ類を除いては、いずれも７世紀後半代のもので、ほとんど時期差はないものとみられる。時期的に降る前記の軒丸瓦と軒平瓦は出土点数も少く、後の補修に使用されたものと考えた方が妥当のように思える。このように考えると塔は寺院造営

後の間もない時期に建てられ、屋根には創建時の軒瓦が用いられたと考えて大過ないものと思われる。

註

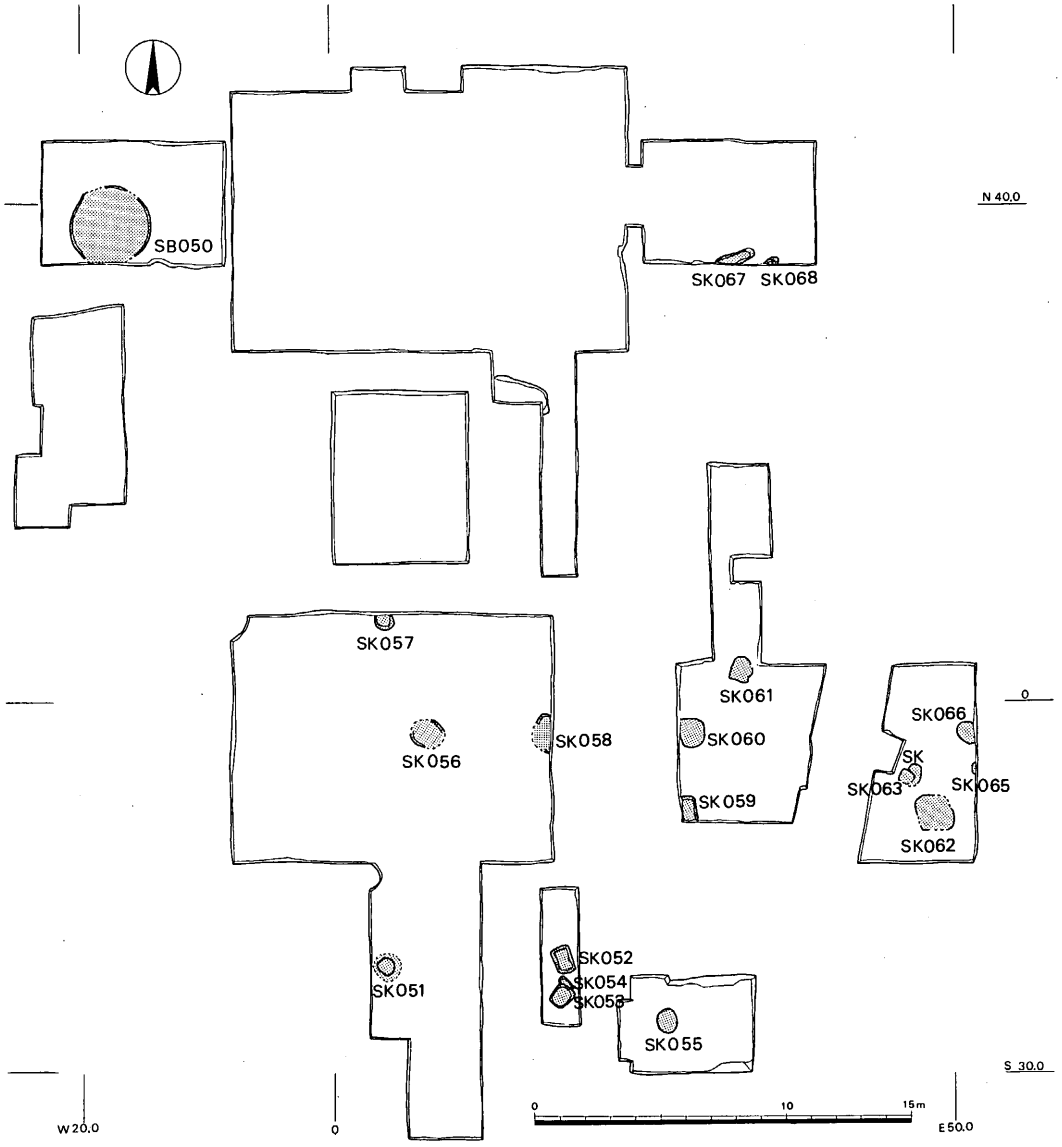
① 小田富士雄「豊前における新羅系古瓦とその意義」『九州考古学研究』歴史的代編　1977

② 新吉富村教育委員会「垂水廃寺」 新吉富村文化財報告書第2集　1976



第31図　天台寺跡・同瓦窯出土軒瓦拓影

Ⅶ　弥生時代の遺構と遺物



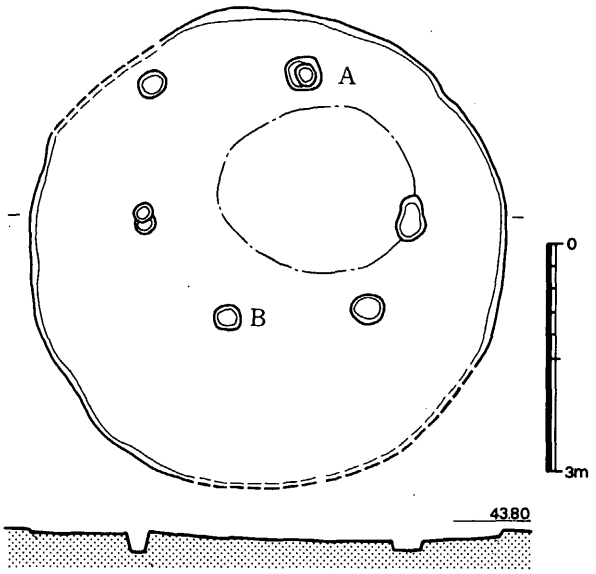
第32図　弥生時代遺構配置図

1．遺構

弥生時代の遺構としては円形住居跡１、円形土壙５、長方形土壙15、さらにピットを多数検出した。円形土壙と長方形土壙は貯蔵穴と考えられるが、そのような用途を裏付ける遺物の出土状態ではなく、後にゴミ処理のために埋め戻されている。今回は、調査の主眼が歴史時代にあることから、このうちの５基については完掘したが、他は上面をやや掘り下げて平面プランを確認したのみである。ピット群は遺構としてのまとまりが見られなかったので説明は省略する。

住居跡

SB050　北面回廊付近で検出した円形プランの住居跡である。回廊建物の整地時に大きく削平を受けているため残りが悪く周壁は約10cmの深さが残っているだけである。北と南側は消失してしまっており、その延長を追うことが出来ない。東西の差し渡し6.2m。また床面の中央付近には樹木が植栽されているので通常見られる炉跡は検出できなかった。このほかには、この住居に伴う柱穴と考えられるピットを検出している。図中A、Bの柱穴は住居のほぼ中軸線上に位置している。棟木を支える主柱穴であると思われるが、壁面までの間隔は等しくない。但し、これら以外に同様の性格をもつピットについては検出できていない。住居跡の覆土から小片化した弥生土器が出土している。中期初頭頃。



第33図　住居跡SB050実測図

円形土壙

SK051　中門付近で検出。断面がフラスコ状のいわゆる袋状竪穴である。上端径1.85m、下端径2.3m、深さ0.95m。壁面はオーバーハングしているが残りは良い。底面はほぼフラットになっている。底面には柱穴や溝等の施設はない。埋土からパンケース一箱程の土器片が出土した。

SK056　金堂中央付近で検出。金堂の礎石と樹木があるため、全形は不明だが、上面、底面とも平面プランは幾分隅丸方形に近い。上端幅1.95m、底面幅2.0m。深さ1.7m。壁面は上方

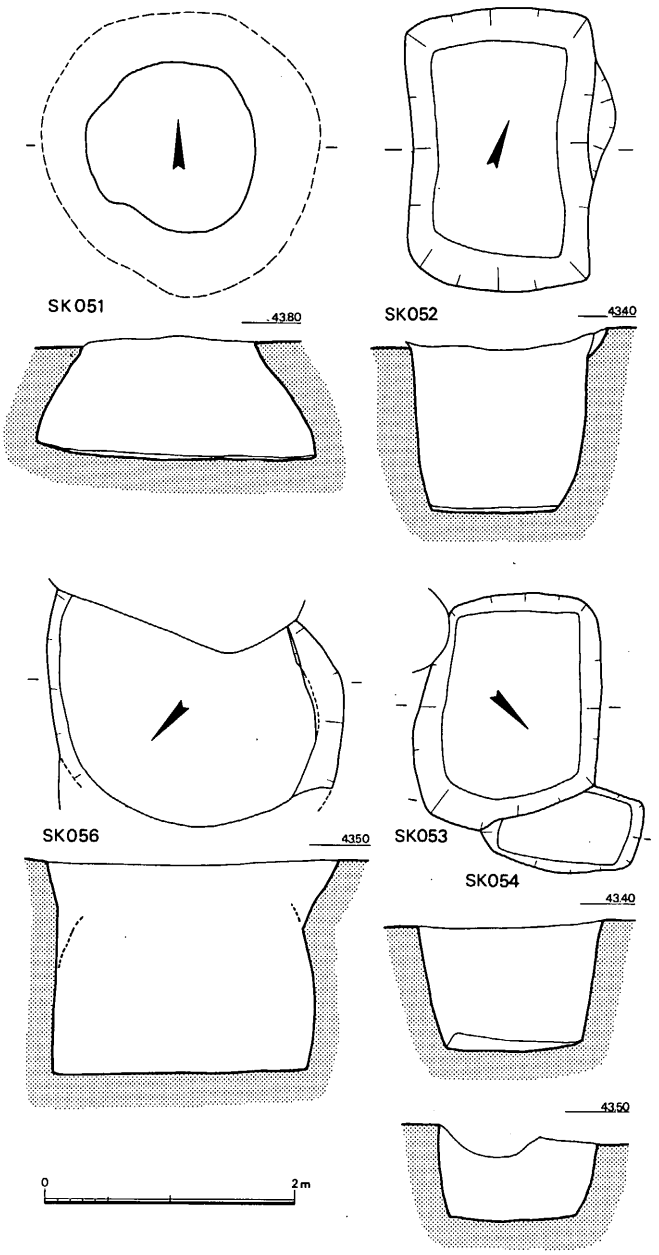
が崩落しているが、多少オーバーハングしている。埋土中からパンケース三箱分の土器が出土した。

長方形土壙

SK052　中門付近で検出した。長軸2.28m、短軸1.4m、深さ1.5mの規模である。当初はプランが全体的に整っているため土壙墓の可能性を考えたが、そうした痕跡は認められず、おなじく貯蔵穴と考えた方がよさそうである。埋土からは少量の土器片と石器が1点出土した。

SK053　SK052の南側で検出した。長軸1.8m、短軸1.45m深さ1.05mの規模である。底面はほぼフラット、壁面は直線的である。後述のSK054の一部を切っている。埋土からごく少量の土器が出土した。

SK054　SK053の北側で重複して検出した。長軸1.1m、短軸0.7m、深さ0.75mの規模の小土壙である。底面はフラットで壁面は内弯している。埋土中より少量の土器片が出土した。



第34図土壙 SK051・052・053・054・056実測図

2．遺物

SK051出土土器（第35図、図版28）

鉢形土器（1）　口縁部は短かく屈曲し、胴部は球形近くふくらんでいる。精良な胎土を用いている。調整は摩滅し不明。復元口径19.6cm

甕形土器（2～5）　板付II式の如意形口縁から派生したタイプで、直下に二条の沈線を巡らす。口径20.9cm。外面にスス付着。底部は薄手のものと厚目のものがある。3は底部が薄目のわりには、不安定にすぼまっている。5はいまだ中期の上げ底には至っていない。いづれも内面底部付近にはヘラ研磨を施している。前期末頃に位置づけできよう。

SK052出土土器（第35図、図版28）

壺形土器（6）　大形の壺底部片がある。内外面に密なヘラ研磨を施す。

甕形土器（7～10）　口縁部は如意形をなし、8・9は直下に一条の凸帯を貼付する。10は口径23.2cm、内外面は火熱を受け赤変する。7は内外面にヘラ研磨を施す古式のもの。

SK053出土土器（第35図、図版28）

甕形土器（11）　大形の部類に入る甕の底部。

SK054出土土器（第35図、図版28）

甕形土器（12・13）　如意形口縁の直下に一条の沈線を巡らす。12の頸部内面には指おさえの痕跡がある。外面にスス付着。

SK056出土土器（第36図、図版28・29）

完掘した土壙のうちで最もまとまって土器が出土している。

壺形土器（14～18）　口縁部の形態から、大きく外反する広口の14・15、比較的短かく外反する17、短かく外反する短頸壺の18に分けることができる。15は端部をさらに肥厚させる。いづれも淡赤褐色に近い発色である。これらに混って有文のものが1片出土している。16は肩部にヘラ描きの羽状文と連弧文を入れる。口径は、14が22.6cm、15が33.0cm、17が20.6cm、18が16.6cmに復元できる。

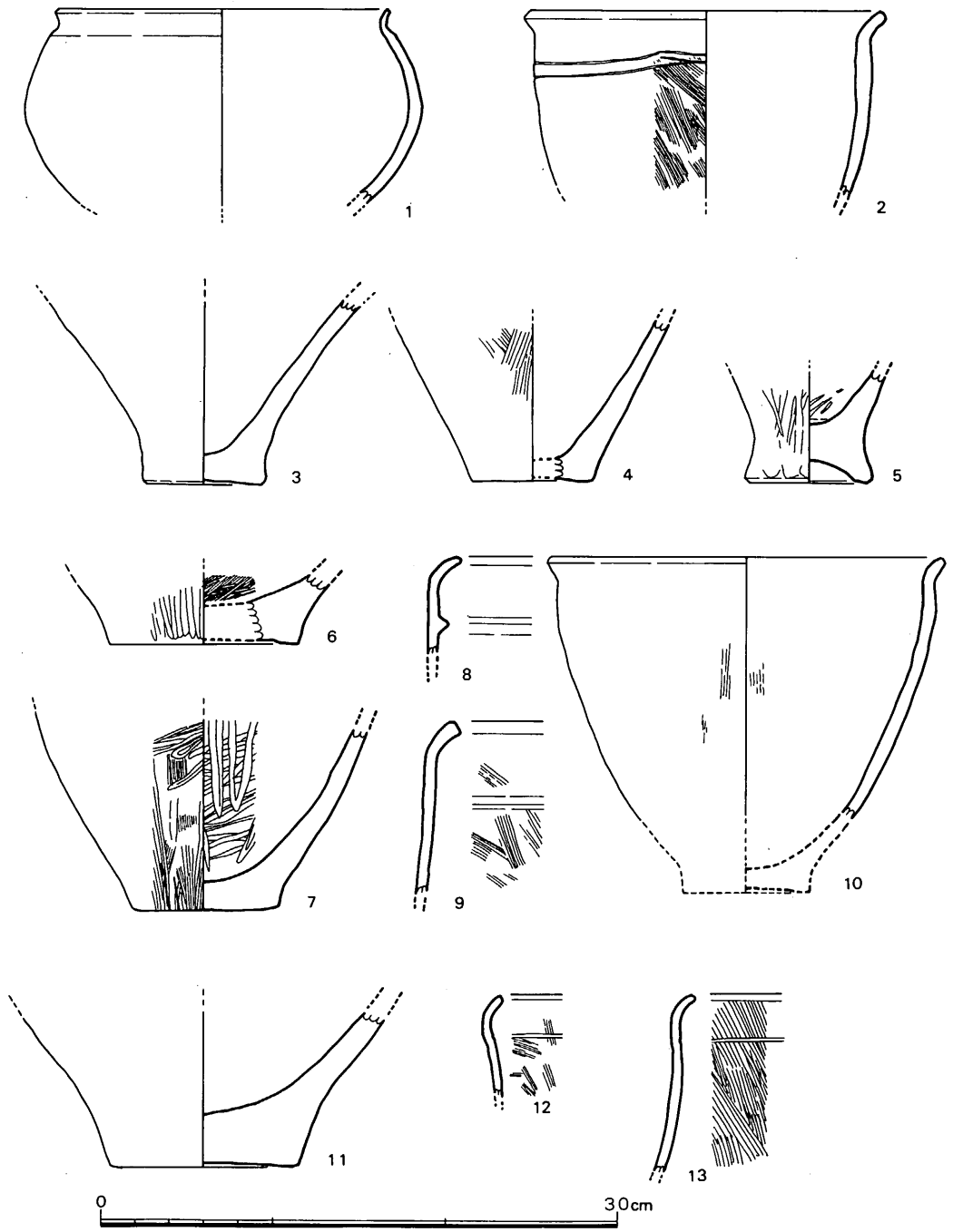
高杯形土器（19）　脚部内面が中空とならず棒状のままの前期後半に多いタイプ。杯部との接合部分には凸帯が省略されている。

甕形土器（22～28）　口縁部が亀ノ甲タイプから発達した20・21と如意形を踏襲した22～25がある。特に如意形系統のものでは、22をのぞいて他はくの字状に屈曲している。23は上端部を跳ね上げ気味につくる。26～28は底部で、すべて厚底のものである。上げ底はそれほど高くない。20は口径22.8cm、25は16.8cmに復元できる。出土土器は中期初頭が主体を占める。

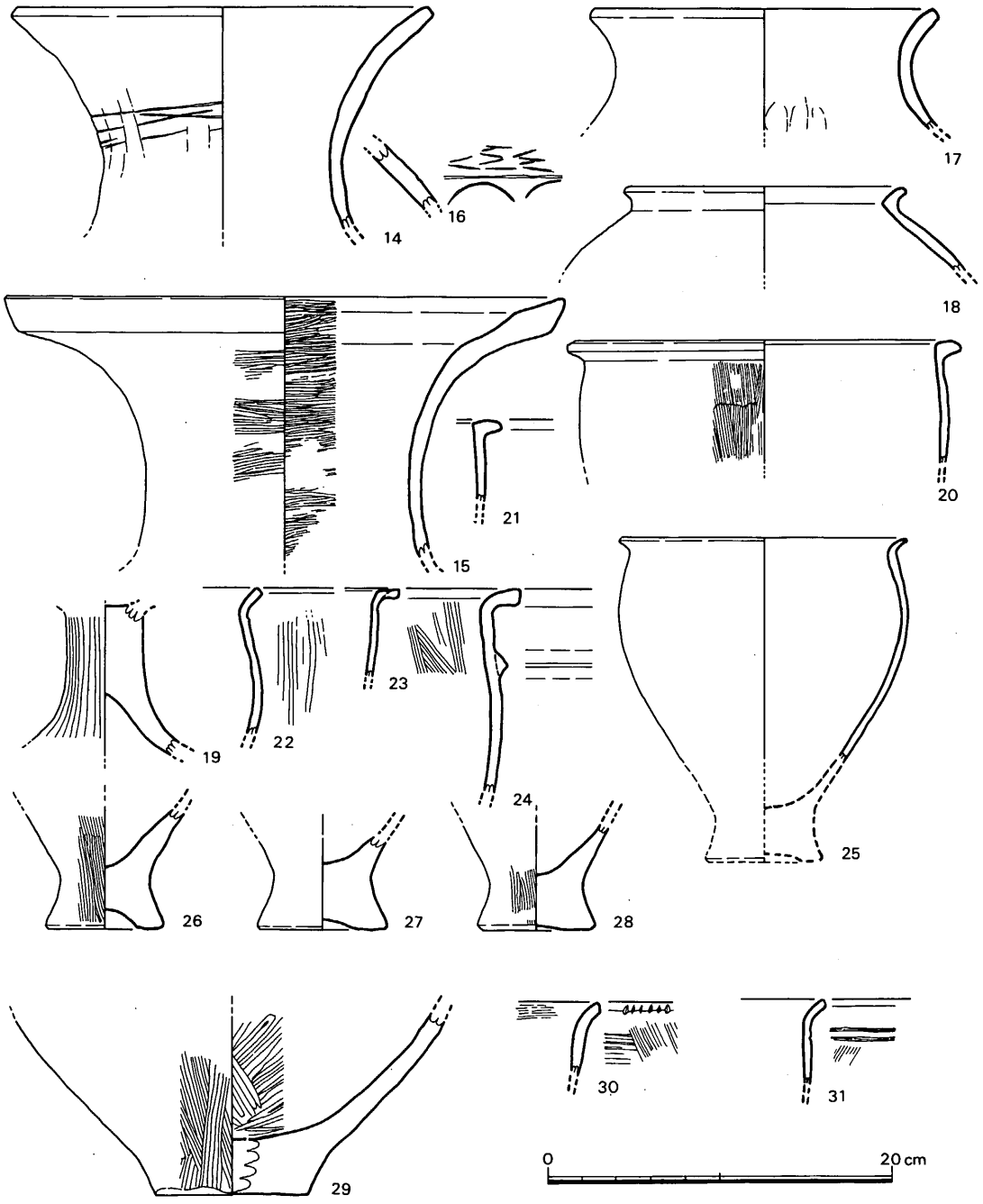
SK057出土土器（第36図、図版29）

甕形土器（29～31）　30・31は如意形口縁で、30は口縁下端に刻目を入れ、31は直下に二条

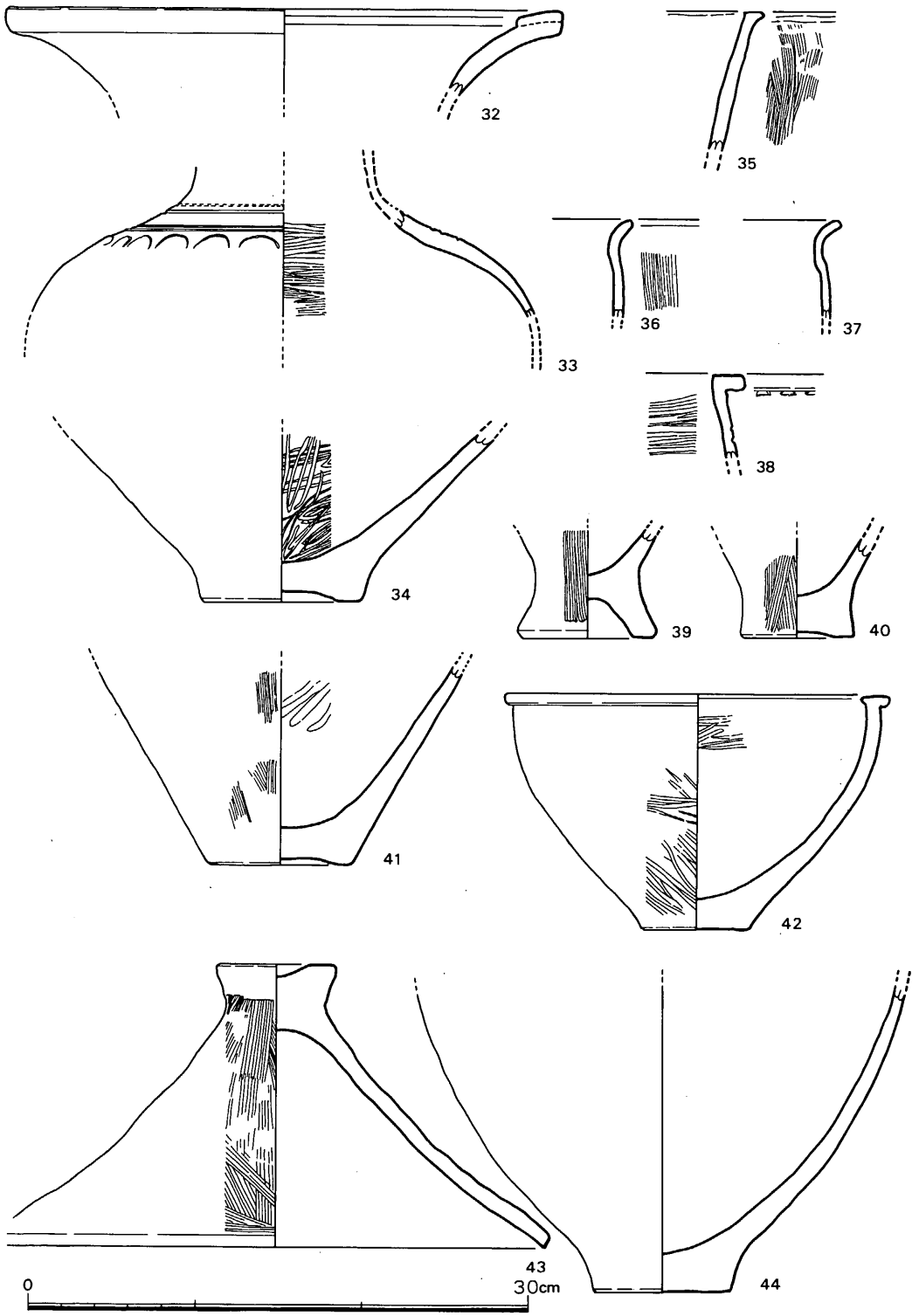
の沈線を巡らす。29は大形甕の底部で、内面にヘラ研磨を施し、また黒色化させる。



第35図　土壙 SK051・052・053・054出土土器実測図



第36図　土壙 SK056・057出土土器実測図



第37図　土壙 SK018・062・067出土土器実測図

SK062出土土器（第37図、図版29・30）

壺形土器（32～34）　32は大きく朝顔形に開く前期末以来のタイプである。口縁部内面に貼付した粘土帯は薄いもので、また内傾している。高槻式の特徴をのこしたものか。口径33.8cm。33は頸部がやや内傾気味に立ち上る点に古式の様相が認められる。内外面ヘラ研磨の後に、頸部にヘラ描きの文様で加飾する。この文様はかなり簡略化され、すでに羽状文は消え、沈線と下弧の連続弧文が組み合わさっているだけである。他の土器とちがって密な胎土を用い、特に雲母の混入が目立っている。34は32と同様の大形壺の底部である。内面のヘラ研磨は粗く、また内面は黒変化している。

甕形土器（35～41）　35は亀の甲タイプの口縁上端を平端になしたもので、胴に張りのない特徴がある。こうした形態は周辺ではみられないタイプである。また、突出する粘土帯の出は一定でなく稚拙な印象を受ける。色調も通有の甕にくらべて暗い発色である。同様に粘土帯を貼付して平担口縁としたものに38がある。中期の逆「く」字形に近いが、技法の特徴として外口縁部の付根にはヘラ状工具で接合部を押し近んだ痕がみられる点があげられる。内面にヘラ研磨を施す点は古式の様相を持つ。これらとは別系統で、如意形口縁をさらに屈曲させたのが36・37である。36は口縁の肥厚化が進む。37の頸部は、強いヨコナデを施した後、歴史時代の甕の様に幅広くくぼんでいる。底部は39～41がある。39は外底部が大きくくぼみ、40は上底気味である。41は内面にヘラミガキを施す。

鉢形土器（42）　口縁部は3と同様に粘土帯を貼付して平担口縁をつくる。内側への突出や、底部がうすく平底をなすなど須玖式に近いが、技法は内外面ヘラミガキと古式の様相をのこす。復元口径17.4cm、器高10.8cm。

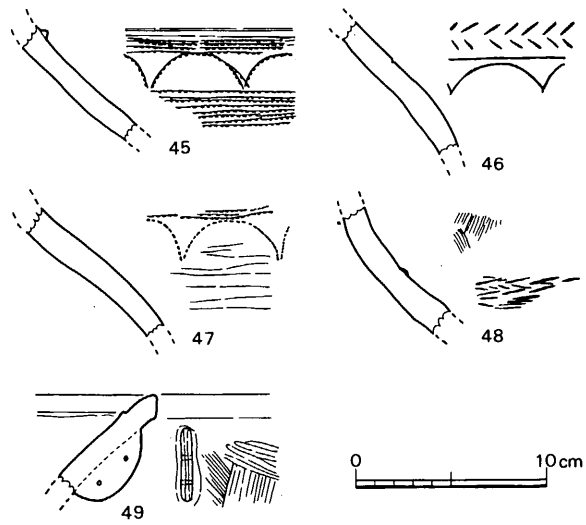
SK018出土土器（第37図、図版30）

SK018は講堂の南で検出した8世紀後半代の土壙である。この埋土から弥生土器が1点出土している。

蓋形土器（43）　中期初頭に通有の上底の甕底部をさかさまにしたような形態で、つまみ上部は浅くくぼむ。口径25.2cm、器高12.9cm。

SK067出土土器（第37図、図版30）

甕形土器（44）　摩滅の為調整が不明だが、胴部下半の丸味を失わないプロポーションから甕形土器とした。胎土は粗く、灰色を呈す。



第38図　層位出土土器実測図

その他の層位出土土器（第38図、図版30）

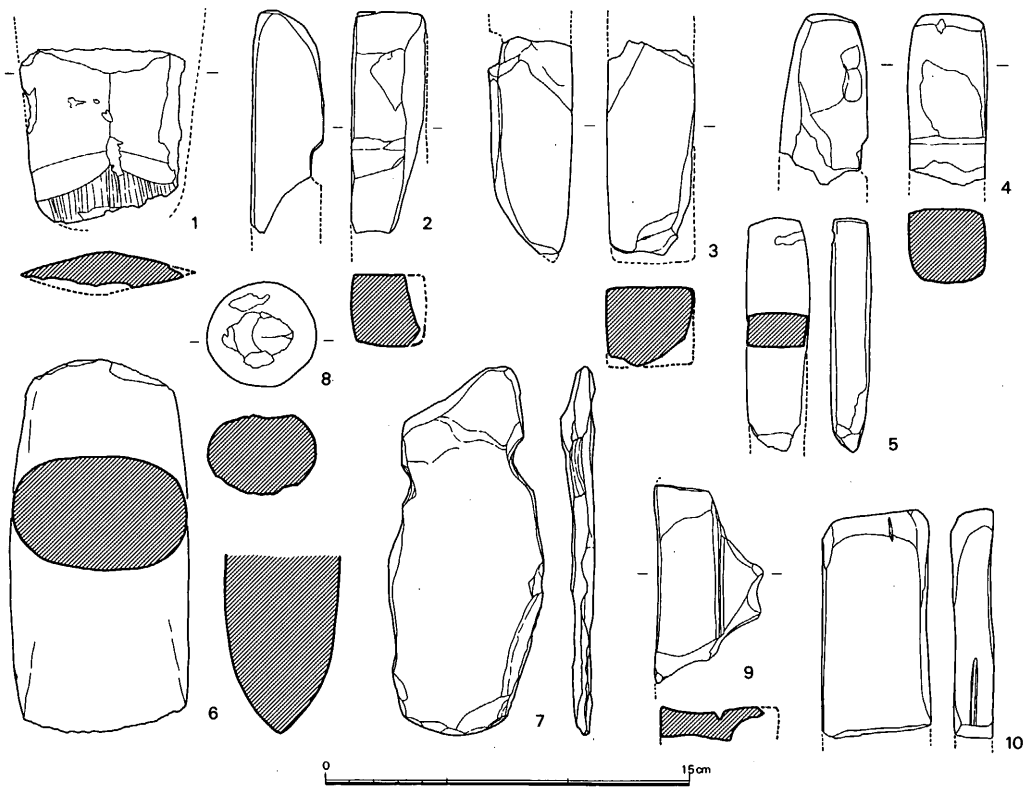
ここでは表土や各層位から出土した弥生土器の破片のうち、有文と耳つきの壺蓋について説明を加える。

壺形土器（1～5・a）1～4・aはいずれも肩部に文様を施すもので、その施文には二枚貝腹縁を用いたものとヘラ描きのものがある。羽状文は無軸でその施文も雑である。5は朝顔形に開く壺の口縁下に紐孔を設けた耳をつける。取り付け位置からみると、垂飾の為であろうか。また、口縁内面には強いよこなでによる接合部のはみだし粘土が凸帯状にのこる。口縁部外面の一部には丹が残存する。

石器　（第39図、図版31）

磨製石剣（1）　鉄剣型石剣の基部付近が残存する。現存長7.2cm、基部幅1.5cm。中央に鏨を通し、身の断面は通常より幅広い扁稜形をなす。基部は角をおとし、さらに刃潰しの前に粗く研摩する。淡灰色粘板岩製。

磨製石斧（2～6）2～4は抉入柱状片刃石斧。いずれも抉りの部分で折損する。断面をみるかぎりすでに方形ではなく丸みをもった形状で、前期末頃の特徴をもつ。特に4の背は強く



第39図　出土石器・砥石実測図

丸味を帯びている。２は現存長9.2cm、最大幅3.0cm、厚さ3.0cm。３は現存長8.9cm、最大幅3.6cm、厚さ3.2cm。４は現存長7.0cm、最大幅3.3cm、厚さ3.1cm。石材は２が暗灰色凝灰岩質粘板岩、３・４は淡灰色粘板岩。５は扁平片刃石斧。刃の一部を欠損する。長さ9.7cm、幅6.6cm、厚さ1.5cm。胴の中央から刃部にかけて細くなり、刃角はにぶい。青灰色粘板岩製。６は太形蛤刃石斧。ほぼ完形で、刃は使用によって摩滅している。横断面は楕円形。長さ15.5cm、最大幅7.3cm、厚さ4.8cm。今山産のものにくらべると長さが足りないようである。石材は暗灰色の花崗岩質のもの。

打製石斧（７）　扁平な淡緑色片岩を用い、一方の端部近くに両側から抉りがつけられている。他方を刃部と見たてて打製石斧としたが、何か別途の未製品の可能性も考えられる。長さ15.3cm、幅6.8cm、厚さ1.4cm。

投弾（８）　石英脈岩を球状に整え、さらに相対する位置に浅い敲打を加えている。径4.5cm。重さ95ｇ。

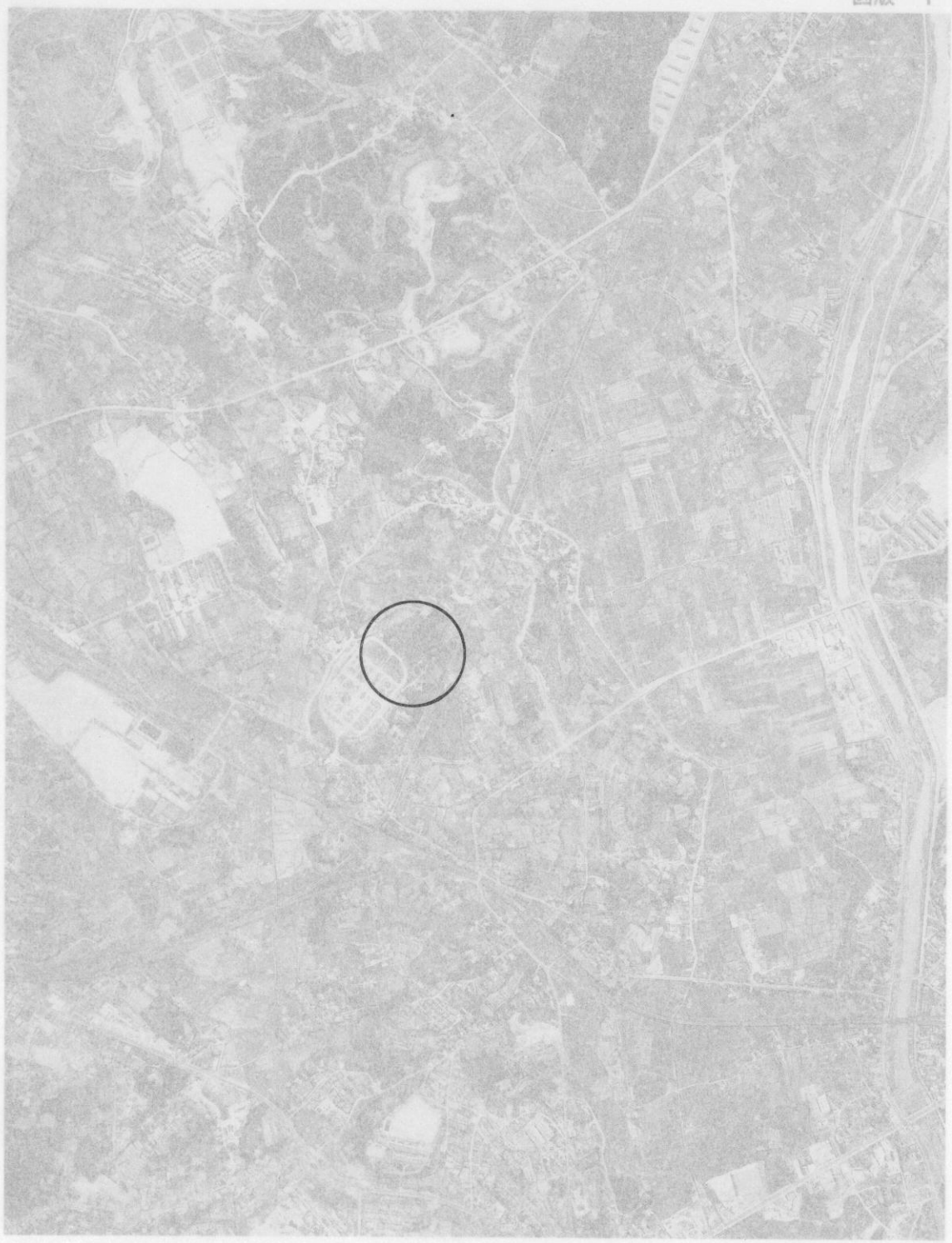
砥石（９・10・ａ）　９は表裏ともよく使われた粘板岩製の仕上砥で、著しく凹んでいる。表面には断面Ｖ字の擦り切り痕（幅・深さ3.5mm）が一条走る。10は法量からすると手持砥のようでもあるが、目は比較的粗い。おそらく欠損した置砥を利用したものか。四面とも平滑で、幅の狭い側面に幅2.5cmの溝状の擦痕が観察できる。灰黄色砂岩製。ａは粗砥で灰黄色砂岩製。置砥として使われたものか。

３．小結

今回の調査で検出した遺構は、主に貯蔵穴群である。それらは前期末から中期初頭にかけて存続、廃棄されたものである。この貯蔵穴の分布は調査区内の南東に集中する傾向にある。ここからさらに南は彦山川に面した丘陵斜面にあたる。貯蔵穴群がさらにこうした斜面を利用して営なまれていただろうことは充分予想できるところである。また、住居址も貯蔵穴群と同時期に営なまれていたものであるが、貯蔵穴群よりやや距離を置いて位置する。集落内の居住地区と貯蔵施設との境界がこの空閑地にあると考えられないこともないが、これ以上は今後の周辺調査をまって検討しなければならない。

出土土器は、前期のいわゆる下伊田式から中期初頭の城ノ越式までを含み、狭い意味での遠賀川系統のみならず、他の地域の影響を受けたものもみられる。現在、下伊田式の様式となっている下伊田遺跡が調査され、その整理が進行中である。この天台寺跡を含めて彦山川流域における弥生時代の集落展開、土器様相の把握については今後の課題である。

図　　版

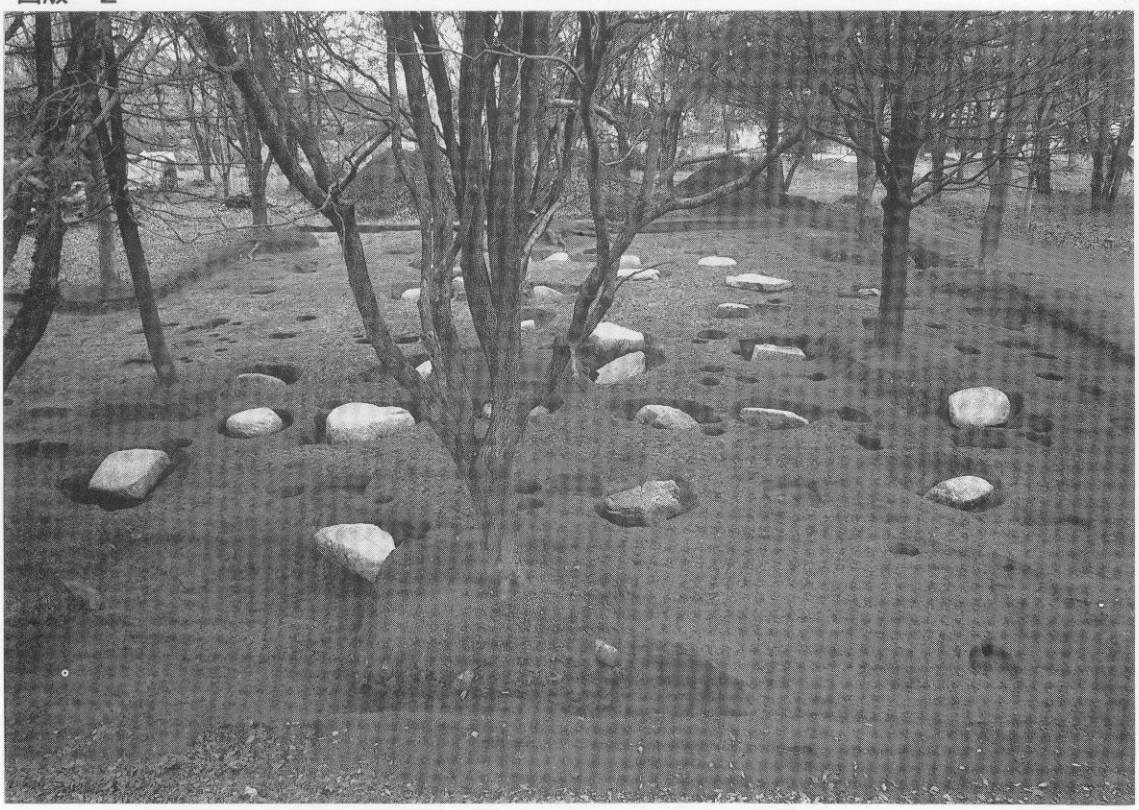


天台寺跡周辺航空写真

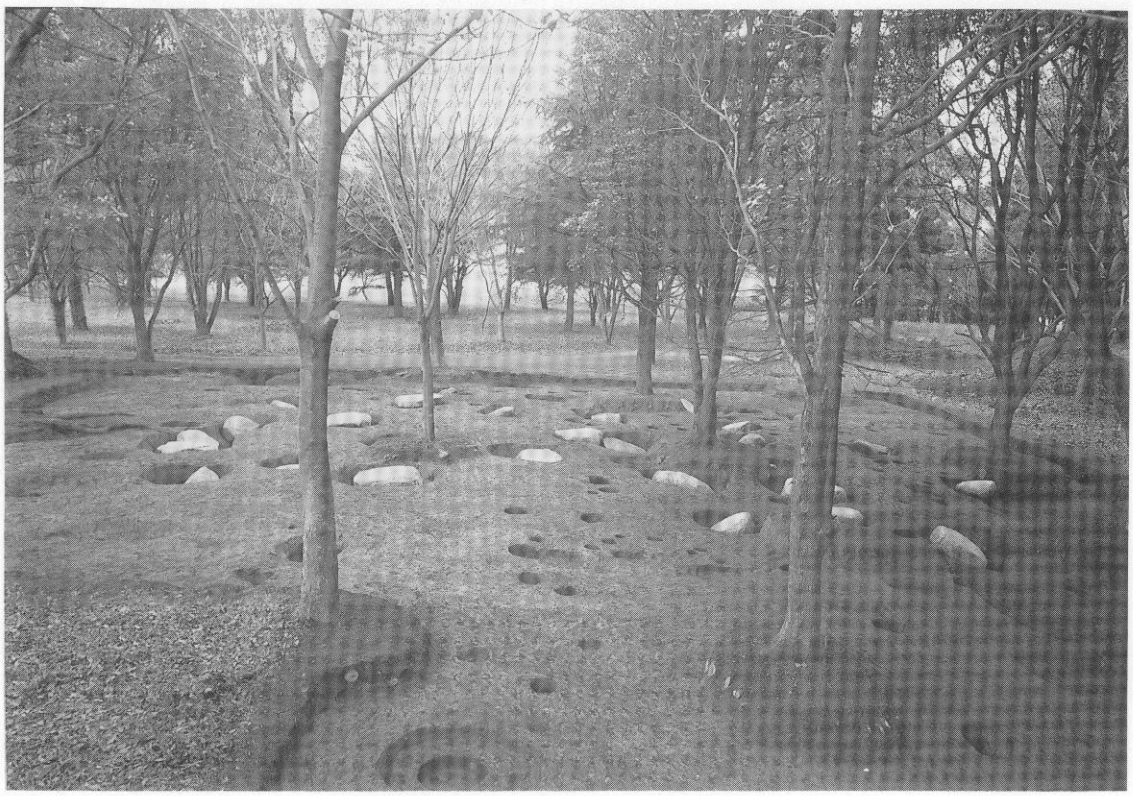


天台寺跡周辺航空写真

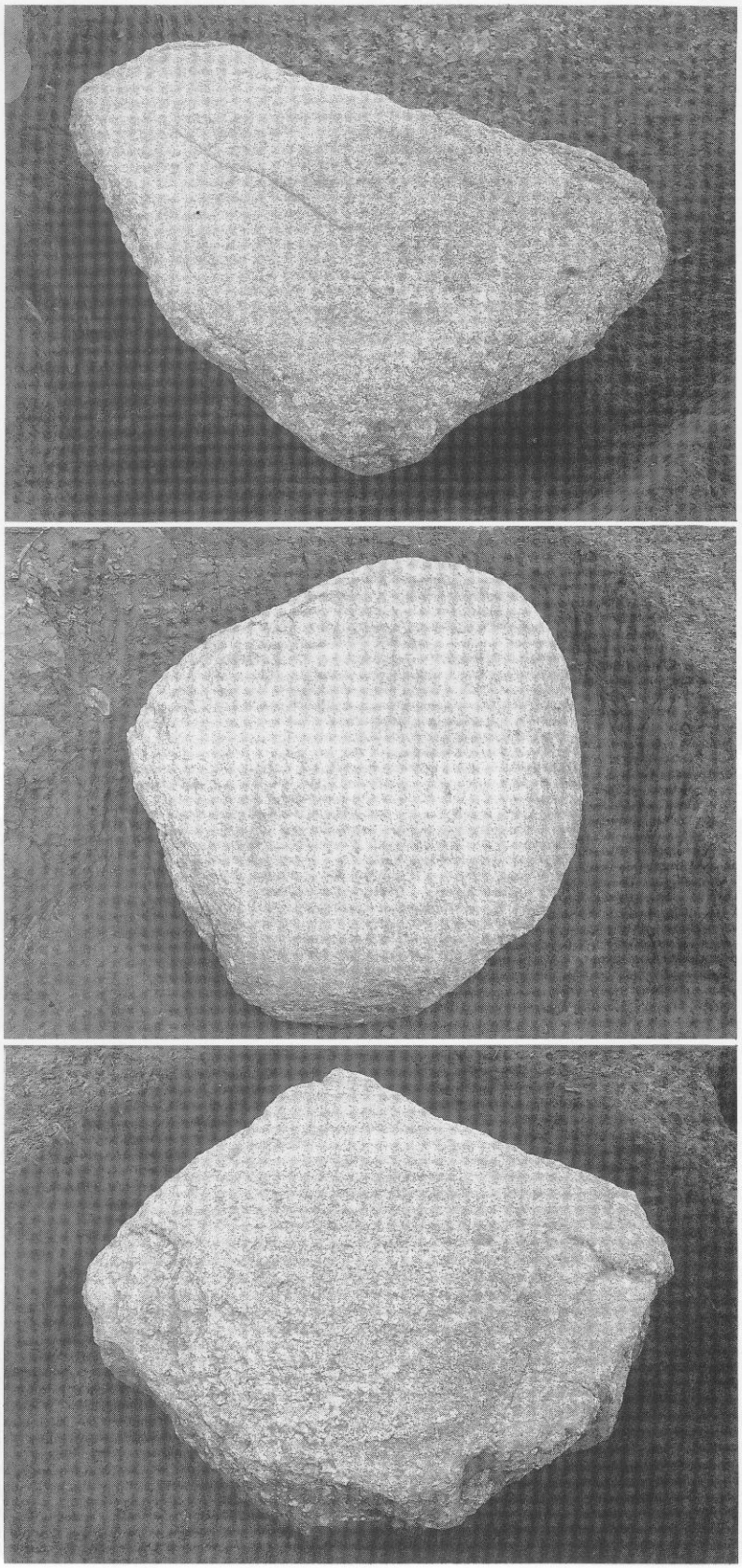
図版　2



金堂跡 SB001 調査区全景(東から)



金堂跡 SB001調査区全景(南から)

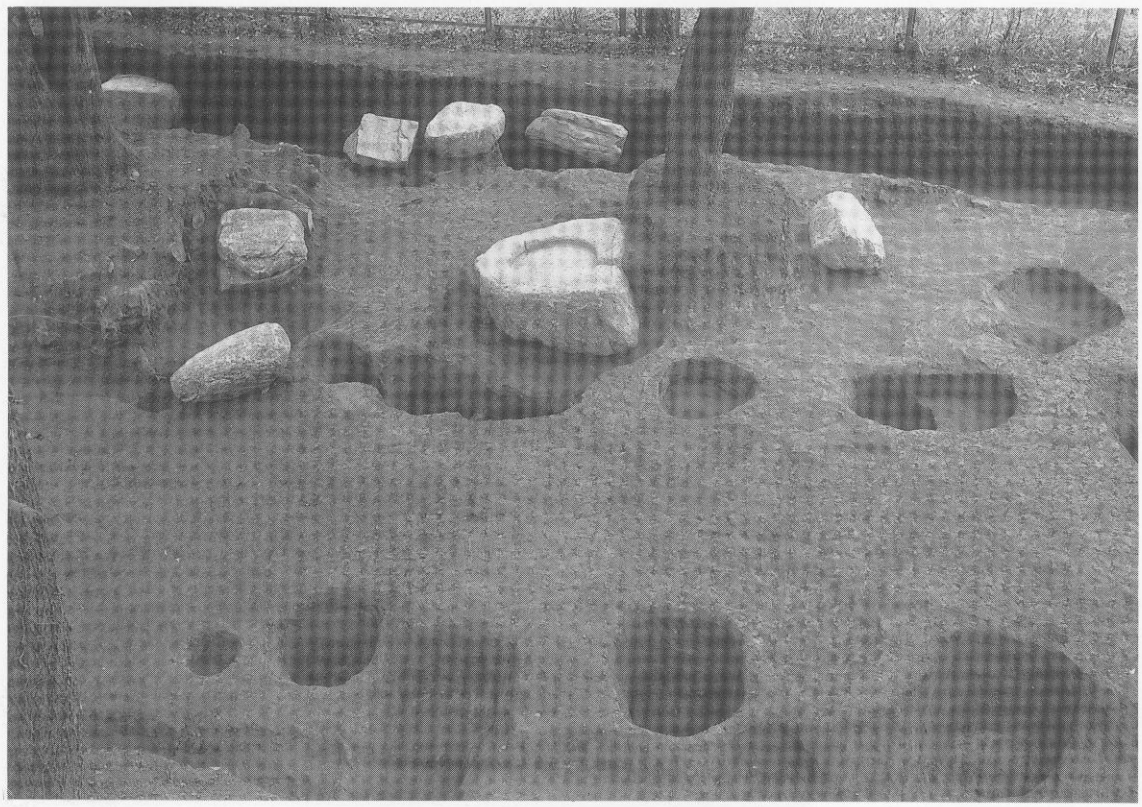


金堂跡 SB001
礎石

図版　4



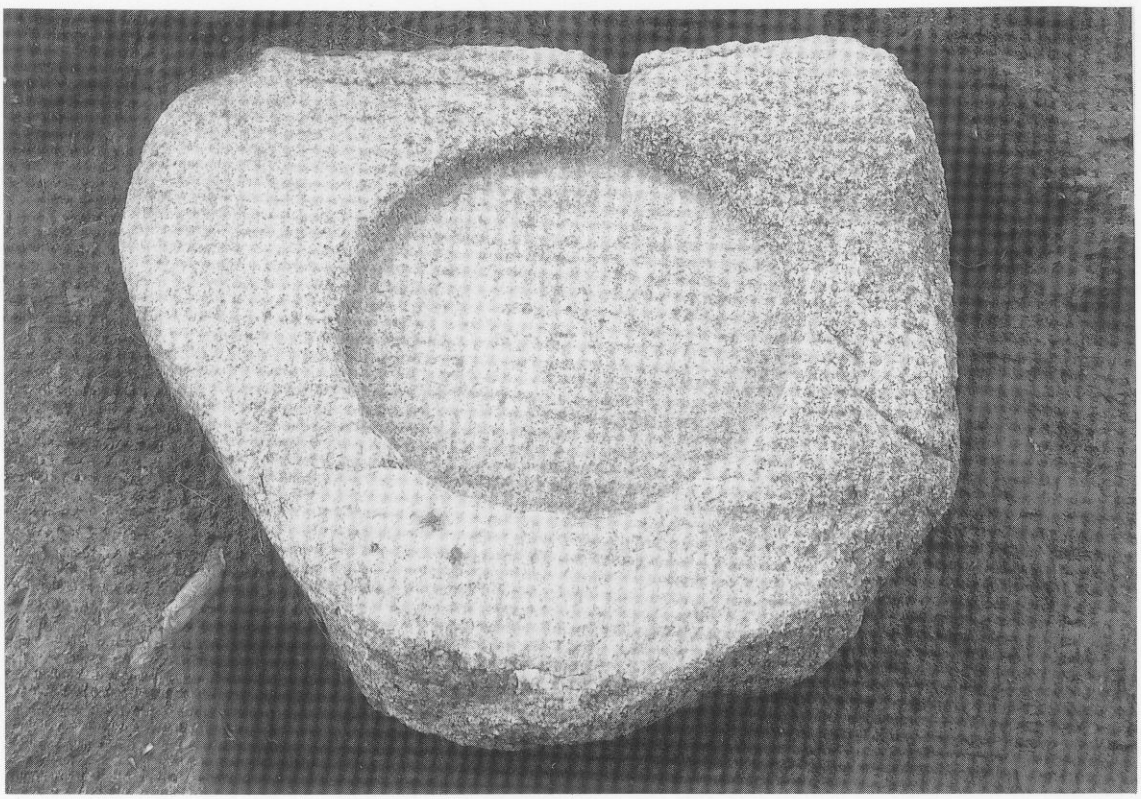
塔跡 SB010 調査区全景(南から)



塔跡 SB010 調査区全景(西から)

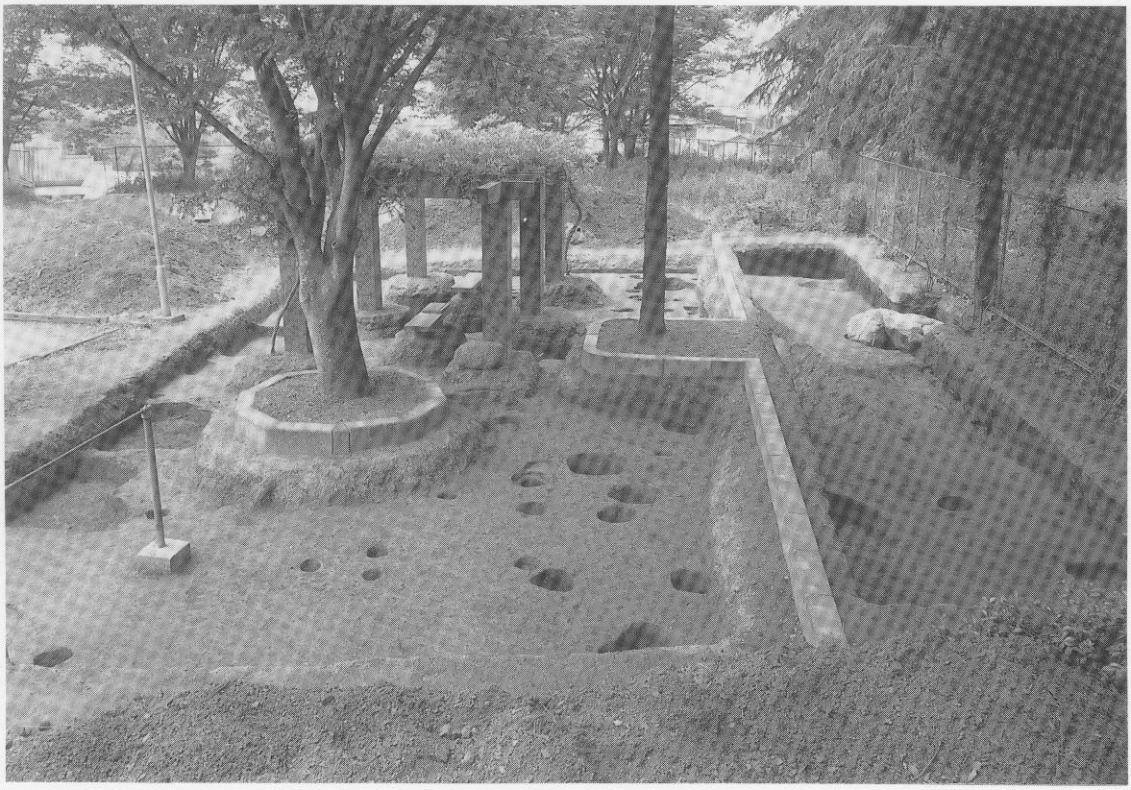


塔心礎

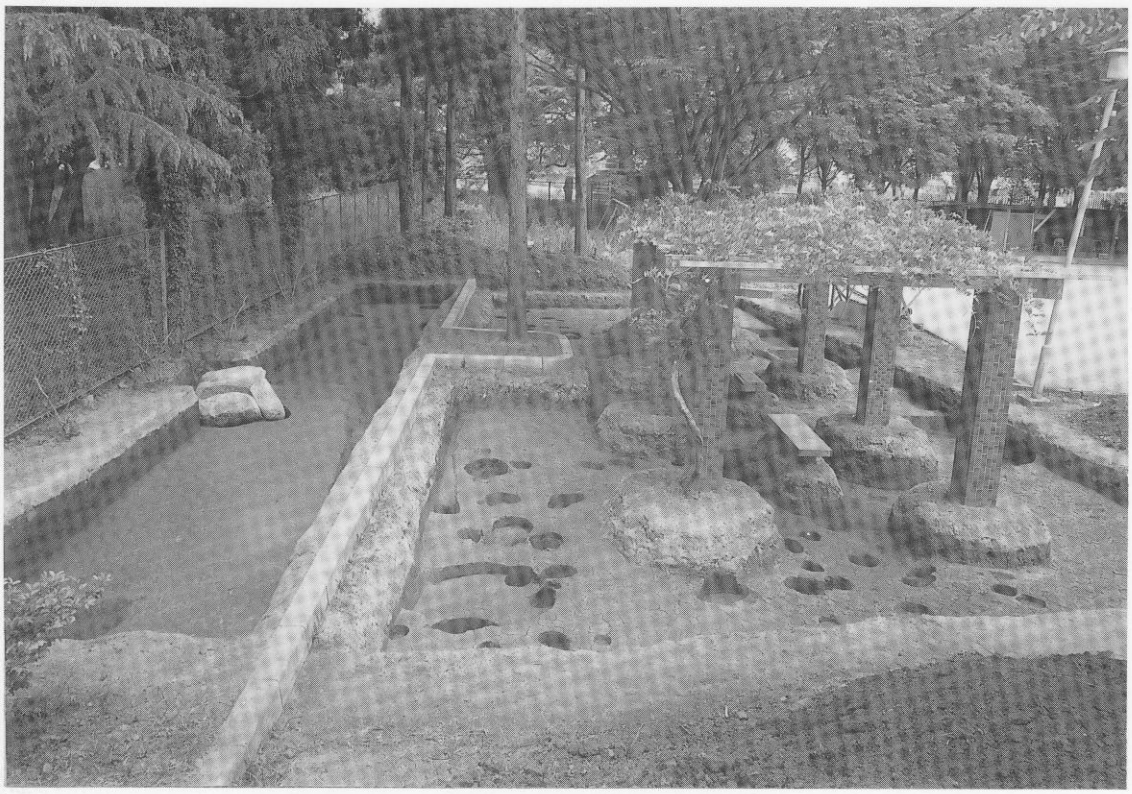


塔心礎

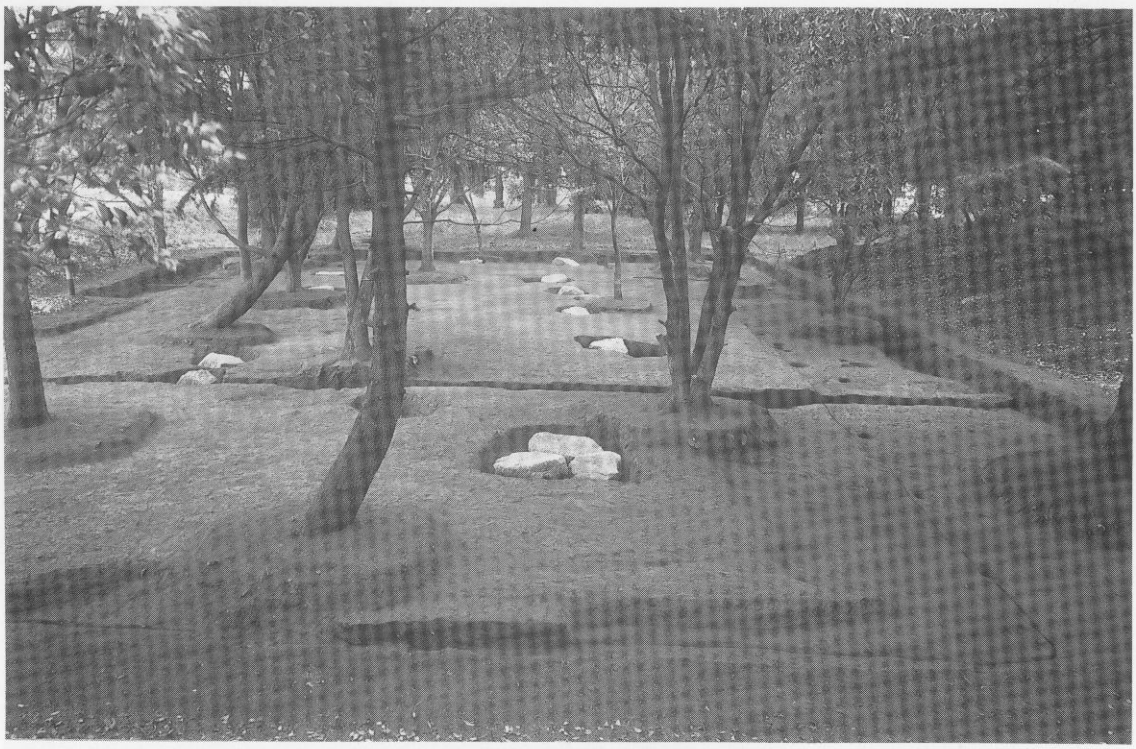
図版　6



塔跡東側地域(北から)



塔跡東側地域(南から)

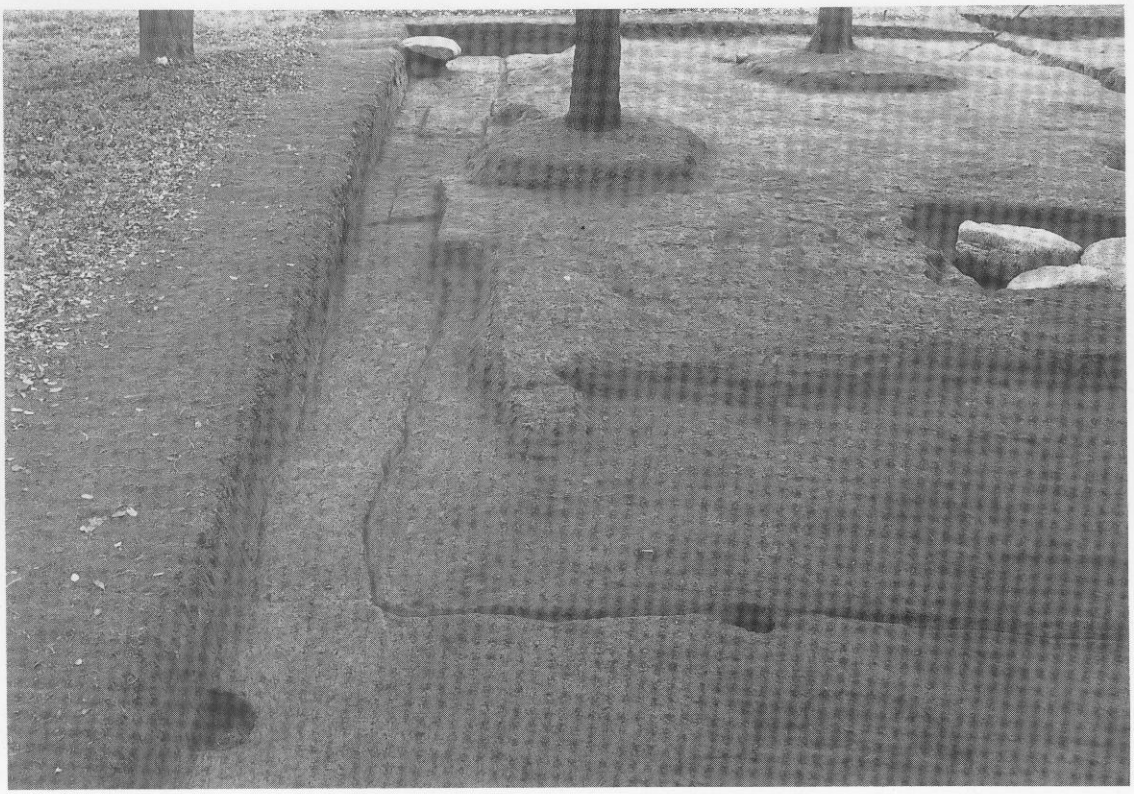


講堂跡 SB005 調査区全景(西から)



講堂跡 SB005
南半部(西から)

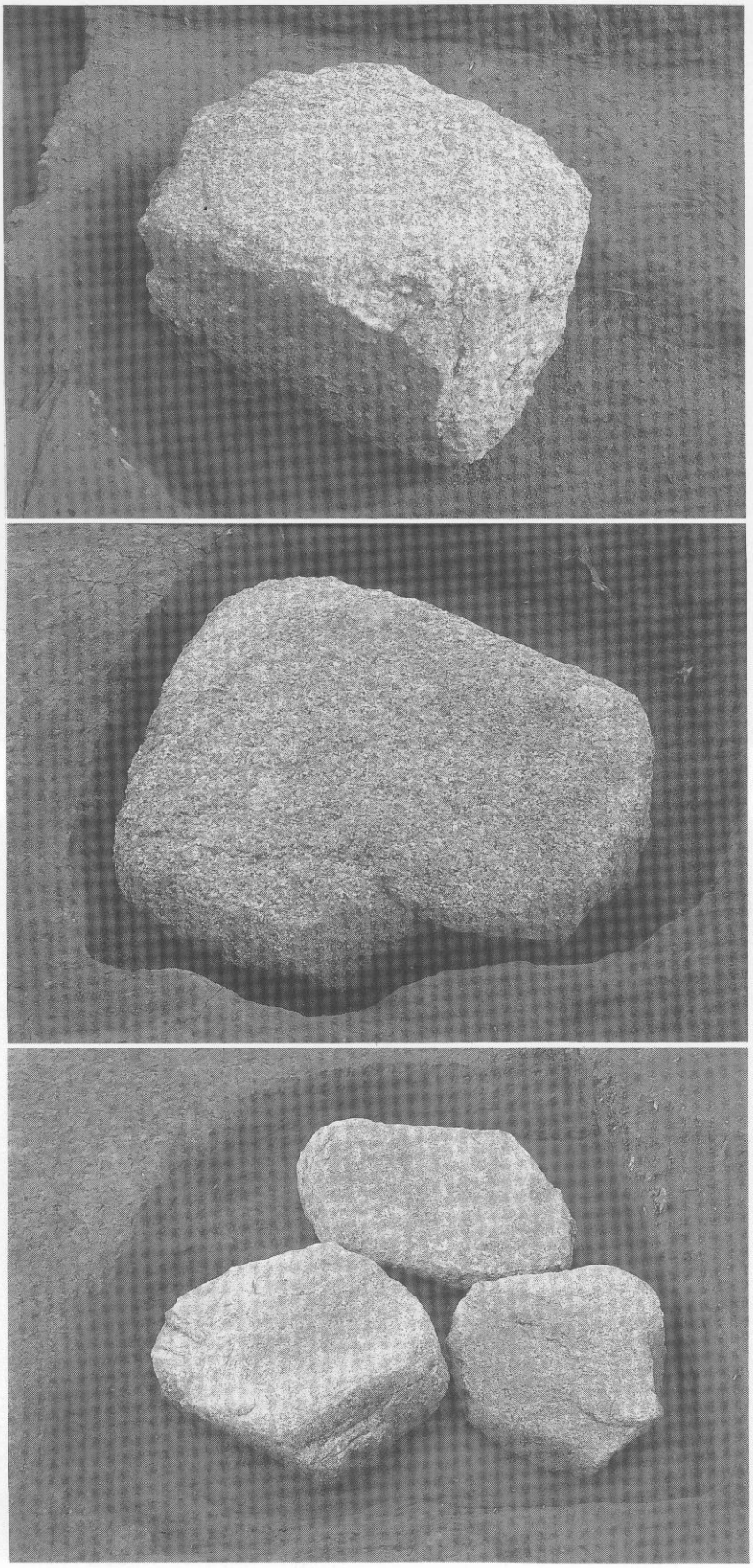
図版　8



講堂跡 SB005 西半部(南から)



講堂跡 SB005
北半部(西から)



講堂跡 SB005
礎石



南面回廊跡 SC002 付近(北から)



南面回廊跡・東南隅 SC002 (西から)

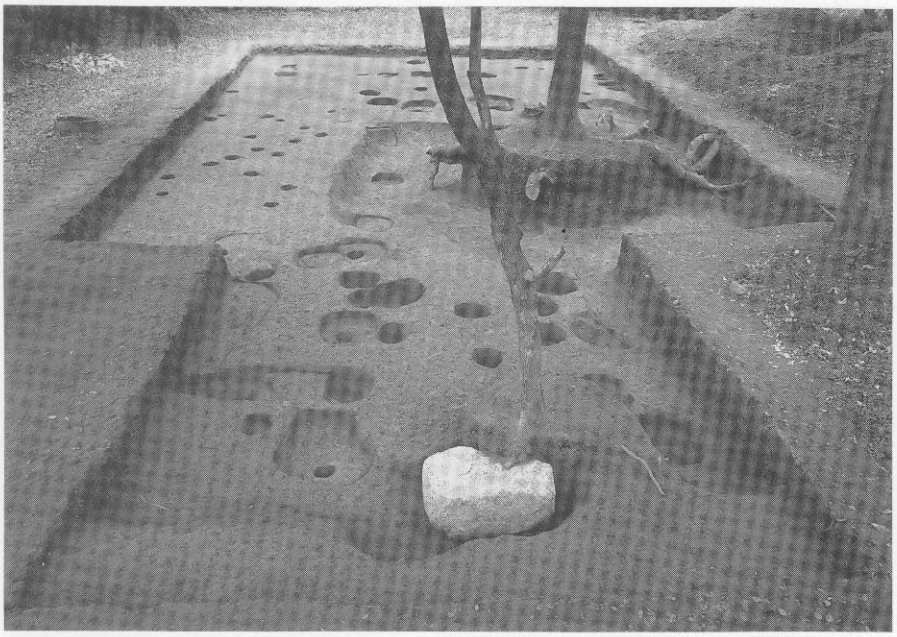


東面回廊跡 SC003（北から）

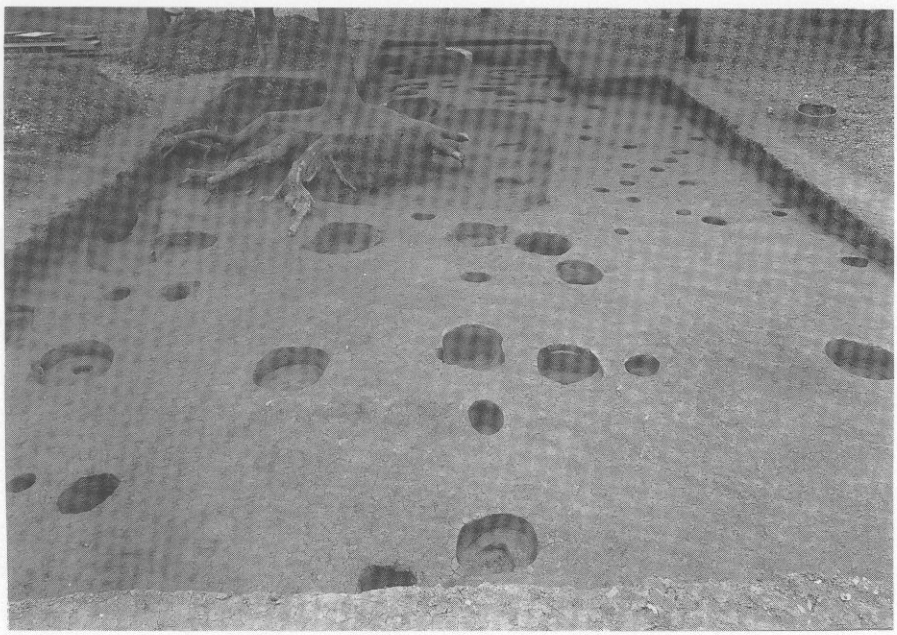


東面回廊跡SC003，塔跡 SB010（南西から）

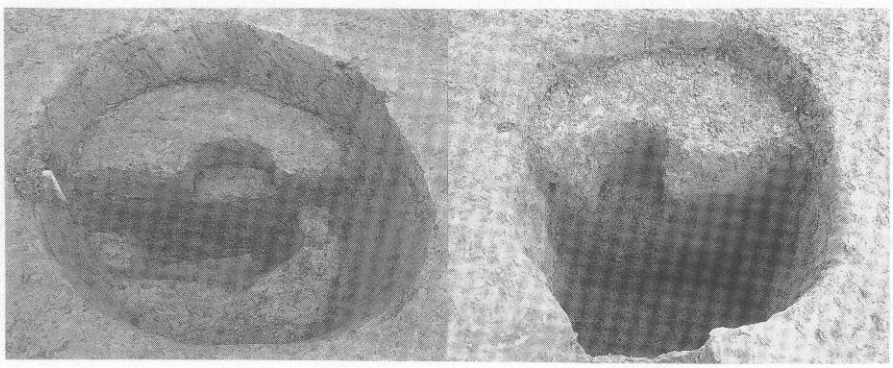
図版　12



北面回廊跡・
東北隅SC004
（西から）



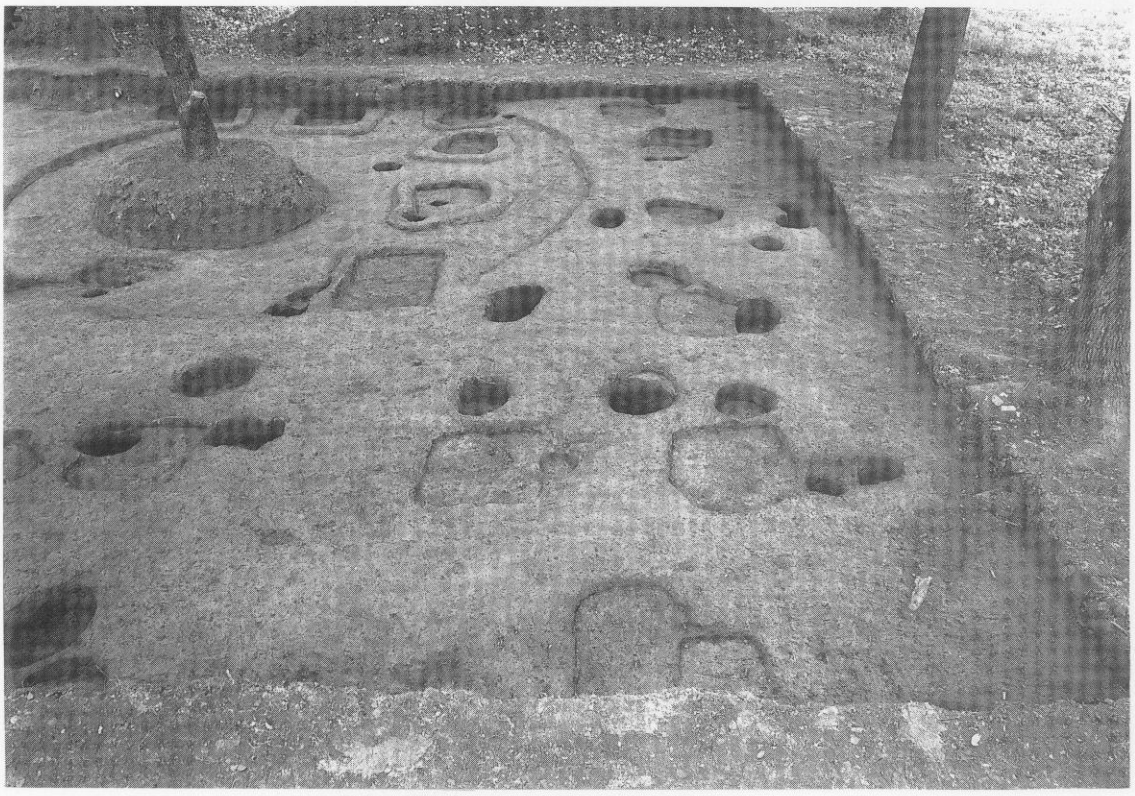
北面回廊跡・
東北隅 SC004
（東から）



北面回廊跡
SC004 掘立
柱穴



北面回廊跡・西北隅 SC004（東から）



北面回廊跡・西北隅 SC004（北から）



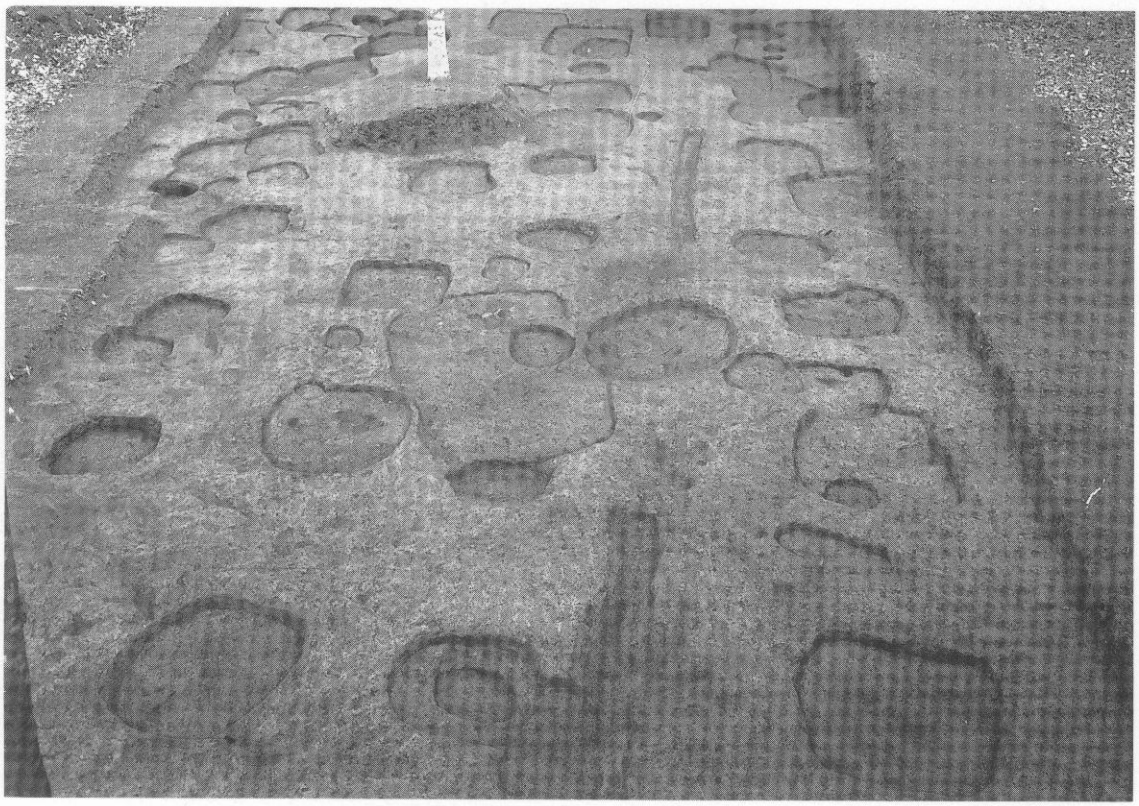
西面回廊跡 SC006（南から）



西面回廊跡 SC006、掘立柱建物 SB015・020（東から）



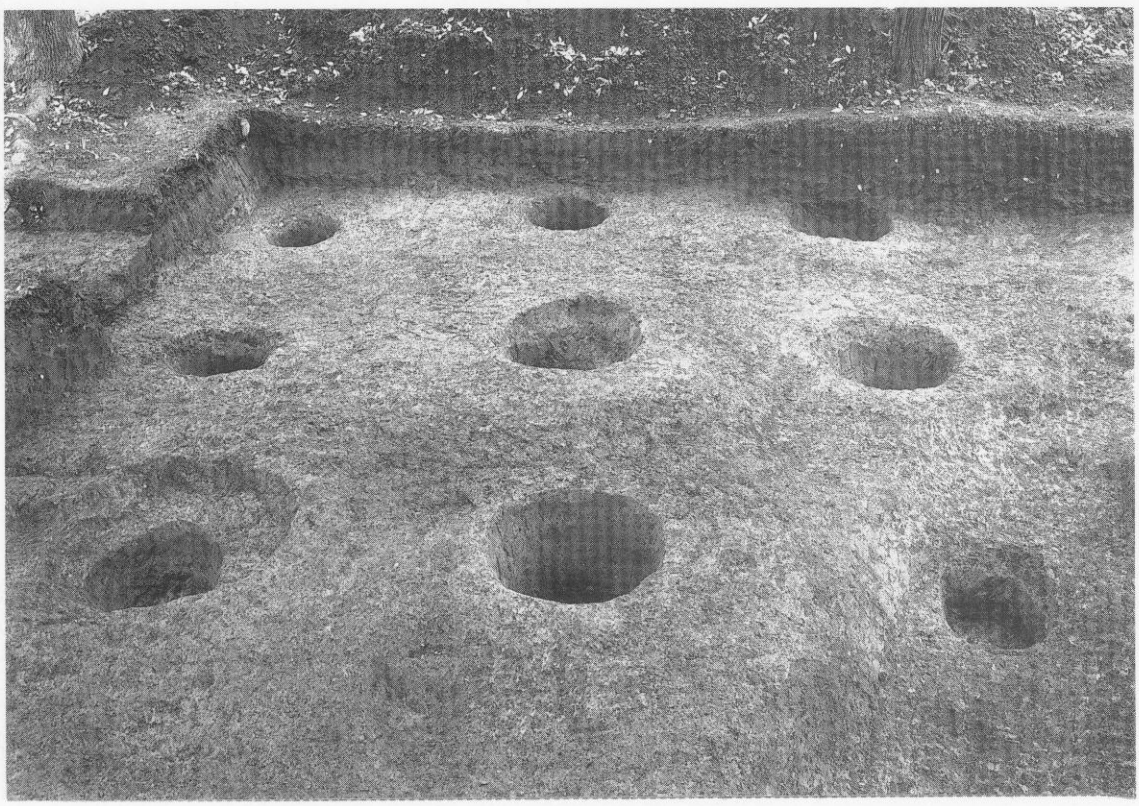
掘立柱建物 SB015
全景（南から）



掘立柱建物 SB015 近景（南から）



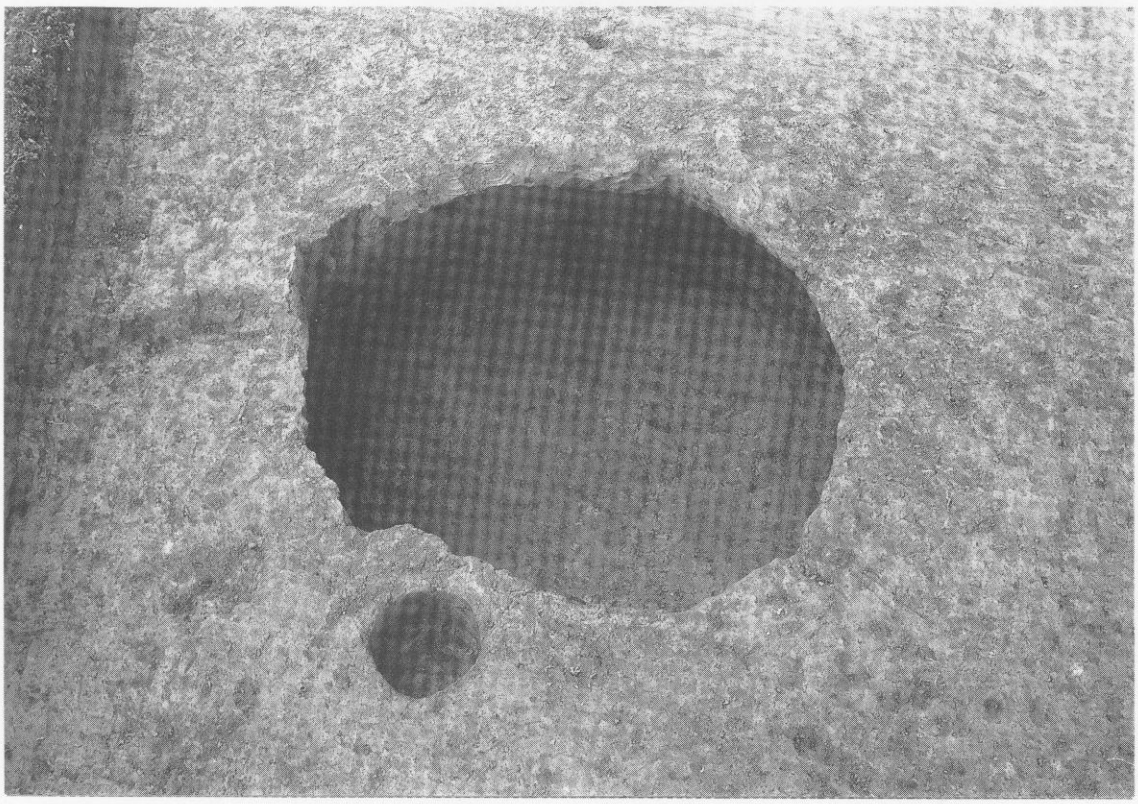
掘立柱建物 SB025（西から）



掘立柱建物 SB 030（東から）

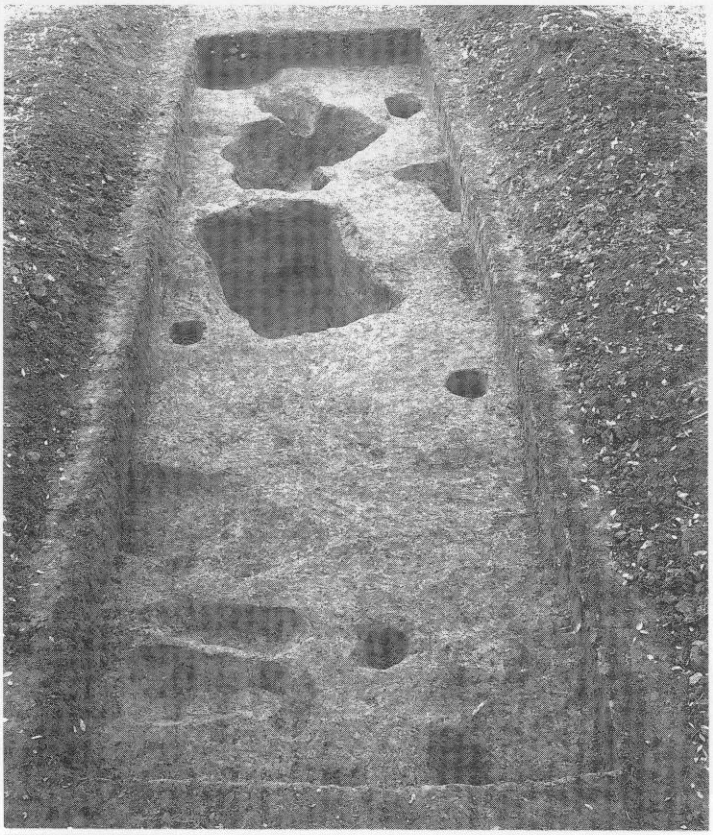


竪穴住居跡 SB050（西から）



土壙 SK051（南から）

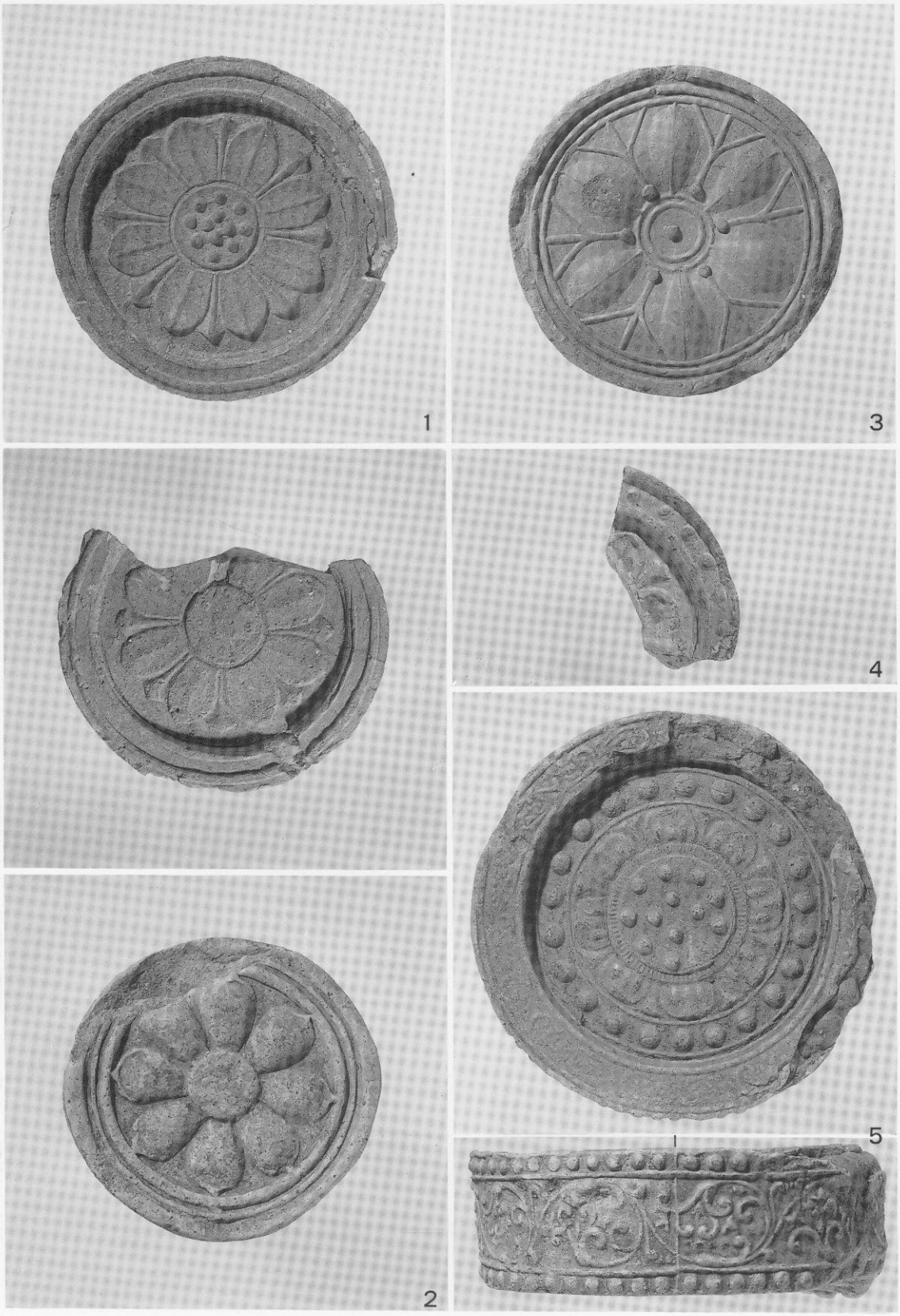
図版　18



土壙
SK052・053
054
（北から）

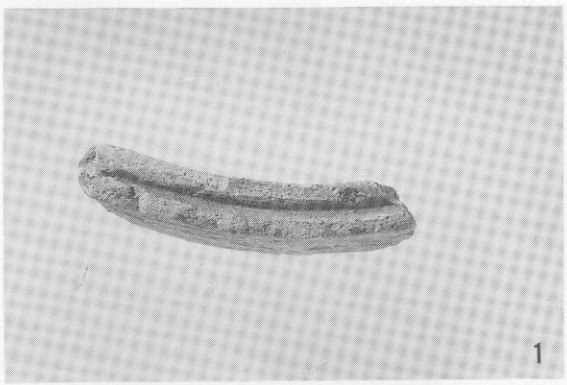


同上近影
（南から）

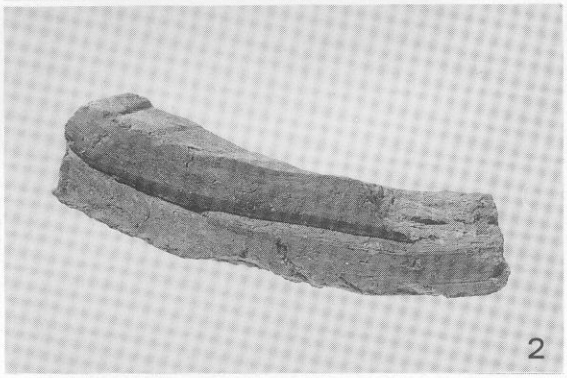


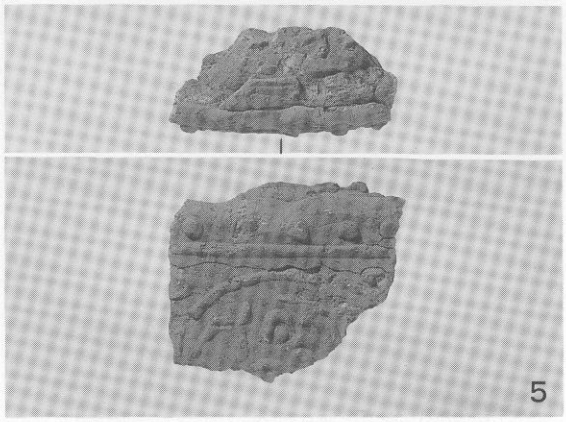
出土軒丸瓦

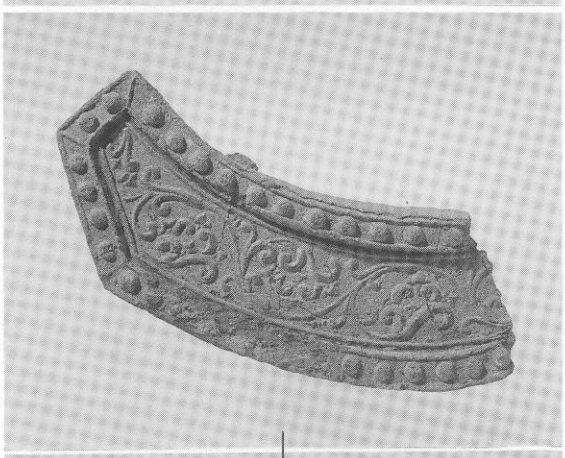
図版　20

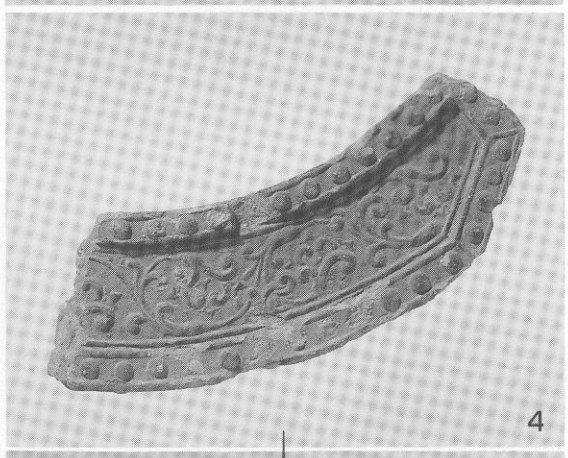








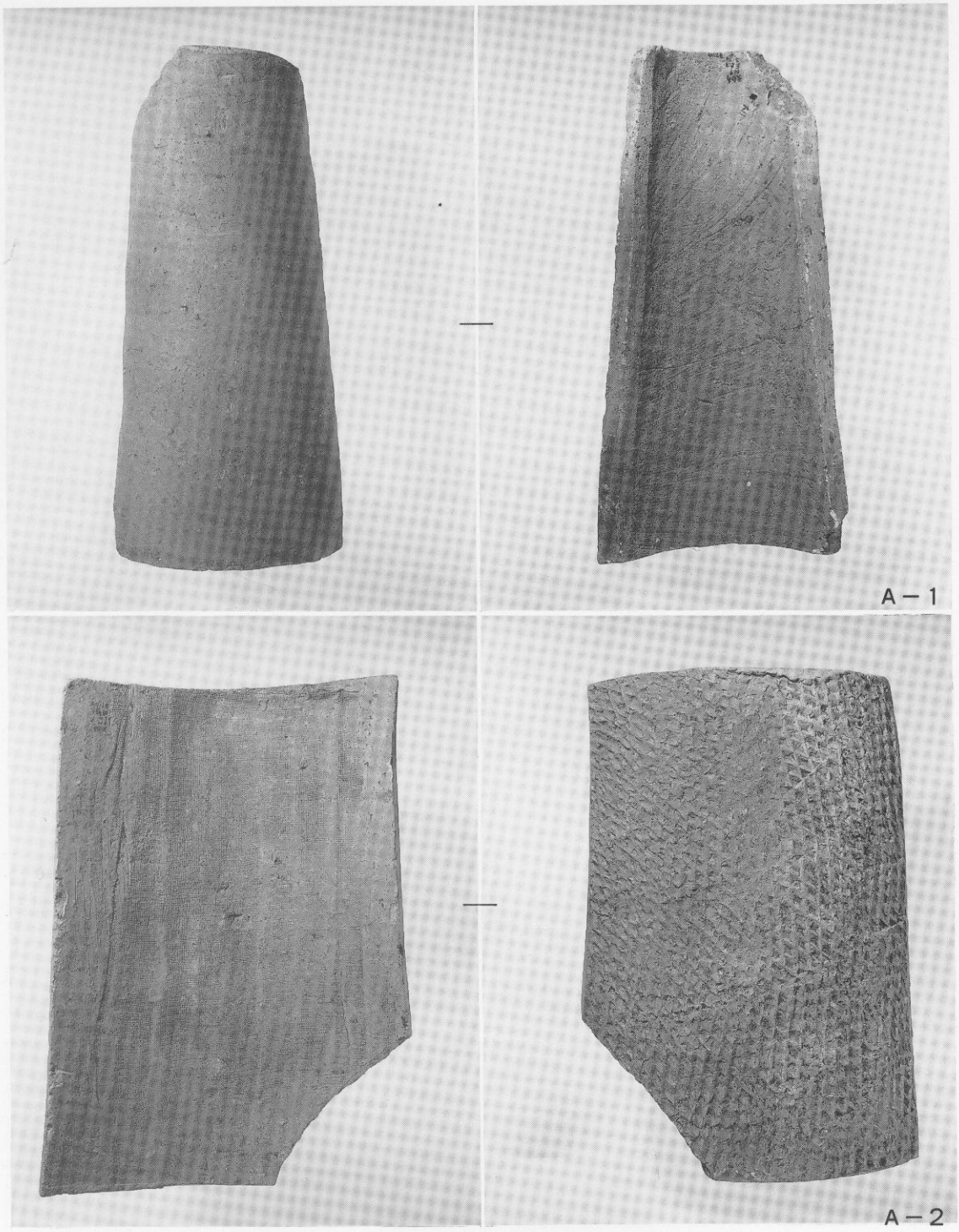






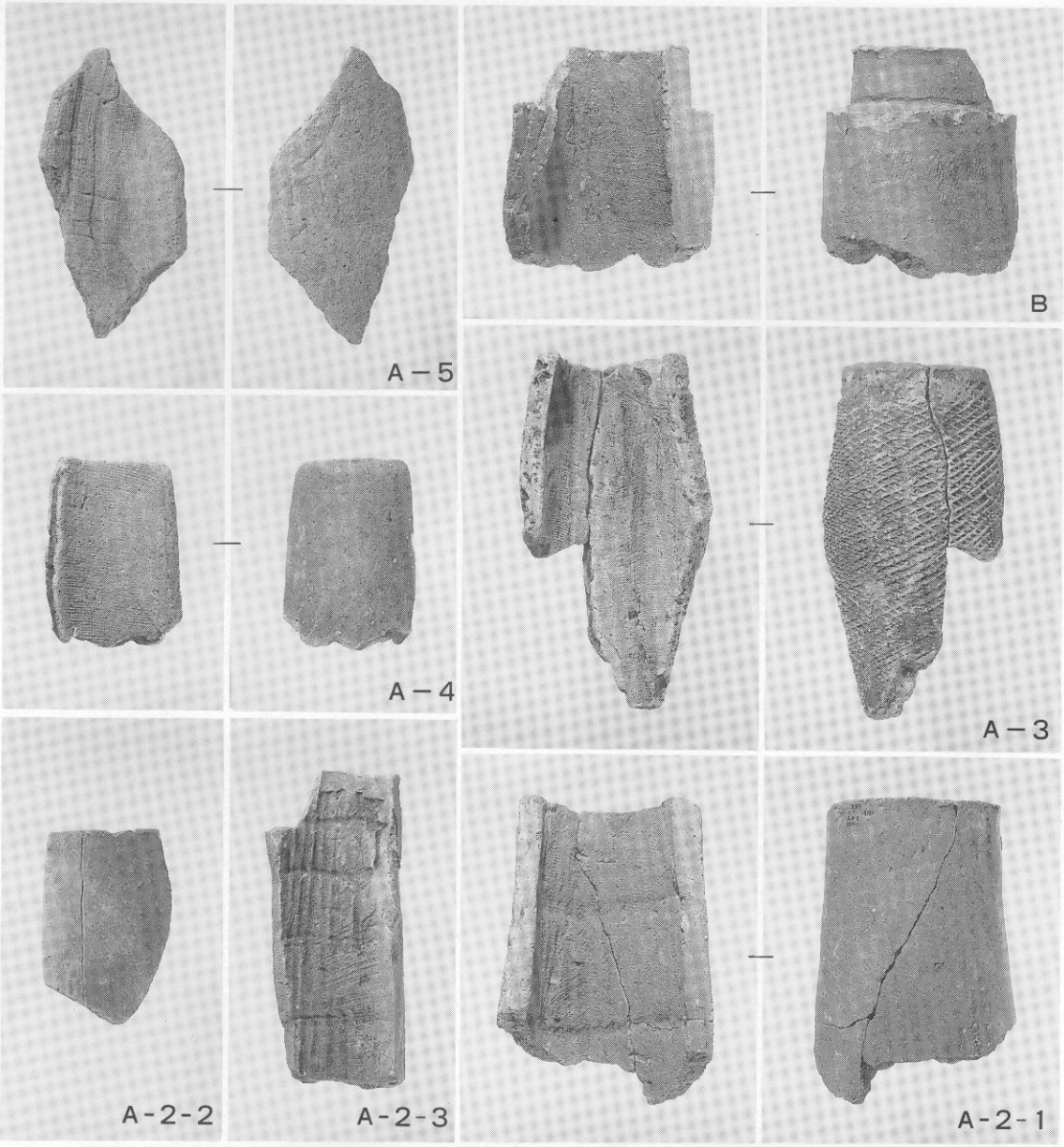


出土軒平瓦



丸瓦・平瓦（５分の１）

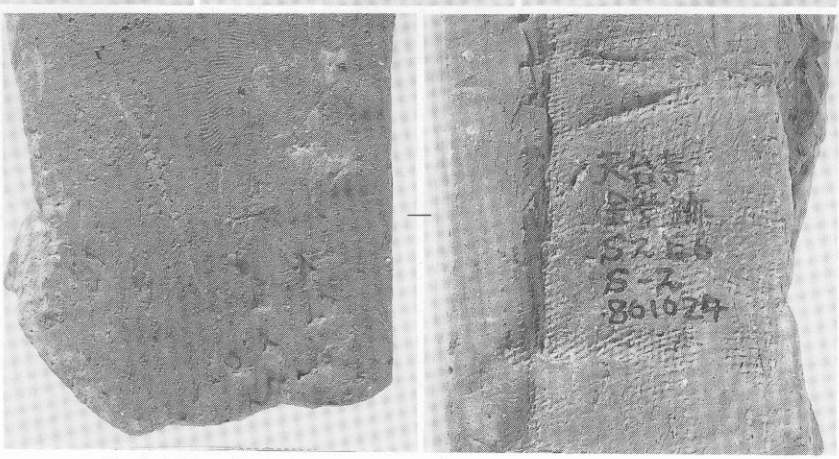
図版　22



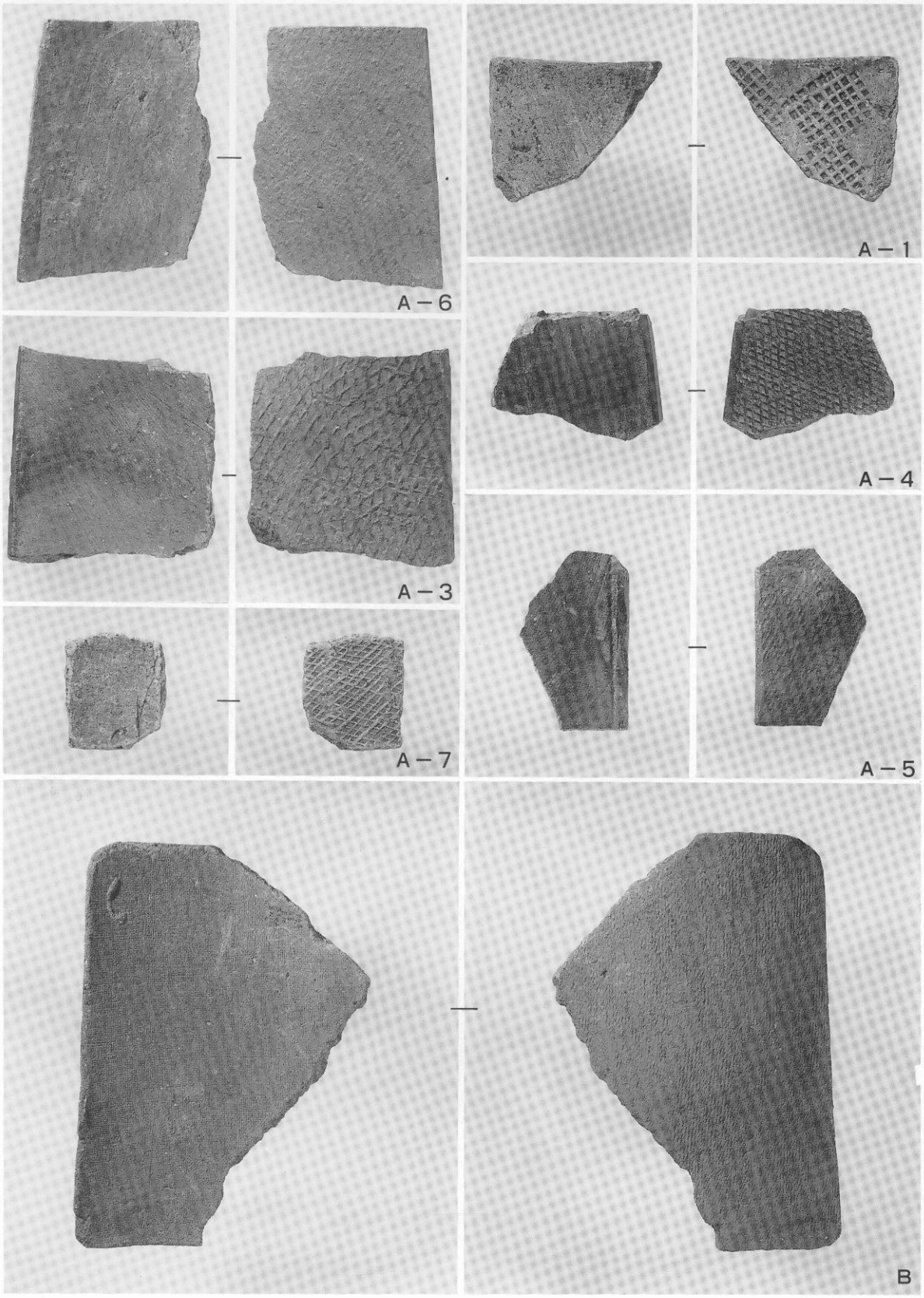
軒丸瓦Ⅰ類の
丸瓦部分

右　竹管状模骨の
結束痕

左　格子目叩打痕

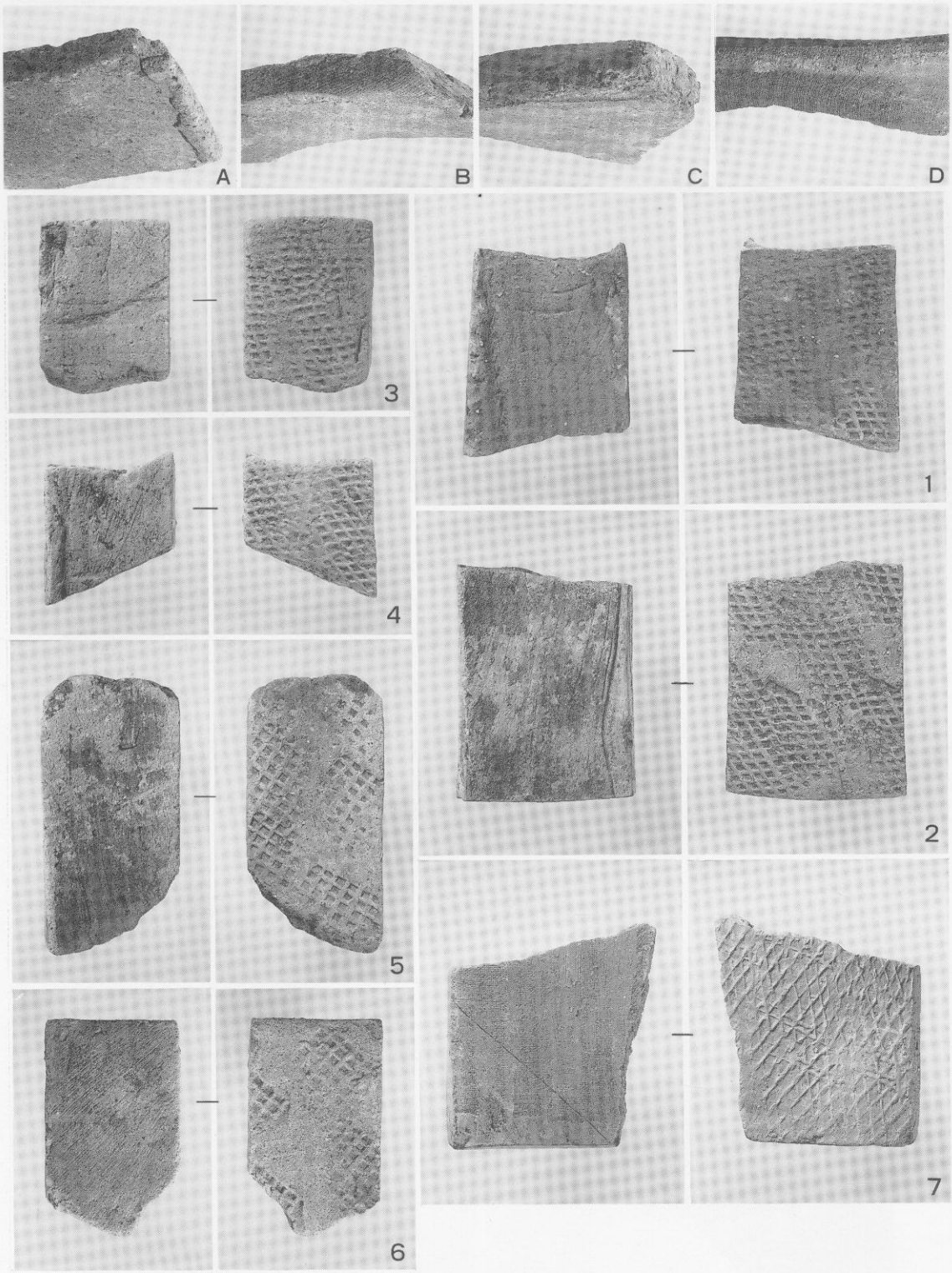


丸瓦（最下段を除き５分の１）



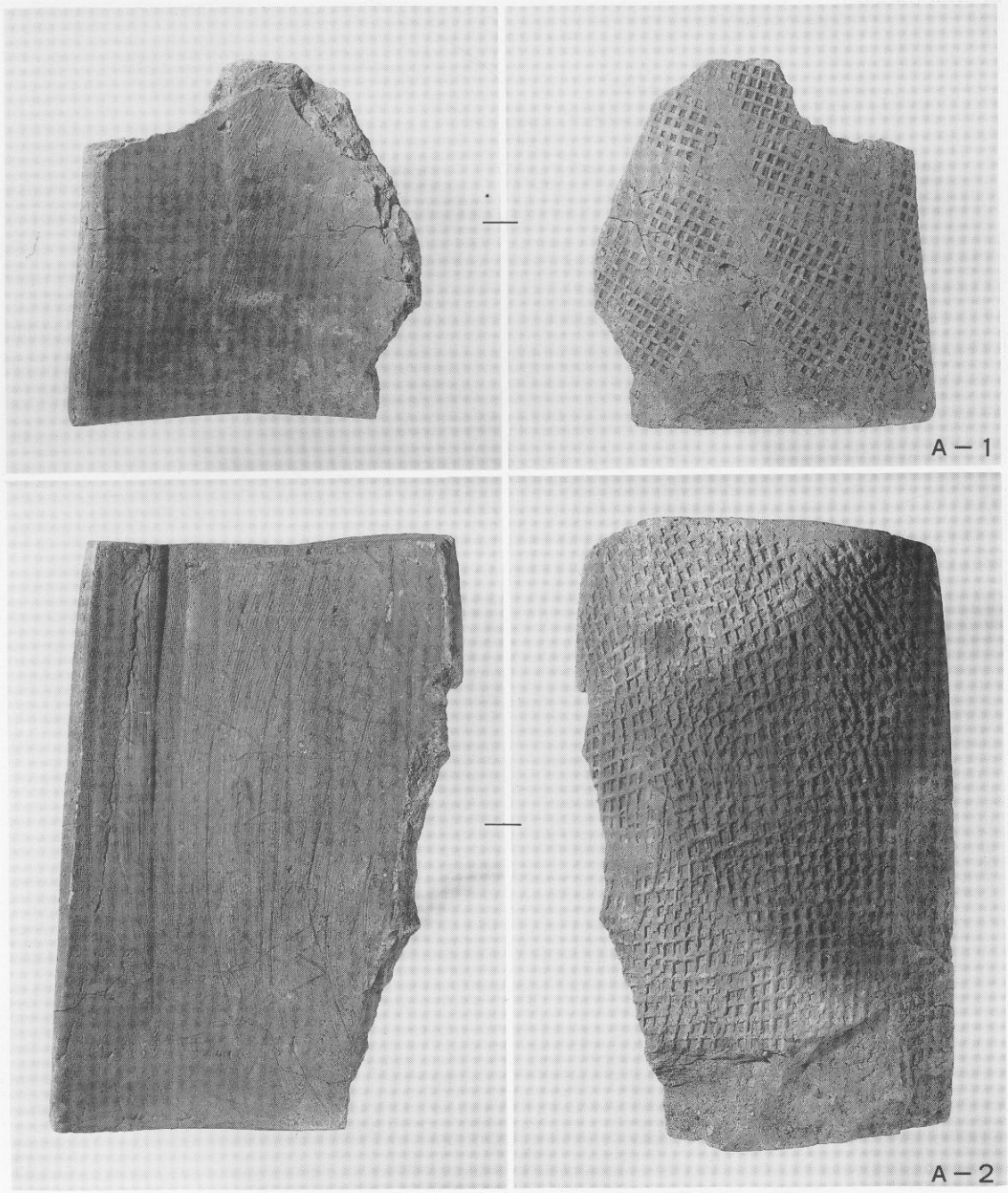
平瓦（5分の1）

図版　24



A・B　側面に布がまわるもの　C　木口に布がまわるもの
D　粘土の削り余りを内側におさえるもの

道具瓦（5分の1）、A～Dは平瓦一枚作りの資料

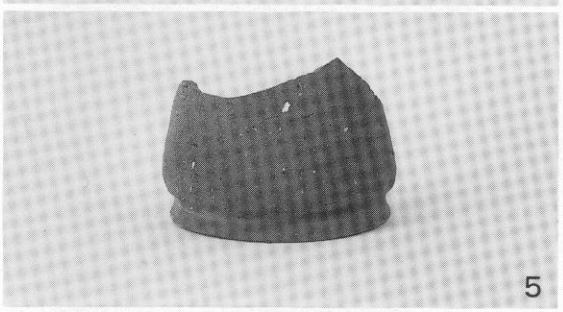


天台寺２号窯出土平瓦（５分の１）

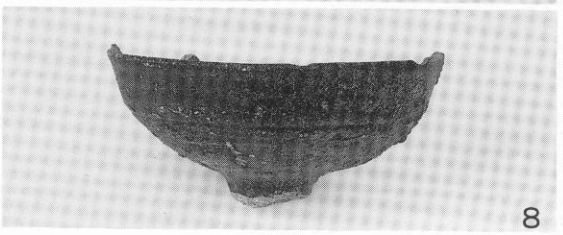

1


2


4

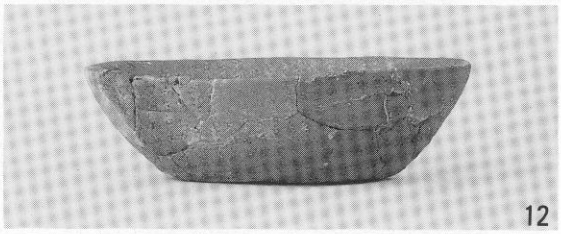

5


6

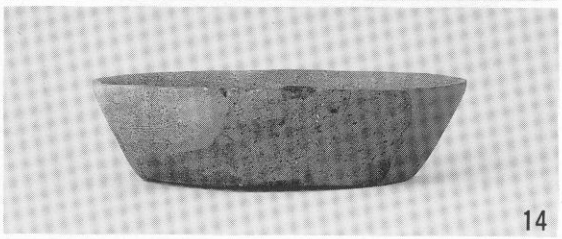

8


9


11

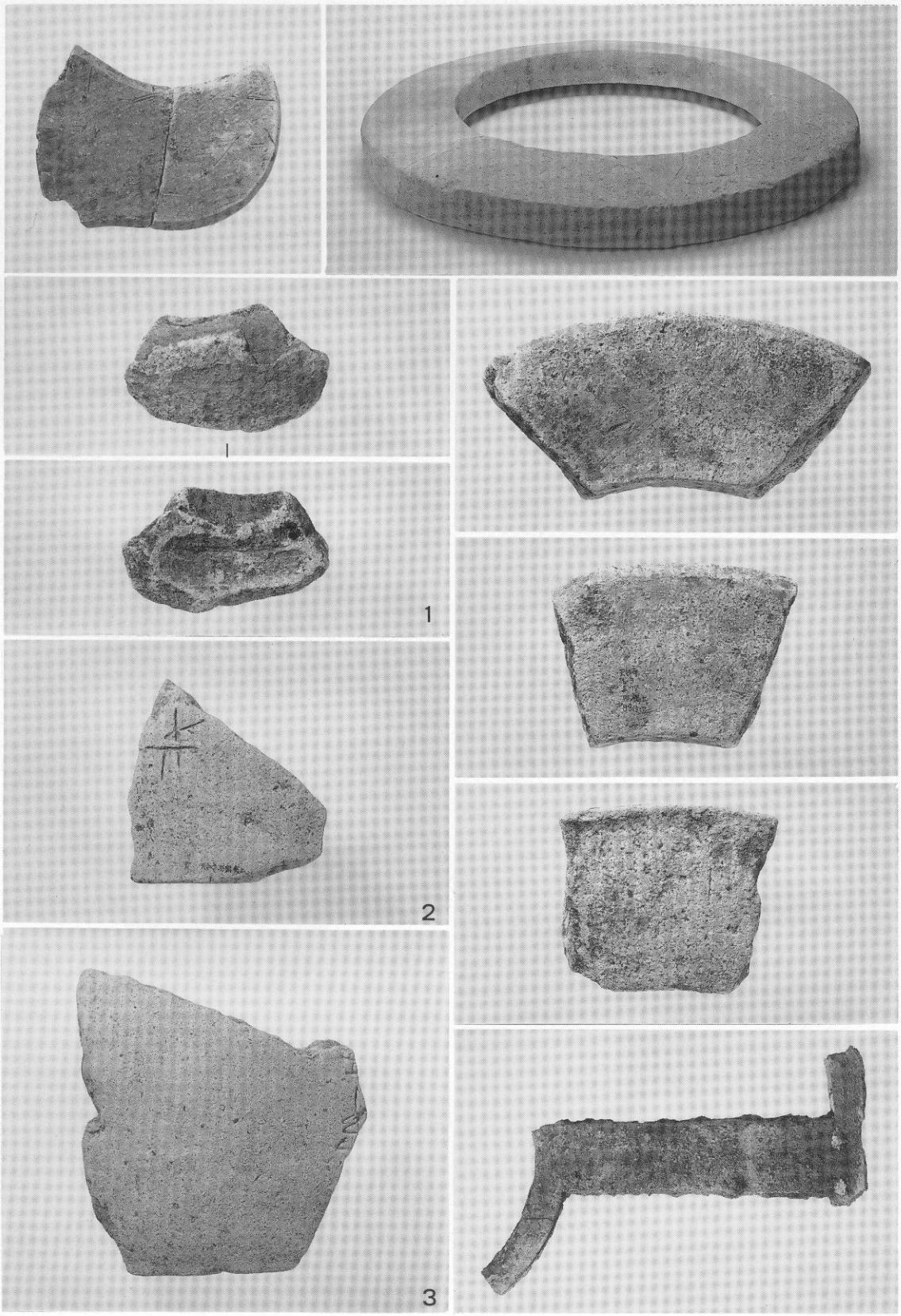

12


13


14


16

出土土器



土製風招・その他の土製品・銅製九輪

図版　28

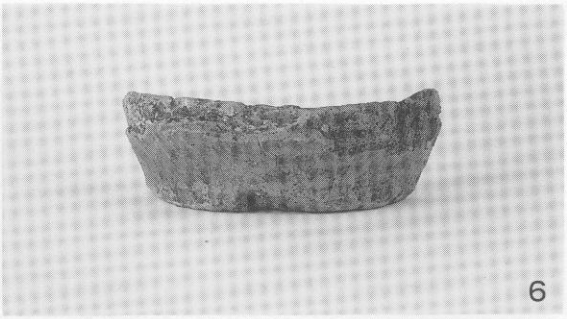

1

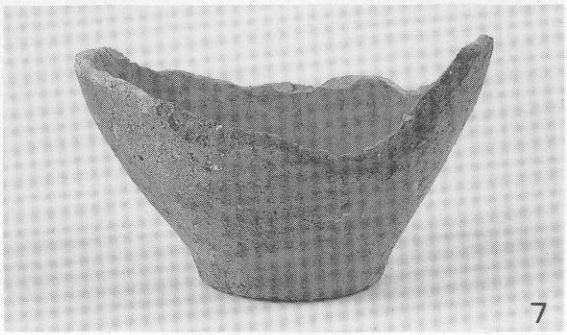

2


3

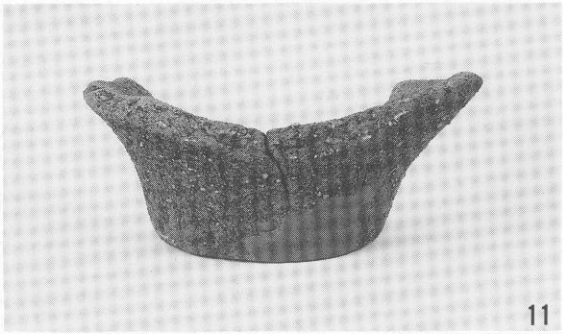

4

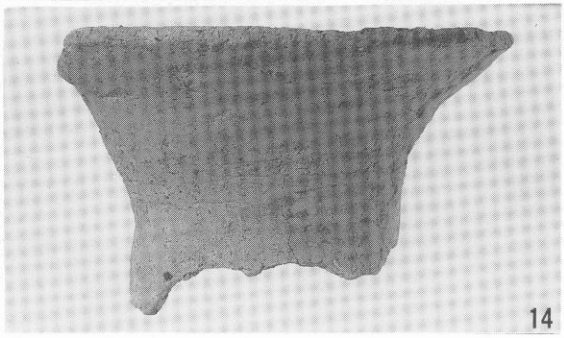

5


6


7


10

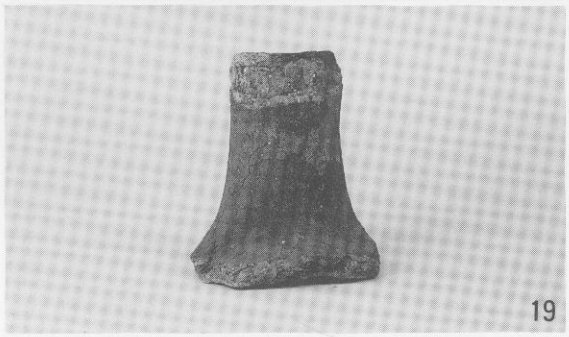

11

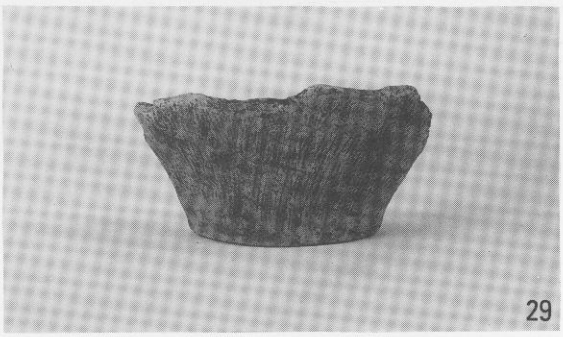

14

土壙 SK051・052・053・054・056 出土土器

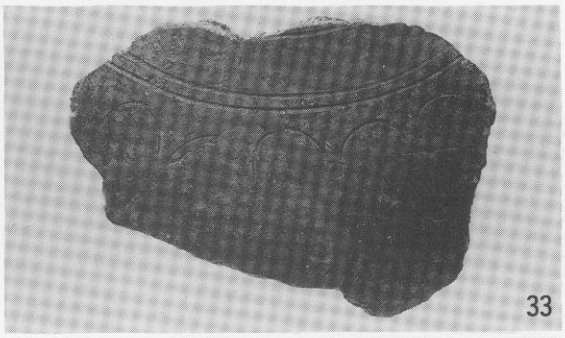

15


27


19


29

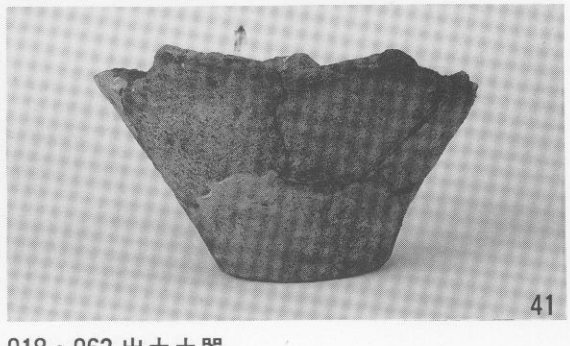

20


33


25


39


26


41

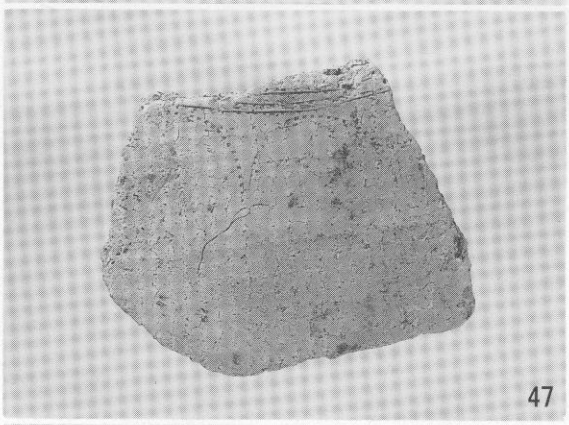
土壙 SK056・057・018・062 出土土器

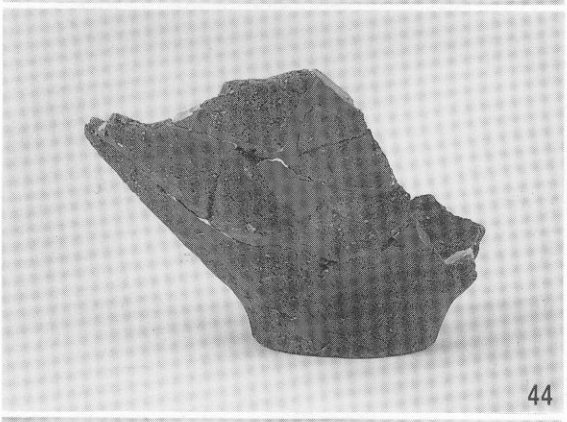
図版　30


42


46

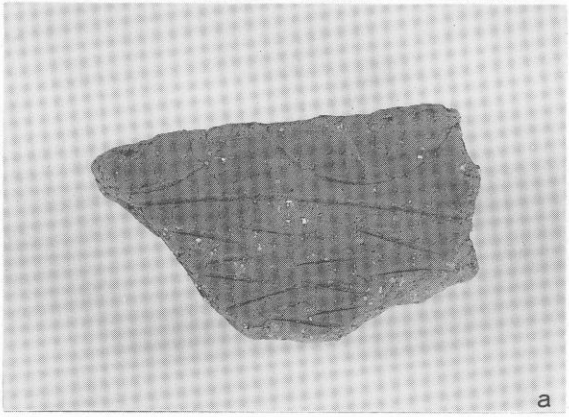

43


47

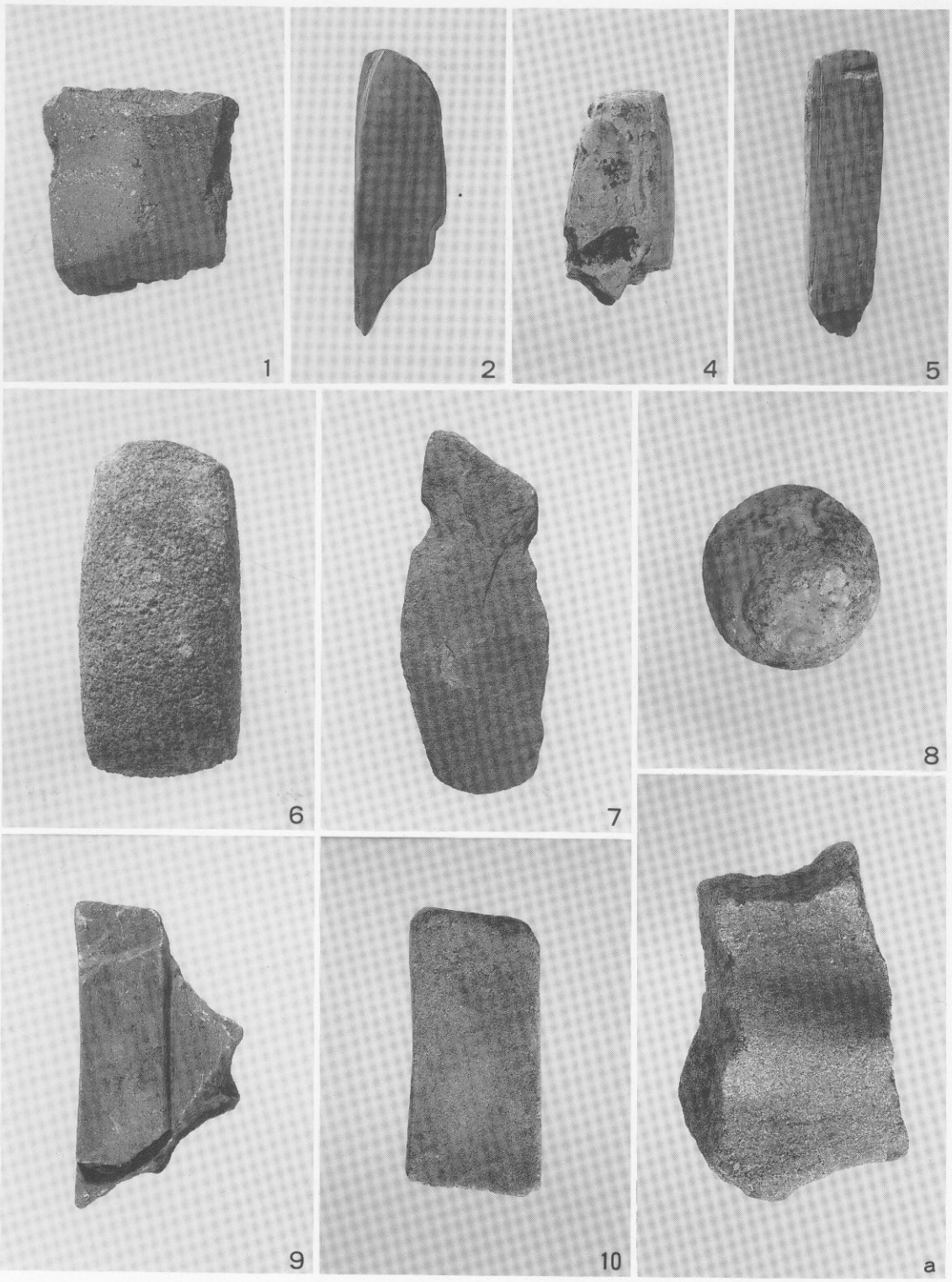

44


49


45


a

土壙 SK018・062・067，層位出土土器



出土石器，砥石

（付）天台寺跡関係主要文献

天台寺阯調査

調査委員　山本通

一、位置

田川郡伊田町上伊田の内、伊田原の鎮西公園内に在り。

二、創始

最澄は延暦二十二年遣唐使藤原葛野麿等の一行に加はりて入唐せんとせしに風雨のため目的を達せず筑紫の海岸に上陸すそれより宇佐八幡宮に詣でて海上安全入唐求法の達するやう祈念しける時八幡宮の神託を受けて田川郡に來り香春明神に參籠せり、然るに「海上急難の時は必ず光を示さん」との神託を受けたり。翌延暦二十三年入唐法を求めて二十四年歸國せり。往還ともに海上安全にして目的を達することを得たるは一に香春明神の加護なりとて田川郡香春岳の麓に寺院を建立せり。これ田川郡内に天台宗の寺院の建立せらし始めなり。此の時建立せられしは神宮院高藏寺、東光寺、小藏寺、功德寺、大藏寺、觀音寺なりと箕田軌氏は說かれけり、然るに天台寺の建立については確證なし、兩豊記によれば「傳敎大師歸朝の時田河郡に伽藍十八ヶ所を造始む今の勾金の庄の內天台寺是その一つなり」とあり、叉應永

戦覽記下巻には「勾金の庄天台寺は往昔傳教大師歸朝の時香春祉に參籠し修法滿備して田河郡に十八箇の伽藍を建立して天台別院と號す」とあり、箕田軌氏の說によれば「天台寺は弘仁年中の建立ならむ、最澄は先年入唐求法の際神明の加護を被りたる宇佐香春竈門の三社に對し其の願を果さんため弘仁年中西下せり、此の時台宗顯學の大道場となすために總て比叡山に模して香春岳一ノ岳の頂に山王權現を勸請して奥の院となし大平記に「嶺頭には山王權現の社壇甍並べ麓には大菩薩の高座寺軒を爭ひ云々」とある盛況となり應永戦覽記に「天台寺は常に千人の衆徒を會して護持國土の名藍なり」とある大寺となりしなり」と。

左に二三の文献を參考のため記さむ

○元亨釋書巻一最澄傳云（元亨釋書和解による）賀春の神宮寺に於て法華を講ぜられしに、この時豊前國田河郡公務の役人等見たりしは天に瑞雲たちて其狀ことやうなりけり、やがて記錄して最澄師に進上せしかば最澄は見らるゝよりその奇怪がましきことを心に忌みおそれかたく封じて人目をはばかりつゝ門弟義眞に告けられしやう吾入滅の後にいたりて必ず此緘をひらくべし存生のうちは無用なりとつよくこれをいましめらる遷化の後諸々の弟子たちその文をひらき看ればこれも經王講說の瑞相天にあらはれたる證文なりける、されば其の文にいはく今月十八日未の時紫雲光かがやかし賀春の嶺に起て法筵の庭をおほひけるを村の民ことごとく見てその異相なるを感じあへることを記せり又最澄の渡唐せらるる時すでにこの田河郡賀春山の下に宿せられしかば夢の中に梵僧とおぼしき人前に來て衣を袒きて身をあらはす左の肩は人に似て右の肩をみれば石の如く見えたり、この人のいへるやう我はこれ賀春明神にてこそあれたのむらくは和尚慈悲をたれて吾この罪業ふかき身をいかんともすくひたまふべし、さあらんにお

いては我もはた貴僧このたびの求法のために異域の企をなしたまへるを只一すぢに加護して晝夜をかけてたゆみなかるべし、我正身を知らまほしくおもひたまはゞそも海中の急難あらんとき光を現ずるを其驗とせらるべしといへり、かくて最澄その明けぬる旦、山の右の方の崩れたる巖を見らるゝに草木も生ぜずして宛も夢中の半身のごとくなりしかば心中にふかくこれをあやしみ思へり、又海中を見れば浪風の様體案の如く光をかゞやかしければ、さればこそ神の言まさにいつはりなしと信じて法華院を建てみづから講談の席をはじめられけり、すなはち神宮院となづくこれなり、さていよ〳〵あやしむべき事はこの講席を開かれしより後は、かの右かたにありし巖の地、自然に草木を生じつゝそれよりして年々枝葉もしげりゆくほとに里人なべて奇特のおもひをなしにける。

○續日本後紀卷第六

承和四年太宰府言、管豊前國田川郡香春岑神、辛國息長大姫大目命、忍骨命、豊比咩命、惣是三社、元來是石山而土木惣無レ生、筵暦年中、遣唐請益僧最澄、躬到二此山一祈云、願縁二神力一平得二渡海一　即於二山下一爲レ神造レ寺讀レ經、爾來草木蓊鬱、神驗如レ在、毎レ有二水旱疾疫之灾一、郡司百姓就レ之祈禱、必蒙二感應一、年登人壽、異二於他郡一、望預二官社一、以表二崇祠一許レ之

○傳教大師流記（太宰管内志所載）

弘仁七年丙申正月十七日最澄於豊前國田河郡以二赤染連清一爲二壇那一、繕二寫妙法蓮經一部十六卷、爲レ報二香春明神指南恩一、其慇懃既畢。（中略）大師歸朝之後、爲レ報二彼神恩一、道邃和尚眞

筆金泥法華經一部被レ施二入當社一畢、其外自書寫墨字妙法蓮華經並十六卷各一部別奉二納之一、又香春山其高一里、有二白巖一無二青草一、當初又明神示二大師一言、我山可レ令レ生二草木一云云。而彼山東腰有二方丈白石一、大師坐二彼上一七日夜講二法華藥草喩品一、千草萬木忽生長、此號二高座石一

○古緣起（太宰管內志所載）

承和七年庚申正月十七日、最澄於二豐前國田河郡一、以二赤染連淸一爲二壇越一、繕寫妙法蓮華經一部幷六十卷、建立一堂。爲レ報二香春明神指南恩一　其懇勤畢、仍明神社面前砌相並造二經藏一字。以二連淸一令レ承二續萬福之本一、其中奉納矣、寔明神者敎興繩柱哉、最澄爲レ利生自二日域一　赴二到船略一扶二助滄海一　無二難畏一　往還豈之非二明神之一レ助乎、抑去延曆四年云云（中略）此社者爲二比叡山王別社一、以レ寺者爲二香春寺一、寄二田地一爲二延曆寺別寺一、偏欲レ令二明神法樂莊嚴一　緣起請遺二後昆一耳、最澄以記矣、永續二赤染連淸一燈油佛餉田拾五町云云。

○太宰管志、曰、

さて上宮と云は香春の一ノ岳の上にます山王社を云、天台別院たるが故に近江國比叡山主大山昨神を祭れり、今は社もかたばかりに成れり香春本宮の神官奉仕す。

○豐國紀行（太宰管內志所載）

上香春町云云、古此處に傳敎大師渡唐前後に住れし事あり、此時より香春に寺を建初ける昔は六坊有しと云、其跡社左右處々にあり今も一坊殘れりとあり、今も上香春の少し北方高

座石寺上に小庵ありて神宮寺名を存せり天台宗にして今は無住なり是かの於山下爲神造寺とあるによく叶へり。

○香春神社舊記

香春神社宮寺有六坊山王山高座石寺、雲立山東光寺、壽龜山小藏寺、碧水山功德寺、無盡山大藏寺、瑞鷲山觀音寺是也。

三、廢　滅

應永戰覽記、後太平記、戸次軍談等によれば一時は堂塔寺院甍を連ねたる天台宗の寺院も足利時代となり世の亂るるにつれて次第に衰運に傾きしが大內盛見が香春城主千手興房を攻めし際興房を救けて防戰し香春落城と共に寺院は多く兵燹にかゝり、これより衰へたるものの如し、天台寺も亦これより漸次衰頽し廢寺となりしならん。田川郡內の天台宗の寺院は天正の頃無住の廢寺となれるを眞宗の僧侶の再興せしもの多きを見れば天台寺の廢頽せし年代も或はその頃ならん。

○太宰管內志所載の一、二を左に記す

世の中亂れて後此山に城を造れるに依つて神社佛閣などやりおとろへたるなるべし、いま按ずるに兩豐記に田河町香春岳の城は天慶年中に伊豫椽純友がつきたる城にして二男純再を置けり其後應安の比には大友氏の幕下千手信濃守興房此城を守り永祿の比に至つて原田

五郎義種居れり云云。

さて香春の城と云は一ノ岳の中腹にあり要害の地なれば初て城を造る是より次第に神社佛閣衰へたるものなるべし。

○應永戰覽記下卷

天台寺は千人の衆徒會して護持國土の名藍なり、然るに頃年稍もすれば佛衣を脫し甲冑を帶して妨亂を任て淨土寺先に進て十六箇寺の衆徒を引具し野臥をかたらひ惡行をなす云云。大內盛見制使を立らる鷲頭兵部大輔、桂左衛門佐其旨を承て天台寺に立入り制詞の趣をのべ寺の傍にて惡僧六人の首を刎たり、淨土寺には杉阿波守立越て衆徒等領掌す。

○應永戰覽記中卷

應永五年正月三日光胤妻伴千菊丸落行于田川郡指掛于勾金伏拜鶴岡打過爲朝屋敷著天台寺寺僧憐之隱置于經堂云云。

大內盛見入于田川郡云云 十日朝護德谷人家寺塔不殘一宇放火之以硯寺觀音堂爲本陣、云云

寄手爲押上于硯寺之處天台寺衆徒著一柳袖印書大日眞言其勢五百餘騎振錫枝自南原駈來於硯寺前與大內勢合戰及十八度小早川手者討取一宿老覺乘阿闍梨依之衆徒大崩追之到糸飛川衆徒指天台寺引入此夜大內勢取陣於硯寺燒雲火云云 寄手於藥師院搗相圖鐘聞之陶越前權守

武田安藝守等同時燃二立金剛寺荒神口一之間四方之口口亦掛レ火町加木寺塔悉焼立此時宮下野守自二高座石寺一攻入放二火佛殿諸堂一十二日曉天寄手責二入于二丸防術已盡之間大將輿房於二大廣間一集二一門郎從一催二最後之酒宴一云云

○戸次軍談十二巻

弘治二年六月廿日大友勢原田親種が香春城を攻落す件に云云　嶺上には日吉神祠を祭り麓には堂塔寺院甍を連ねて九折坂凡五六□町分ヶ上る中々馬蹄の及ぶ處にあらず云云

四、現在の遺蹟

1　礎石

太宰管內志によれば左の如し、

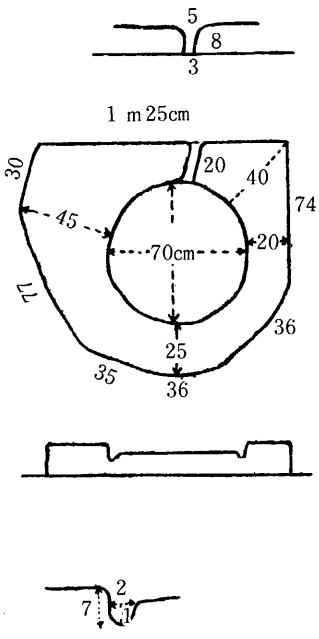
「里俗語傳」に上伊田村の內伊田原の東寺が門と云處是天台寺の跡なり今に殘れる礎石は門の跡なり昔盛なりし時は三百坊有しと云「常足」按ずるに門の跡と云物は實は本堂の跡と大塔の跡となり其二基南北に相並べり礎石の邊に古瓦殘れり坊中の跡と云物げにさもありしならむと思はる天台寺の事いまだ舊證を得ず、なほ悉く云はば伊田原の地平田より少し高き所にして夏吉村より下今任村に通ふ道筋なり原の廣さ南北二里許も有むと思はる東西は五町或は十町もあるべしめづらしき平原なり東堂大塔の跡其中にあり平原よりは六七尺も高かるべし礎石の大さ三尺四方許にして其數三十五六許あり堂の跡の廣さ四間に五間許もあるべきか其南の方十間許にあるは大塔の跡なり是も

同程の石を二十許並べり中に塔の軫木を立たる石あり徑二尺五寸許の圓穴を彫たり深さ五寸許も有るべし此邊すべて短き草ばかりにして木もなく又草の生ぬすき間もなし礎石は昔のままに聊も動きたる様は見えす破瓦の散れるは此邊ばかりなり瓦も青色なるは堅牢なる事都府樓に殊ならず坊中の跡と云物は多く東北の方にあり東西五間南北十五間許なる處是は礎石も破瓦も少し殘れり其外東西南北六十間或は東西五十間南北百間許なるもあり或は畠となれるもあり又小松などの生たる處もあり是より東に低き處平田少しありて其東に同じ程の高さにて廣き平原あり此方は多く畠と成れり是に堀の跡と思はるゝも見え又屋敷の跡とおもはるゝも元より多し。

然るに現存せる礎石は左の圖に記す如く其數少く且つ殘存せるは本堂址及塔址と考へらるゝ三ヶの處のみとなれり。

本堂址は東西十五間南北六間許り高さ尺餘の土壇の上に礎石八個殘存せり。

此處より三十五米突九〇許り南方に二十一米突餘の距離をへだてて高さ五尺餘の二つの土壇あり東方に在る土壇の中央に塔の心礎ありその周圍に十五ヶの礎石殘れりなほ其他に殘存せる如く考へらるゝも埋れてゐて明かならず。



心礎は平面を平らかに削り其中央に深さ七糎直徑七〇糎の圓柱穴を穿つ其の底面は平担にして周圍に幅二糎深さ一糎の溝を有し其の一端より外方に濕氣拔の溝をつくれり、太宰管內志の「塔の軫木を立たる石あり云云」といへるはこの心礎ならん。

心礎の周圍の礎石には古圓柱座らしき何ものもなく石面は

平らかなれども芝生に掩はれて全表面を見ることを能はざるもの多し。其の中の主要なるもの二、三の大さを第四圖に示せり。第三圖に示す如く西方の土壇上に二十三個の礎石あり其の中に圓柱座の存在せりと認めらるゝもの十三個あり寫眞に示せるは直徑五十三糎高さ一糎の圓柱座なり其他は雨露のため削磨して座の高さを測定したがたし。

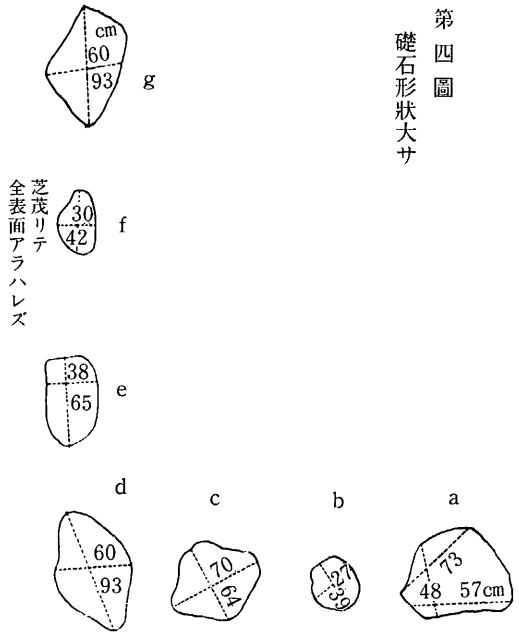
田川郡教育會は大正七年四月田川郡教育會建之

（右側）　大正七年四月田川郡教育會建之

（正面）　天台寺遺跡

（左側）　往昔傳教大師入唐歸朝の時田川郡に十八伽藍を建立して天台別院と號す中にも天台寺護國の名藍として其名高し。

第四圖
礎石形狀大サ



礎石は何れも花崗岩の自然石の表面を平滑に加工したるものにて田川郡內に產する岩石なり。

2　其　他

礎石の存する附近一帶は芝生にて東方には梅樹小松林などあり西方は畠をへだてて小松林あり南方は次第に傾斜して田圃につゞけり北は鎭西公園の運動場接せり此地の公園とならざる頃は松樹な

ど多くありしといふ。

太宰管内志に「其東に同じ程の高さにて廣き平原あり此方は多く畑と成れり是れに堀の跡と思はるゝも見え又屋敷の跡とおもはるゝも元より多し」とあれども今はその一部分は田川農林學校々地内となり其他は果樹園及菜園などに開拓せられて屋敷址らしき面影を認めがたく只古老の語り傳ふるのみなり。

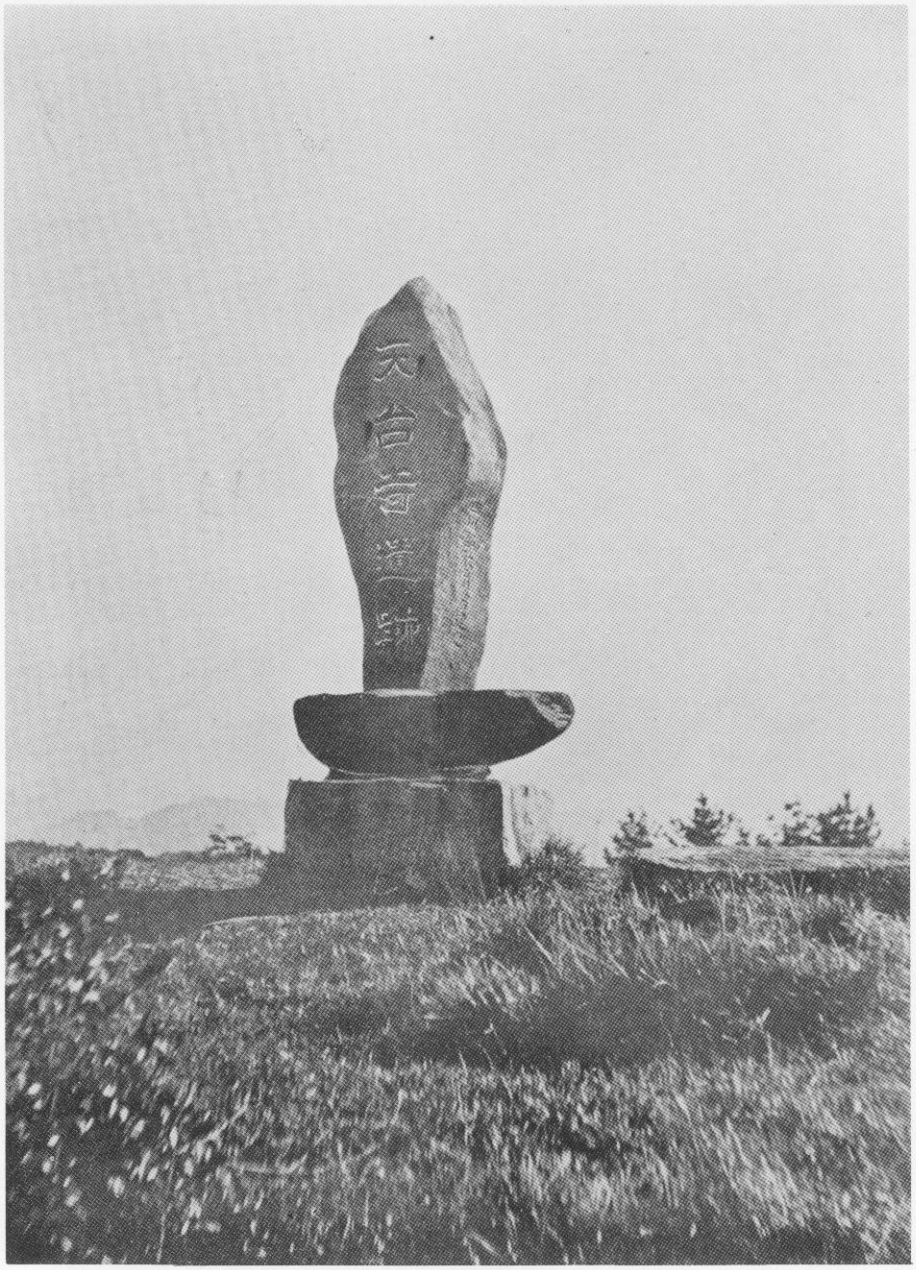
古瓦の破片の多く散在せるは天台寺遺跡の碑を中央として方一町餘の間なり古老の言によれば完全なる瓦及文様の全きものなど出しことありと言へども寫眞に示したるものの外まだ發見せず。太宰管内志によれば都府樓の青色の瓦に似たるものもありし由なれどもまだ破片をも發見せず多くあるは何れも布目瓦の破片のみ。

昭和五年三月

『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』　第五輯



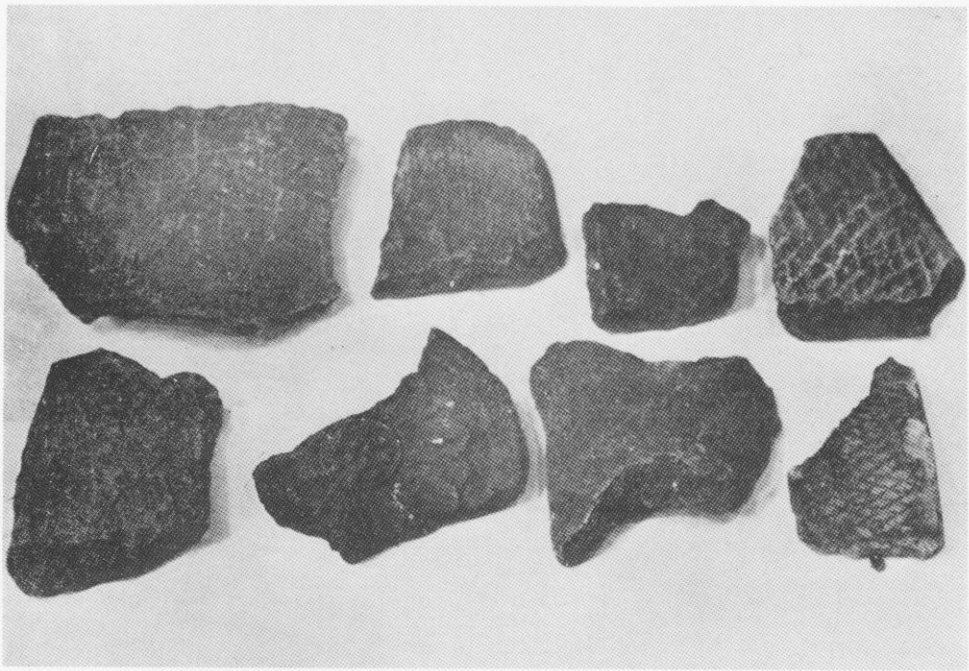
天台寺遺跡の碑



天台寺本堂址



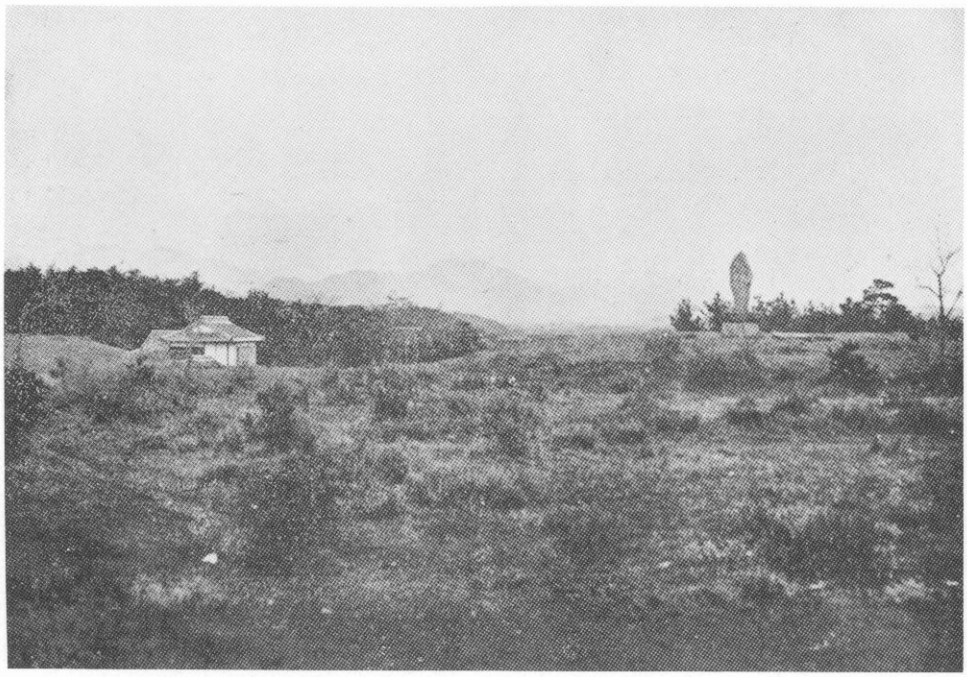
天台寺瓦破片



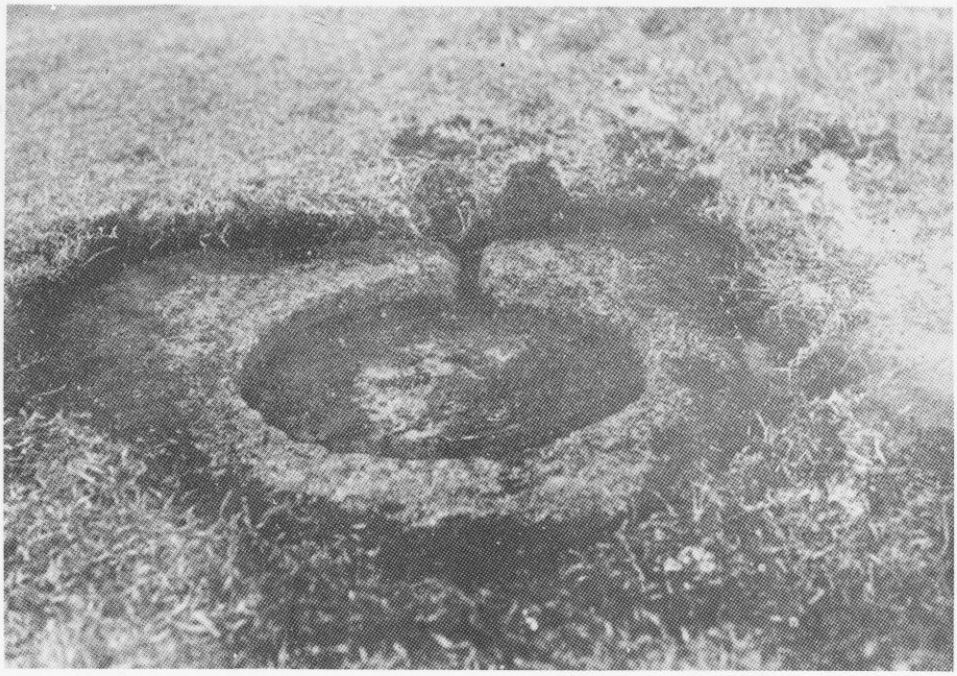
天台寺址、南方より塔址を望む



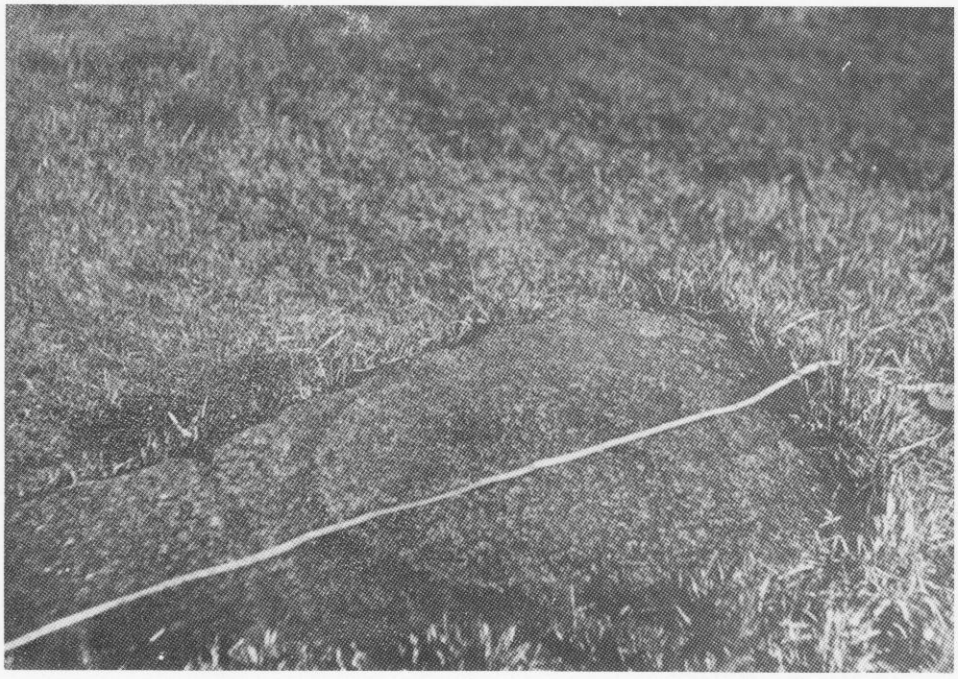
天台寺本堂址より塔址を望む



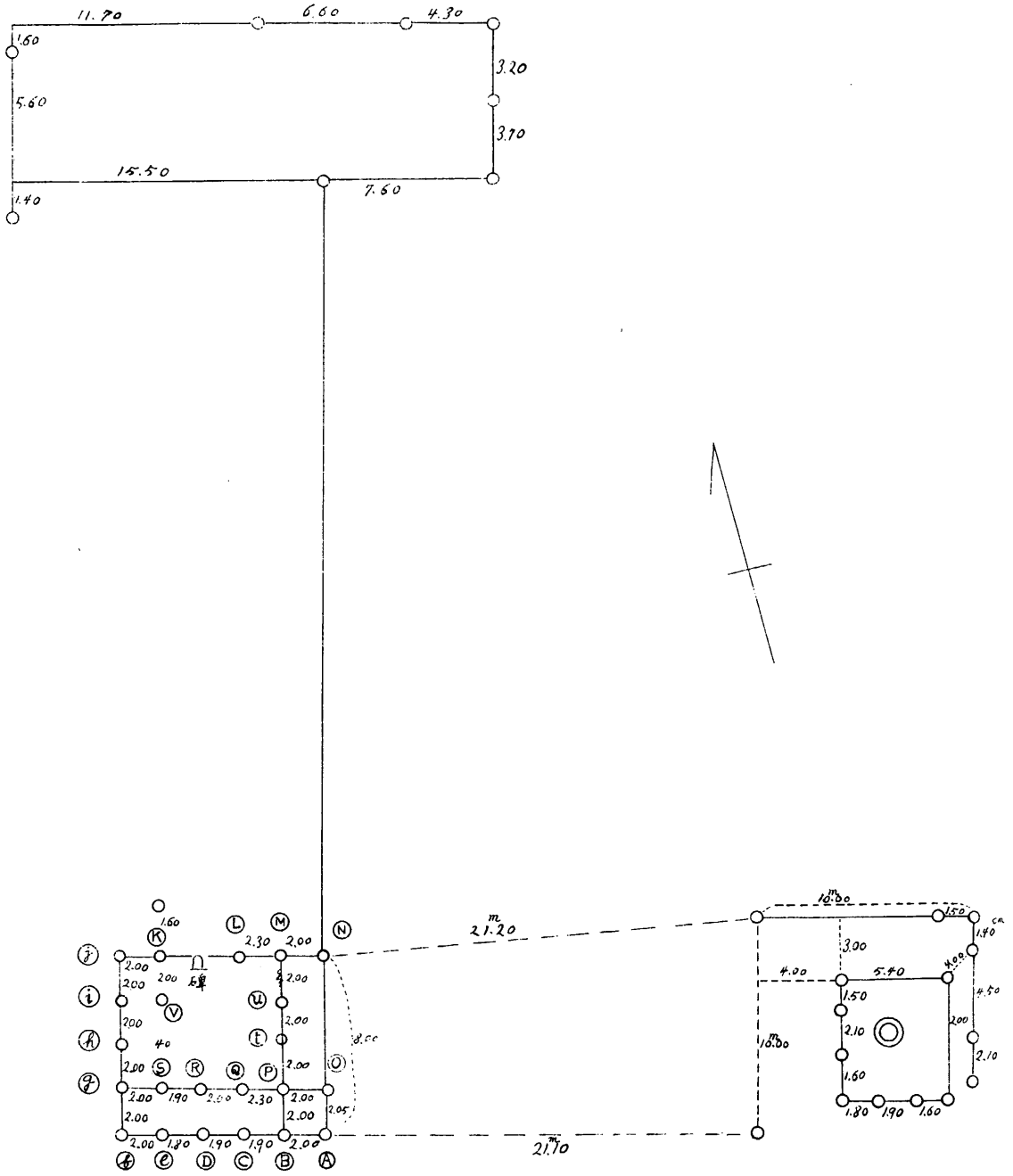
天台寺址、塔址、心礎



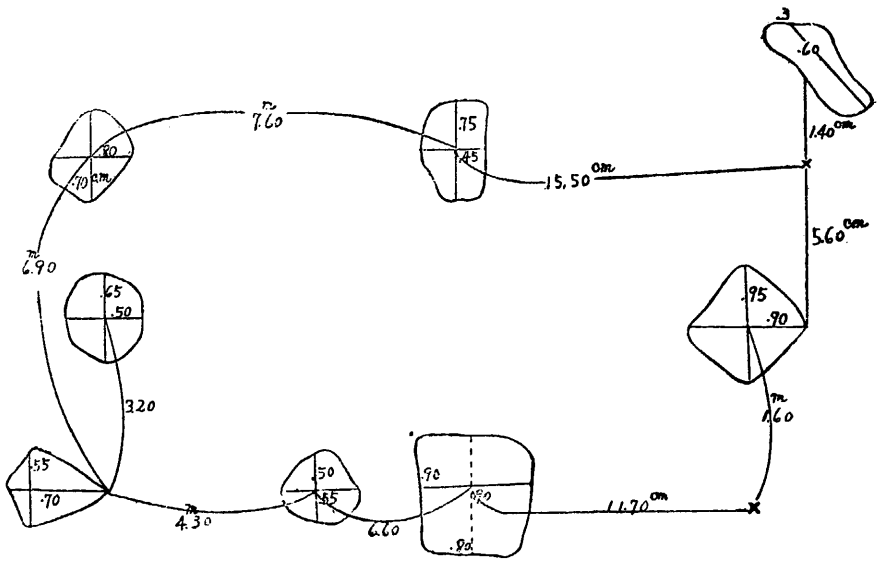
天台寺址、塔址、側柱



第一図
礎石分布図


11.70
6.60
4.30
1.60
3.20
5.60
3.70
15.50
7.60
1.40
21.20
21.70
10.00
3.00
4.00
5.40
1.50
2.10
1.60
1.80
1.90
1.60
4.50
2.10
8.00
2.30
2.05
1.80
1.90
1.90
2.00

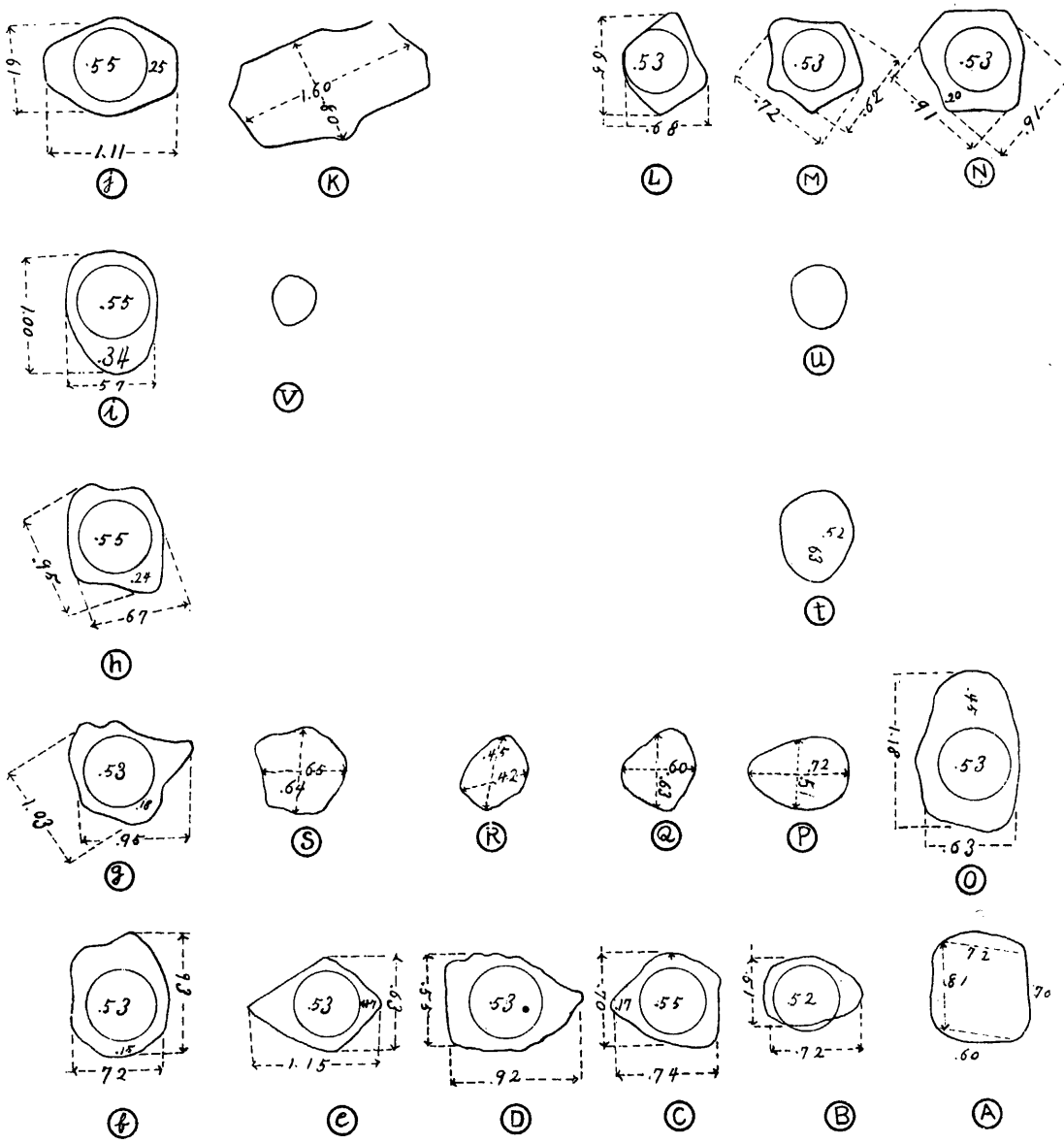
（第二図）　本堂址礎石形状及大さ



第 三 図

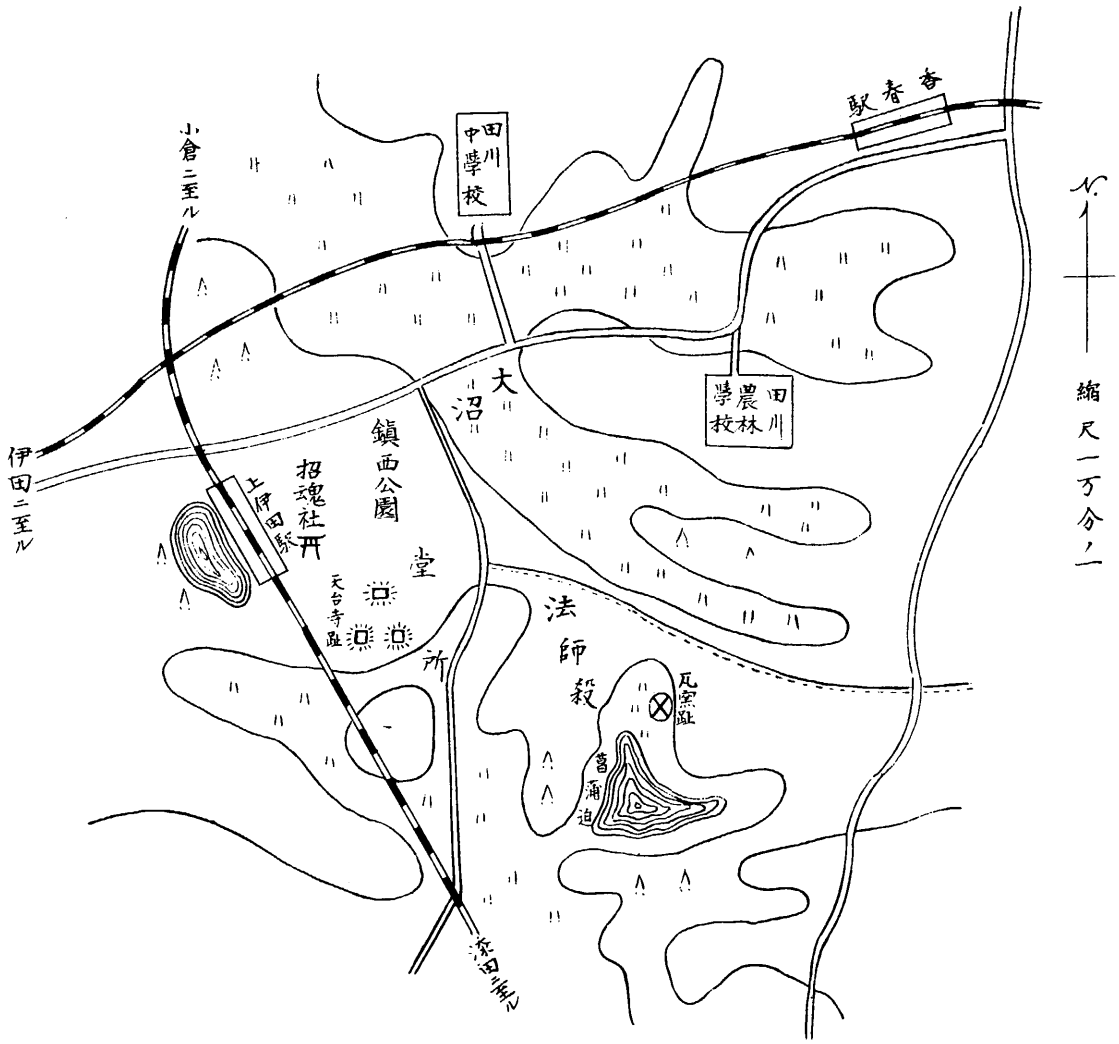
礎石の配列形状及大さ

（礎石間の距離は第一図に示せり）



天台寺瓦焼阯の調査

第 一 図
天台寺趾附近略図



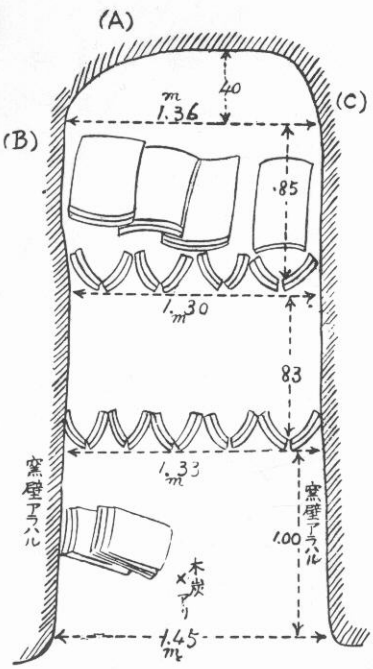
第 四 図（其の一）



瓦焼窯址発掘後の現況

第 四 図（其の二）

平 面 図

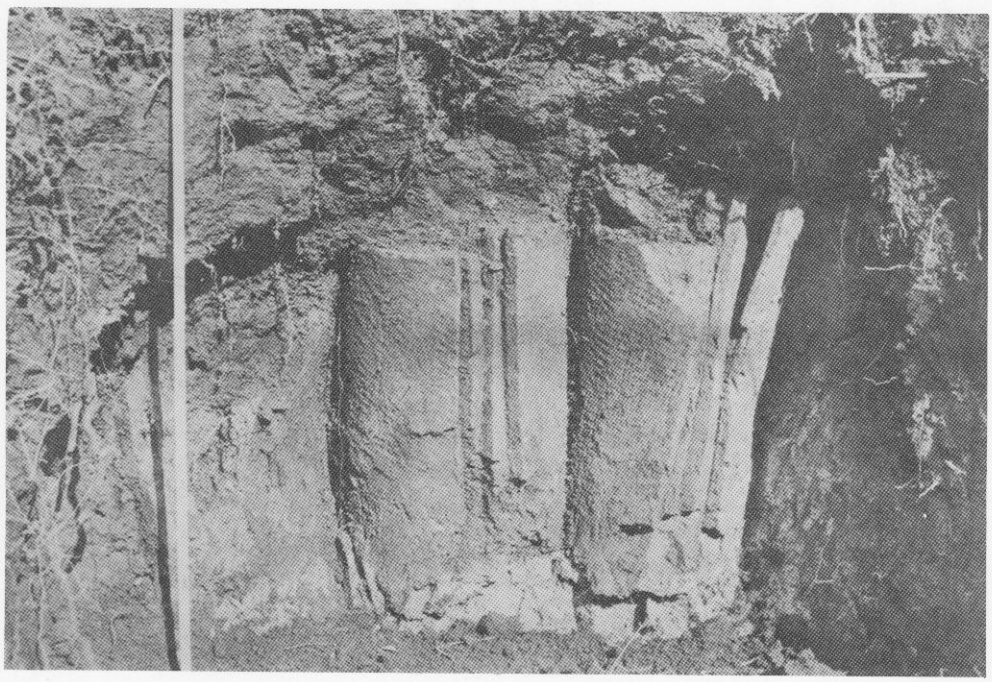


第　五　図



瓦焼窯址発掘の初め

同　　上



天台寺瓦燒窯址の調査

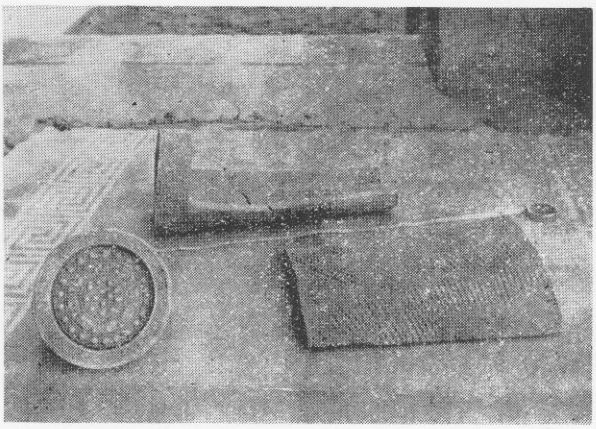
調査委員　山本通

一、位置

田川郡伊田町伊田原鎭西公園内に殘存せる天台寺址の東々南約三丁餘の地、字、法師殺五三九番地内に在り。此の附近は所謂伊田原丘陵地の一部にして菖蒲迫の溜池に面せる濕地なりしが、大正元年耕地整理をなし現在の如き田圃となしたり。其の際巴瓦及布目瓦の破片多く出土したるを地中深く埋めたりと土地の農夫は語れり。此の窯址とも認むべきものは田圃の東側の丘陵の斜面の下方に在り。（第一圖參照）

二、發掘及現狀

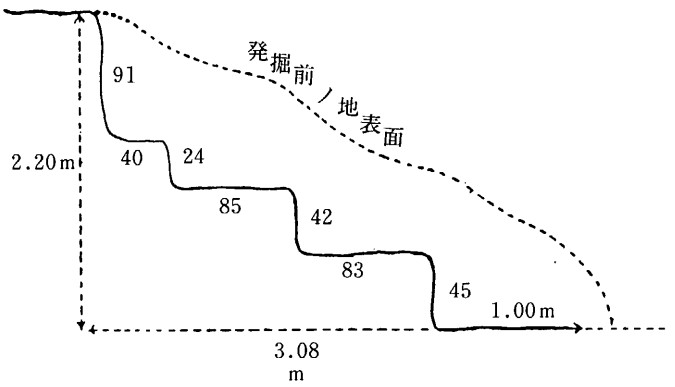
昭和六年十二月一日青柳賴吉氏土地調査中、偶然にも布目瓦を拾ひたる場所がその附近の斜面の土質と稍々異なるを認めて疑ひを抱き少しく發掘したるに巴瓦二個及布目瓦の完全なるもの、殘存せるを發見せり。氏の言によれば巴瓦は地表に近く横はり、更に土を掘りしに布目瓦の完全なる形狀をそなへたるもの二枚づゝ重ね合はせて立てゝあるもの十二枚ありしも取り出さんとせし時毀れて一枚のみ完全なるものを得たり。（第二圖參照）



巴瓦
直徑　〇・二〇五米

雌瓦
長サ　〇・四一米
幅　〇・三八米

其の後、氏の案内により第一回の調査をなしたる時、第五圖に示す如く雌瓦の八枚立ち並べるを發見したり。更に昭和七年二月七日發掘をつゞけたるに第三圖の如く階段狀をなせるを發見せり。現存せる雌瓦は第四圖の如く入口に近く五枚横はり其の奥に二枚づつ重ねて拜み合はせて立てゝ二十枚あり、第二圖の寫眞はこの右方の部分にあたれり、青柳氏が初めに發見したる十二枚の瓦はこれと並行してこの前面に立てられしものなりと言ふ。次の段にも亦同じく十六枚並べり、其の上に七枚平らたくして置けり、瓦の質は脆くして毀れ易し、按ずるに瓦を燒きし際火の廻り惡し



【第　三　図】

く完全に焼けざりしものをそのまゝ放棄し置きたるものならん。窯の形狀は大體第三圖及第四圖の如くあれども、原形は第四圖のA・B・C・のあたりに今少しく廣くなれるにあらざるか。

三、年　　代

文献上の資料はなけれども出土したる瓦は天臺寺址より發見したる瓦と同質のものと認めらるゝを以て、天臺寺建立と密接なる關係あるものならん。（第五輯天臺寺址調査參照）

昭和七年三月

『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』　第七輯

（史蹟の部）

北九州古瓦の一様式について

緒言

鏡山猛

編者の求めによって、ここに掲げたような標題で起草を予約したのであったが、その後上田三平氏は「北九州に於ける新羅系古瓦の発見」なる論文を歴史教育（第一二巻第六号）誌上に発表された。私の取り扱おうとしていたものも同一問題で、ここにまた繰り返して論ずる必要も大して認めないのであるが、すでに予告も公表されている今日、多少実地の調査をもついでに記録しておくのも蛇足ではなかろうと思い、題記のまま筆を執ることとした。筆者の知見もまた上田氏のあげられた三遺跡を出るものでなく、なおまた三遺跡はそれぞれ一応は紹介されているものであり、ここに初めて一括して取り扱わんとする試みが上田氏によってなされたものである。

最初に三つの遺跡の名称と既往報告研究等の文献をあげておく。

① 筑前国嘉穂郡大分村（筑穂町）塔床廃寺

高橋健自氏「筑前国大分廃寺阯及同所発見古瓦」（考古学雑誌第一〇巻第九号）

② 豊前国田川郡伊田町上伊田（田川市伊田町）廃寺（伝天台寺阯）および瓦窯

山本通氏「天台寺阯調査」（福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯）

山本通氏「天台寺瓦焼窯址の調査」（福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第七輯）

③ 豊前国築上郡友枝村（大平村）瓦窯および同郡南吉富村（新吉富村）垂水廃寺

弘津史文氏「瓦窯跡発見」（考古学雑誌第一二巻第三号）

弘津史文氏「豊前国友枝村瓦窯より発見の古瓦」（考古学雑誌第一四巻第一三号）

森貞次郎氏「友枝古代瓦窯に就いて」（築上中学校校友会誌）

イ 遺跡の概観

(一) 大分廃寺

『太宰管内志』穂波郡大分八幡社の条に次のような記述がある。

社僧坊云妙見山長楽寺円光坊天台宗也（社僧ノ坊も昔は大寺にして其子院の名も畠の字に残れり。八幡宮より七八町東の方田の中に輪蔵の跡あり。大なる礎多し。大石を切て柱をすゑたる跡あり。）

右は幕末のころの遺跡の説明である。元来大分八幡は宇佐八幡の別宮の一つで、延喜二十一年神託によって筥崎に遷され今の官幣大社箱崎八幡宮となったが、旧地にも社は存続して今日におよんでいる（今は県社）。古来筑前の六社として、宇佐八幡と並んで記録に見えている著名な神社であった。古瓦を出す遺跡は今の社地から東約九町で、礎石も右の『管内志』の記すごとく残っているから、近世長楽寺の輪蔵の跡と云われた場所に相違ない。ただしそれが果して八幡宮の神宮寺であるか、また長楽寺の廃趾か、あるいは輪蔵の趾かは記録を離れて一応吟味の必要がある。『筑前国続風土記拾遺』（文化十一年編纂着手）によれば、長楽寺は天台延暦寺の末派で、天正の兵火に焼亡したのを天正五年秋月種実がこれを再興したという。その寺は後養源寺と名を改め今八幡社境内の東隣にあり、ささやかな本堂の中に丈六の木彫観音坐像を安置している。本尊は年月久しく朽損甚しいが、鎌倉様式を示す古像である。勿論今の寺地は古い

遺阯とは思われぬが、少しく東に離れた大寺が後世社辺に移されたものと考えてもよい。なお神宮寺たる性質を推定するには出土古瓦の年代と神社鎮座の年とを比較する必要があるから、これは後に更に考えよう。また長楽寺という名称も創建当時のものか疑わしい。天台派に属する以前の寺名もまた考えられぬことはない。ここに天慶三年三月二十三日付の東大寺所蔵文書（『大日本史料』第一篇の七所載）に筑前国穂波郡の治田立券文があり、その末文に「大分寺所領公験明白也」という句がある。これも平安朝のことではあるが、大分の地に他に古い寺院がないとすれば、大分寺という名は遺跡の寺を指したものと思われる。次に礎石の配列は塔婆の柱礎と認むべきもので輪蔵等の跡ではないことは、遺跡の実状を見て何人も疑わないであろう。心礎、四天柱礎、側柱礎、計一七個すべてを残すもので、西側の一列が顚倒傾斜している他は、原位置にあり、稀に見るよい保存状態にある。中心礎には二条の溝がある点が注目されている。四天柱、側柱、礎石相互間の中心距離は七尺七寸五分（平均）の等間隔である点もまた注意されねばならぬ。

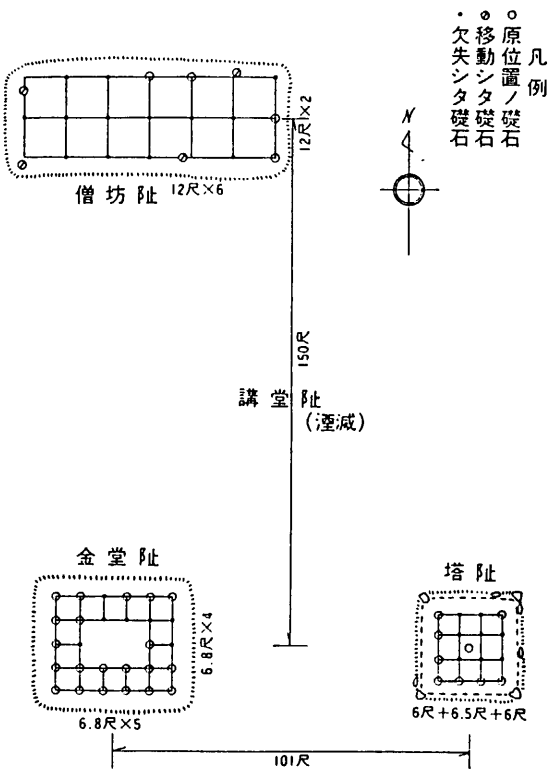
大分の廃寺阯には右の塔以外明瞭な遺構が判らないので、他は省略し、塔阯礎石の配置図と共に詳細は前記故高橋博士の論文を参照されたい。

(二) 伊田廃寺および瓦窯

これも同じく『太宰管内志』田川郡天台寺の条に『応永戦乱記』『両豊記』等をあげて、伝教大師が唐より帰朝の際、香春社に渡海指南の恩を謝し新たに寺院を建立した一つがこの天台寺と説明している。更に遺跡については次のごとき記述がなされている。

伊田原ノ地平田より少し高キ所にして夏吉村より下今任村に通ふ道筋なり。原の広さ南北二里許も有むと思はる。

東西は五町或は十町もあるべし。めづらしき平原なり。本堂大塔の跡其中にあり。平原よりは六七尺も高かるべし、礎石の大さ三尺四方許にして、其数三十五六許あり。堂跡の広さ四間に五間もあるべきか、其南ノ方十間許にあるは大塔ノ跡なり。是も同程の石を二十許並べたり中に塔ノ軫木を立たる石あり。径二尺五寸許の円穴を彫たり。深さ五寸許も有るべし、此辺すべて短き草ばかりにして木もなく又草の生ぬすき間もなし。礎石は昔のまゝに聊も動きたる様は見えず。破瓦の散れるは此辺ばかりなり、瓦も青色なるは堅牢なる事都府楼に殊ならず。坊中ノ跡と云物は多く東北ノ方にあり。東西五間南北十五間許なる処是は礎石も少し残れり。



第一図　天台寺(伊田)廃寺址礎石配置図

右のごとき状態は今日まで存続しているが、『管内志』は方向を誤認して記しているから、次にこれを正して配礎の概略を説明しよう。寺阯には三つの土壇とこれに伴う礎石群がある。『管内志』によれば塔、本堂、坊中と呼ばれているが、今日普通呼ばれている名称に従えば、本堂は金堂であり、坊中は僧坊である。そして三者の配置を按ずれば、塔が東に金堂が西に一直線上に並び、僧坊は金堂の背後(北)に少しく離れてある。金堂と塔の北方、僧坊との間には講堂があるべきであるが、今は礎石、基壇共失われている。金堂、塔、講堂が鼎立する伽藍配

置は飛鳥様式といわれ、金堂を左に塔を右にするものに、法起寺、観世音寺等の例がある。ただしこの様式のもので奈良時代に属するものもすでに注意されているが、この遺跡も後述するごとく古瓦の年代から全く奈良朝のものであることは疑いない。この特殊な伽藍配置については、別に詳細な報告をする機会があろうから、今ここには大要の説明に止めてこれを図示し、礎石の詳細についても省略に従う。

この廃寺に使用した瓦を焼いた窯阯と思われるものが、先年廃寺阯の東約三町の池辺に確認された。窯内遺存の瓦は寺院のものと同一で、完形の丸瓦、平瓦の瓦当も発掘されているから、図には窯阯のものをとった。

(三) 友枝瓦窯および垂水廃寺

かつて友枝村の瓦窯阯が発見され、その窯で焼かれた瓦当が特殊な文様を有していることが注目され、窯はその後指定史跡となった。然るに近年これと同じ瓦を使用した寺の阯が発見された。すなわち窯阯より約半里東北の南吉富村大字垂水にある廃寺である。その地には民家の一隅に寄せられた石のうちに礎石かとも思われるもののある他は、土塁の痕らしきものを残しているのみで、廃滅に近い現状である。

ロ 遺　　瓦

ここに三つの遺跡から採集された古瓦を一括して取り扱うものであるが、その全部を取り上げてそれぞれの寺院の存続年代を考察しようとするものではない。ただ三ヵ所に共通性のある一様式の古瓦を抽き出し、その共通性の由っ

て来る根源を探ろうと思うものである。

まず丸瓦および平瓦の瓦当文について見る。

(一) 丸　　瓦

第一類　大分廃寺と伊田廃寺に同一様式の丸瓦瓦当が見られる。すなわち一三顆の種子を容れる大きな中房の周囲に蓮文を有している。蓮辨帯には単純な複弁の八葉を繞らし、周りは二二顆の連珠があり、外周は隆起平縁に流暢な忍冬唐草文を囲繞せしめている。更に注意すべきは、下顎面に豊麗な唐草文を中心として外格に珠文を点列する文様の存することである。この位置の文様は外周の唐草文と共にこの瓦を特色づける要素である。両遺跡の文様は全く一致するものであるが、直径において伊田のものが少しく大きい。すなわち大分のものを少しく拡大すれば伊田のものとなる。

第二類　垂水廃寺および友枝窯阯の丸瓦は第一類と似た様式のものであるが、中房に種子一顆を減じ、外周の連珠は三顆を増し、房周の蓮文は圏文となっている。弁子も肉付きを失い描線的となり、外周縁の唐草文も渦状の連続反転する忍冬文に単純化され、下顎面の文様を欠いている。第一種の豊潤であるのに対して、これは簡素な趣を示している。右にあげた諸点によって第二類は一類の脱化したものと認められる。

(二) 平　　瓦

第一類　前記丸瓦第一類の顎面の唐草文をそのまま平瓦瓦当の主文としたものがここに第一類としてあげるものである。四周に連珠を繞らすことも丸瓦顎面文と同様である。換言すればかの丸瓦の顎面文をそのまま左右上彎するところの平瓦の瓦当の正面にあてはめたことになる。これをもっても、前記丸瓦第一類と伴って同時に製作使用された

第1表

遺跡＼瓦	丸瓦 第一類	丸瓦 第二類	平瓦 第一類	平瓦 第二類	平瓦 第三類
大分	○		○	○	○
伊田	○		○		
垂水（友枝）		○		○	

と大分の両遺跡から出土するもので、同一型式はその複製型によって製作されたものと思われる。

第三類　大分廃寺のもので瓦当面は第一類の変形文と思われる蔓草の曲線をもって塡め、下顎面は第一類の文様が力を失った状態となっている。第一類から導かれたところの二次的製品であろう。

以上三遺跡における古瓦の各種別の存否を表記すれば第1表のごとくになる。

以上を通覧するに、全く同一型の瓦当が三つの遺跡から発見されたことはないが、おのおの二つ宛の組合せによって間接に三者の連絡が考えられる。古瓦の様式よりいえば、古式の丸瓦平瓦の持つ大分、伊田が、新しい式のもののみを出す垂水（友枝）より相対的にさかのぼるものであることがいえよう。

その様式年代の前後を通じて、同一の特徴を顕示することから、三者の連関はますます緊密に理解される。その特徴というのは第一に丸瓦周縁に唐草文を有すること、第二に丸瓦、平瓦両瓦当の下顎面に文様を有することである。この二つの特徴はわが古瓦にその現われを見ないのが普通であるが、新羅の瓦においてはしばしば見受けられるものである。新羅古瓦の普遍性ともいうべき特徴を共有するところから、新羅系古瓦と呼ばれるゆえんである。ただ新羅のものであると推定される。この平瓦の下顎面にもかなり幅の広い範囲に、同一唐草文を僅かに変形した文様がある。

第二類　次にあげる平瓦瓦当は幅が比較的狭く顎面の広い特徴を持ち、正面には簡単な扁行唐草文のみ、上下帯を全く欠くもので、下顎面には極めて広い範囲に複雑な宝相華文が描刻されている。華文は左右同型の二つを配し周囲に方格連珠を繞らすことは第一類に等しい。この瓦当は垂水（友枝も同じ）

平瓦瓦当下顎の文様は短顎の部分のみ幅の狭いものであるが、ここにあげた諸例特に平瓦の第二類は著しく幅が広くなっている。この部分全部を軒先に露出せしめることは頗る冒険であるが、屋根に上げた時は軒先の瓦はすべて釘で留めたらしく、かなり大きな釘孔を穿っている遺品も現存している。

わが上代の瓦当文は、支那に起源を有する百済伝来の系統を承けてこれが主流となり進展していったものと見える。一方に新羅においては同じ源流によりながらも、独自の発展をなし、特殊な形、豊富な文様をもって、隣国日本にその影響をおよぼしたことは、よしそれがわが国の造瓦史の主流に変動を与えなかったにせよ、全く否定しえない例証が存する。その著しい一つの例として、これ等一聯の古瓦を取り扱おうと思う。

ここにまず前述の諸瓦の年代を考えておかねばならぬ。新羅古瓦の文様の時代的発展についてはいまだ確実な編年を知りえないから、ここに瓦当文と同一図柄を持ち、しかも年代の判明する朝鮮鐘について考えて見よう。前述の丸瓦第一類に似た撞座文を有し、かつ記年銘ある鐘を捜すと次の二例が得られる。

① 江原道平昌郡五台山上院寺鐘—わが神亀二年の鋳造

② 慶尚北道慶州奉徳寺鐘—わが宝亀二年の鋳造（『朝鮮古蹟図譜』参照）

これはひとり丸瓦瓦当文に限らず、平瓦の唐草文と類似の文様もあり、合せて奈良期のものと考えて誤りないものであろう。

この古瓦の推定年代は、ひるがえって遺跡の記録その他から見た年代と齟齬しないかを吟味する必要がある。

第一に大分廃寺であるが、塔阯の側柱の等間隔は奈良朝以降の遺跡（国分寺にその例が多い）に多く見受けられるところである。また文献によれば、大分八幡は神亀三年この地に鎮座されたと伝えている。この寺は古瓦の様式年代からいえ

ば奈良朝の建立と考えられ、神宮寺としての性質もそこから考え易いこととなる。近接した宮と寺は古瓦の推定年代を根拠として遂に年代的に結びうる結果となった。

次に伊田の伝天台寺阯であるが、この寺は前述のごとく伝教大師開基の伝説を持つものである。しかし寺阯について見ると、伽藍配置は飛鳥の古い様式を持っている。とはいえ金堂僧坊等の柱間の等距離である点はさまで古い年代でないことを示している。他に奈良朝に下ったこの種の伽藍配置が諸処に注意されており、また柱間距離の等しい例に相模国分寺等があるから、これも時代を降らしても差し支えないわけである。ただし平安朝までも降してよいかは疑問である。元来伝教大師開基の寺院は別伝があり。『太宰管内志』に引かれた『豊前記行』を見ると、「上香春町云云、古此処に伝教大師渡唐の前後は住れし事あり。此時より香春に寺を建初ける。昔は六坊ありしと云。其跡社の左右処々にあり。今も一坊残れり」とあり、『管内志』の編者は「今も上香春の少シ北ノ方高座石寺ノ上に小庵ありて、神宮寺の名を存せり。天台宗にして今は無住なり。是かの於二山下一為レ神造レ寺とあるによく叶へり」とこれを支持している。山岳仏教盛んならんとする平安初期の寺地としては、香春の方が適当と思われる。大分八幡の神宮寺が天台宗となったことがあったごとく、この伊田廃寺が同宗に属したことがあったかもしれぬ。また伝教大師がこれに止住したこともあったかもしれぬ。それ等をここに否定しようとするものではない。ただ伝教大師時代の創建すれば、前の古瓦の推定年代と矛盾することを述べたのである。

垂水廃寺の年代については、古瓦の他に手懸りとなるべき文献資料が全く欠けている。

ハ　遺跡地の連絡

新羅様式の古瓦によって結ばれるこれ等三つの廃寺が、往古一つの交通路によってたがいに連絡されていたことを

注意したい。

王朝時代豊前方面から大宰府に到るには門司附近より北海岸に沿って行く路と、築上郡、田川郡、嘉穂郡を通る道の二つがあった。『延喜式』の駅名によって両官道の存在を知るのであるが、後者が三廃寺を結ぶ道路である。いま左に関係の駅を『延喜式』から拾って見ると、宇佐、下毛、築城、田河（以上豊前）、綱別、伏見（以上筑前）の名があげられる。右のうち今日に地名を伝え旧位置の判明するものは、

宇佐　豊前国宇佐郡（宇佐市）宇佐町

築城　豊前国築上郡築城村（築城町）

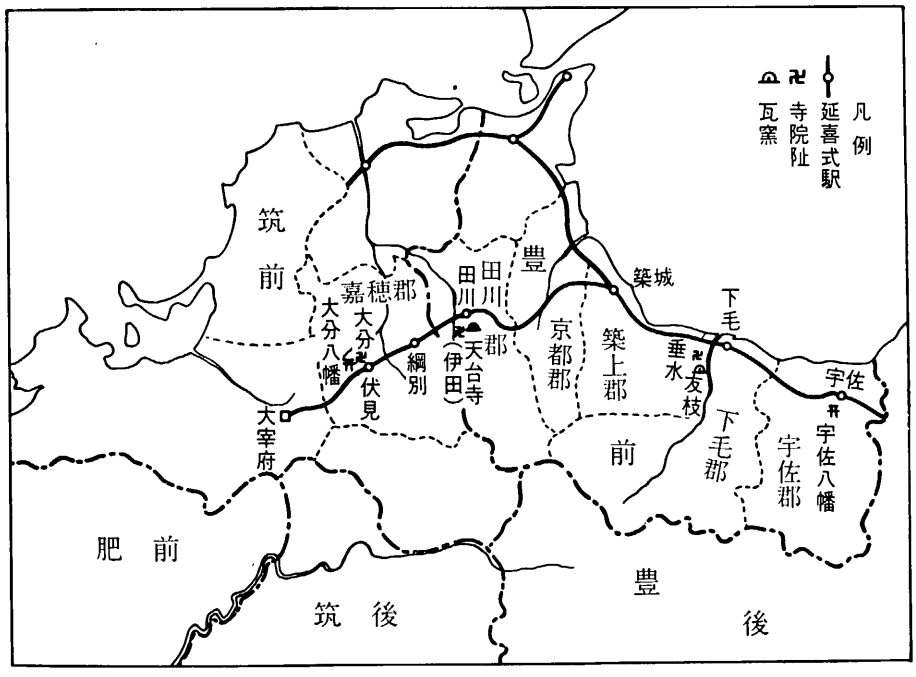
綱別　筑前国嘉穂郡庄内村（庄内町）綱分

右の三駅である。ただし下毛、田川は今の郡名に残り、下毛は宇佐と築城の中間に、田川は築城と綱別の中間に当っているから、およその位置は自然推定できる。道程より考えれば、下毛駅は垂水廃寺に近い郡界附近にあり、田川駅は香春附近と考えて大過ないと思う。最後の伏見駅については次のごとき史料がある。

東大寺所蔵観世音寺文書、天慶元年四月五日付施入状（『大日本史料』第一篇ノ七所載）に「家地壱院在伏見郷高田村」とあり、高田村は現在の大分村の役場所在地大字高田の名があり、伏見駅の位置も見当がつく。ここから山越しで大宰府に出ることができる。

以上の駅名から王朝時代の官道を考えると、到津（今の北九州市小倉区到津）から宇佐に至る途中築城駅より西に分れ今川に沿って遡上し、香春の平野にで、丘陵の間を通って大分より山越しに大宰府に出るのである。その場合は垂水廃寺は下毛駅に近く（恐らく下毛より築城に至る官道に沿う）、伊田廃寺は田河駅に近く、大分廃寺は伏見駅の近傍に所在していたのである。

更にこの宇佐より大宰府に向う路に当って、大分八幡が存する点も、宇佐八幡宮の北九州方面における発展をうかがうに興味ある事柄である。宇佐の古い神領が筑豊のこの駅路に沿ってあり、特にその路線中の文化のたまりである駅の所在地、あるいは三つの廃寺阯に当っていることを見逃してはならぬ。これを前にしては宇佐八幡後にしては伝教大師の因縁より天台宗寺院への統合が著しく見える。ここにまず宇佐宮の神領をうかがう資料として、鎌倉初頭までの領地の四至由緒を書いた『宇佐大鏡』という記録がある。ついて関係事項を見るに、垂水地方では旧上毛郡内の所領三百余町のほか多布原田地五〇町とあるが、この多布原は今の唐原村で廃寺阯の隣村である。垂水より約一里、山国川の河口に、宇佐八幡と関係の深い古社古表八幡の所在していることを注意しておこう。田川郡では伊田は勾金庄という神領に含まれていたらしく、『応永戦乱記』に「勾金庄天台寺」と見えている。勾金庄（田数一三〇町）は到津庄（ここにも到津八幡があり、豊前の大駅であった）と並んで豊前における二大神領であっ



第２図　北部九州地方要図

た。更に綱別駅附近は綱別庄と呼ばれる宇佐神領である。なお西すれば大分八幡のある穂波郡では椿庄（ここにも八幡古社あり）が神領である。

次にこれ等の八幡宮に連関して、最澄の祈念奉礼による天台宗寺院の建立等が行われている。最澄は、渡唐に先だって筑紫の宇佐始め八幡諸社に海路安穏を祈った。帰朝の後筑紫に下って、あるいは神宮寺に経典仏像を納め、あるいは新規に寺院を建立している。

宇佐『僧綱補任抄出』弘仁五年伝教大師年四十七。為レ遂二前渡海願一重向二筑紫国一。修二諸功徳一造二等身白檀千手像一軀一大般若経二部法華経一千部。又奉二為八幡大神一於二神宮寺一自講二法華一。

香春『続日本後紀』延暦中遣唐請益僧最澄躬到二此山一祈云願縁二神力一平得二渡海一即於二山下一為レ神造レ寺読レ経。

竈門社『叡山要記』延暦二十二年十月廿三日、於二大宰府竈門山寺一、為二四船平達一敬作白檀像薬師仏四体高六尺余。其名号二無勝浄土善名称青祥王如来一。又講二説法華経花厳光明等一云々。大師帰朝弘仁五年春、為レ遂二渡海願一於二筑紫国一造二千手菩薩像一体高五尺一。

最後にあげた竈門神社は玉依姫を祭神とする社であるが、八幡神の伯母神という信仰があり（「八幡愚童訓」等に出ず）、平安朝すでに八幡宮の末社たるべきか否かが朝廷で議定された程である（『百練抄』長治二年六月二日の条）。平安朝を通じて大宰府に強力な地盤を持って活躍する天台宗の寺院としては、まず竈門神社の神宮寺たる宇智山寺（別名大山寺）をあげねばならぬ。香春の神宮寺もまた最澄の祈念により天台寺院として建立され、大分八幡の神宮寺も同じく天台宗であり、これにも最澄の同様な伝説が見える（『嘉穂郡誌』）。かくして最澄の教化は、宇佐より大宰府に通ずるこの沿道におよんだことを知りえたのである。

二　新羅との関係

内地において類の少ない新羅直写の古瓦がこの北九州の一帯に認められる事情は上述の通りであるが、これを社会一般から考察して、いかなる事情からかかる事象が顕現したかを考えよう。

北九州が新羅に近いという単なる地理的関係では、充分にこの地域的な特殊性は説明できぬ。ここにしばしばいわれるごとく、豊前地方が帰化人系の住居地であることも一応考慮しておかねばならぬ。正倉院文書中大宝二年の戸籍断簡に、豊前国上三毛郡塔里（垂水の近く唐原村がその遺名と思われる）、中津郡加目久也里（局地不明）のものがあり、その姓に「秦」あるいは「何勝」と称する者が絶対多数を占めているのがその論拠である。しかしこれ等は部の一般性質が示すように、彼等がすべて帰化人あるいはその子孫とは限らぬ。とはいえこの特殊な姓の人々は帰化人でなくとも、帰化人と幾許かの関係に置かれ、その関係の一つが瓦の製作に現われるということも否定し去るわけにはゆかぬ。なおこの「勝」なる姓を持つものに京都郡の人「楉勝受比」なる名が見え（『続日本紀』神護景雲七年二月十日庚戌の条）、その分布が北におよんでいることをうかがわしめる。

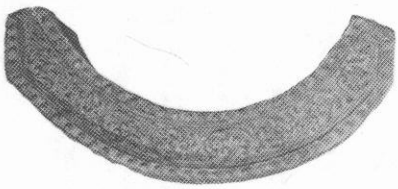
更にここに考うべきは、伊田廃寺に近い香春の神が蕃神なる点である。同社は式内古社で神名帳には「田川郡辛国息長大姫大目命神社」と書かれている。『豊前国風土記』逸文に「田川郡鹿春郷、昔新羅神自度二来此川原一即名曰二鹿春神一」と見え、鎮座の由来を物語っている。伊田廃寺が新羅神を祀った香（鹿）春神社の神宮寺とすれば、寺の建築の一部に新羅の影響が現われることも理解できる。更に最澄が渡海を新羅神たる香春の神に祈ったという背後には、当時新羅の渡支海上権の絶対的支配が考えうる。新羅と関係深いこれ等の土地に、新羅風の瓦が現われることはむしろ当然であろう。そしてそれがある理由によって―そのうちには宇佐八幡宮による媒介も考えられなくはない―、一つの



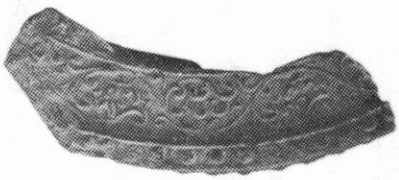
天台寺軒丸瓦



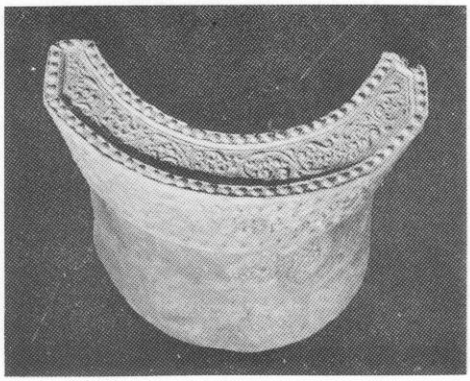
天台寺(窯趾)軒丸瓦顎面



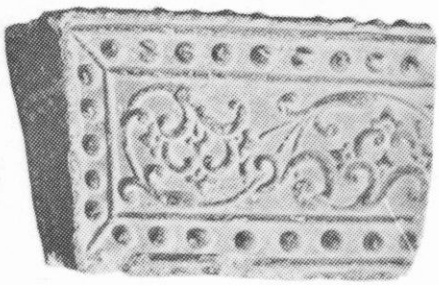
天台寺軒平瓦



天台寺(窯趾)軒平瓦



天台寺軒平瓦(復元瓦)



同上顎面

第3図　古瓦写真(1)



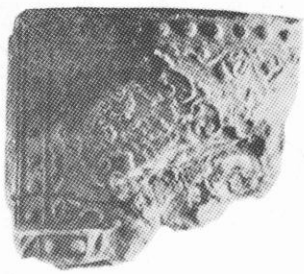
垂水廃寺軒丸瓦



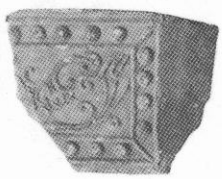
垂水廃寺軒平瓦



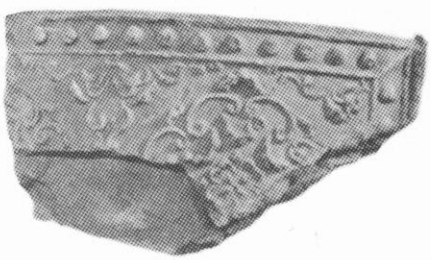
大分廃寺軒平瓦



同上顎面



同上顎面



垂水廃寺軒平瓦顎面

第4図　古 瓦 写 真 (2)

交通系統に従って伝播され、文化圏帯の一様相を具現しているものである。その伝播に当っても発生地と同様な社会状態の存在は、分布拡大を容易ならしめることは直ちに了解できるであろう。

なお本文においては三つの廃寺並びにその瓦窯から発見された新羅様式の瓦のみを抽出して考察したのであるが、なお単弁の瓦当文を持つ丸瓦が垂水廃寺と伊田廃寺（並びに瓦窯）とから見出されている。九州地方の奈良期に属する瓦がほとんどすべて複弁系のものであるのに、注目すべき特殊様式の瓦を出すこれ等の遺跡はまたかかる別の系統の古瓦を伴出する点で二重の重要性が認められる。元来単弁丸瓦は百済より伝えられわが飛鳥時代に盛んに用いられたものとせられている。しかし如上の遺跡に見られる単弁瓦は必ずしも前記新羅様式の瓦よりも古いとは断言されぬ。伊田の瓦窯より両種の瓦が伴出している一事は、同一年代の製作を暗示するものである。この種の単弁瓦は九州における分布状態やこれと組み合される平瓦文様等の問題と共に別の機会に詳らかに論じたいと思っている。

（補記）

一、豊前における新羅系瓦の新資料を加えて論攷したものに次の論文がある。小田富士雄氏「豊前に於ける新羅系古瓦とその意義―九州発見朝鮮系古瓦の研究―」史淵第八五輯、昭和三十六年五月二十五日刊。

一、天台寺趾の礎石は、戦時中グライダー練習場となり、全部撤去され、穴を掘ってまとめて埋められた。貴重な遺跡の湮滅は惜しみて余りある。

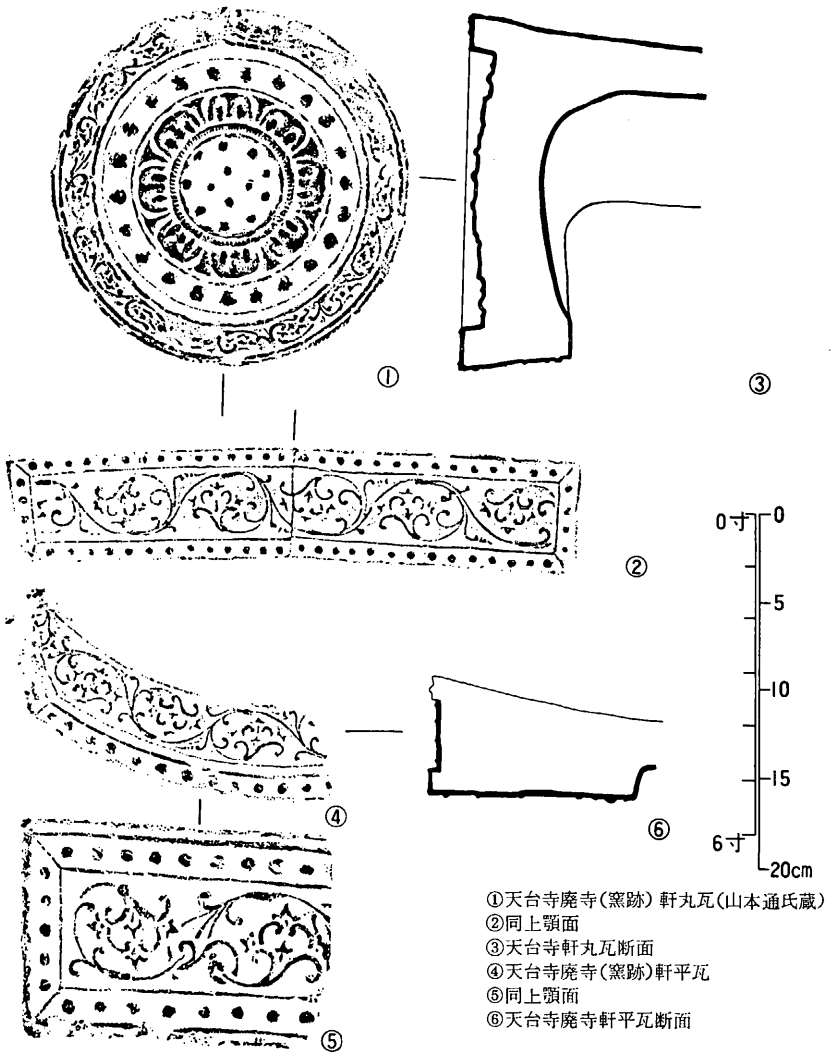
一、本稿につづいて大分廃寺に関する論文があいついで発表された。

児島隆人氏「筑前国大分廃寺創立に関する一考察」考古学第一〇巻一二号、昭和十四年十一月刊。

斎藤忠氏「大分廃寺とその出土古瓦」史蹟名勝天然記念物第一七集第八号、昭和十七年八月刊。

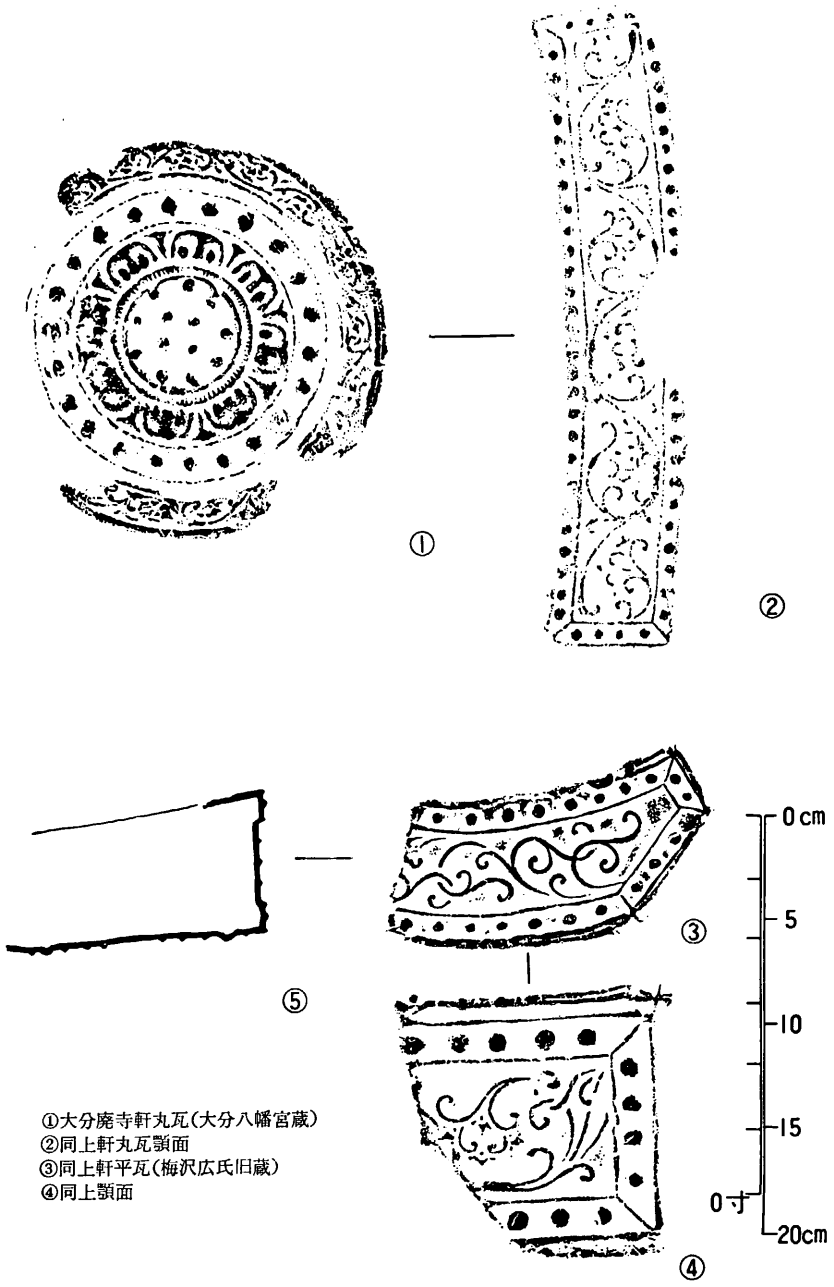
一、本論文の再版にあたって古瓦の挿図作製に便宜を与えられた左の諸氏に感謝の意を表する。

山本通氏、大分八幡宮、筑穂町公民館（梅沢氏旧蔵の古瓦は現在この公民館に陳列されている）。



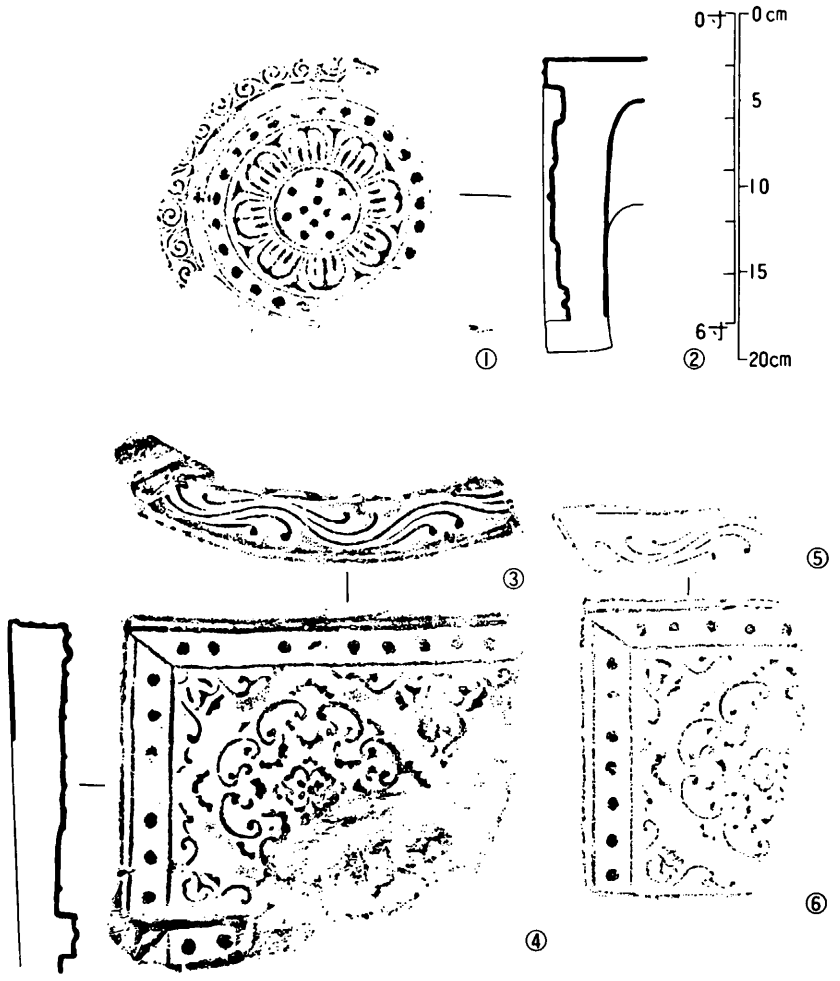
①天台寺廃寺(窯跡) 軒丸瓦(山本通氏蔵)
②同上顎面
③天台寺軒丸瓦断面
④天台寺廃寺(窯跡)軒平瓦
⑤同上顎面
⑥天台寺廃寺軒平瓦断面

第5図　古 瓦 拓 本 (1)



①大分廃寺軒丸瓦(大分八幡宮蔵)
②同上軒丸瓦瓦当面
③同上軒平瓦(梅沢広氏旧蔵)
④同上瓦当面

第6図　古 瓦 拓 本 (2)



第7図　古瓦拓本(3)

『九州考古学論攷』
鏡山猛著
昭和四十七年八月　吉川弘文館

天　台　寺　跡

（上伊田廃寺）

田川市文化財調査報告書

第 6 集

平成２年３月31日

発　行　　田　川　市　教　育　委　員　会

田　川　市　中　央　町　1　番　1　号

印　刷　　正　光　印　刷　株　式　会　社